
白い記憶 ～聖少女との日々～

霧島卿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い記憶　　～聖少女との日々～

【Nコード】

N9009N

【作者名】

霧島卿

【あらすじ】

赤い瞳に白い肌と髪。普通と違う姿のエロール・レイスは、皇位継承者でありながら不遇の人生を歩んできた。ある日、彼は皇帝である父から呼び出され上洛し、結婚を命じられる。その相手は、教皇の娘である八歳の少女だった。

第一話　（婚姻）

狭くて殺風景な部屋は、病人が寝るような簡素な寝台が一つ置いてあるだけで窓すら無く、まるで独房のような冷たさに満ちている。その寝台から、ガウンを纏った男が這い出てくる。男は何度か瞬きした後で立ち上がり、靴を履いてから部屋を出た。

早朝だというにも関わらず、全ての窓がカーテンで覆われている廊下は薄暗い。それでも男は慣れ親しんだ館の通路を蹴くことなく歩いた。しばらくすると前方から女性が歩いてきた。男の館で働いている唯一の使用人だった。

「おはようございます、エロール様」

自らの雇い主の存在に気がついた女使用人は、そっと端に寄り、恭しく頭を下げた。

「ああ、ティファヌ、おはよう」

一使用人にも、エロールは挨拶を欠かさない。自分を助けてくれる人間に対しては、最低限の礼を尽くすことが、エロールの方針だった。それでも伯爵であるエロールはそれ以上の言葉は交わさずにティファヌを横切った。

しばらく歩き、それから一番大きな扉の部屋に入った。後ろからはティファヌが追従してくる。

「ティファヌ、服を頼む」

「はい、エロール様」

そこは衣裳部屋だった。ティファヌはエロールのガウンを脱がせて畳んだ。彼女は慣れた手つきで真っ白なズボンをは穿かせ、同じく真っ白な上着を着せた。

「エロール様、ご報告があります。今朝早くに、陛下の使いの方から伝言を預かりました」

「父上様か……」

エロールの表情が曇った。一番距離を置いている人間から呼び出

されるのではないかと不安を覚えた。

「今日の晚餐時に上洛せよとのご命令です」

雇い主のわずかな表情の変化を見逃さなかったティファアンヌは、逃げられないようにわざと『命令』という言葉を選んだ。言い訳が出来ないように楔くさびを打ったのだ。

「そうか、父上が私をお呼びか……」

二人だけで会うならば、嫌ではあるが我慢はできる。だが、父上と会うことになれば、仲の悪い異母兄弟たちとも顔を合わせてしまうかもしれない。第三皇子である彼が特に会いたくない二番目の兄に会う可能性もある。体調不良を理由に断つても、エロールを人間なら咎めはしないだろうが、幾度と無く続けてしまっっては心象が悪くなる。

それ以前に、皇帝からの命令に背くことは、いくら息子でもできない。

「ああ、分かったよ。日の入り時に出発するよ」

「かしこまりました」

ティファアンヌは一礼してから部屋を出た。取り残されたエロールは髪型を確認するために鏡に近づいた。鏡は、彼が異母兄弟たちの顔の次に見たくないものだった。それでも上洛する以上はしっかりと整えなければいけない。

「私も今年で二十歳だからな、そろそろ婚姻させられるのだろうか」
帝国で最も頭脳的に優れていると噂される程の男であるエロールは、父親が自分を呼び出した理由をだいたい理解していた。二人の兄のように、古くからの家臣である貴族の娘と契りを交わさせるつもりだろう。

「最も、こんな私に嫁ごうとする女がいるものかな」

乾いた自虐の笑いを浮かべて鏡を見る。

肩まで届くほどの真っ白な髪に、雪のように白い肌、真っ赤に充血した瞳を持つ自分の姿が寸分のくるい無く映っていた。

城門を馬車で通過し、場内に通じる門の前で降りたエロールは、そこからは一人で歩いた。案内しようとした官吏には少し握らせて下がらせた。

およそ一年ぶりの場内は何も変わっていない。

建国の英雄五人の肖像画。

有名な彫刻家がこしらえた巨大な石造。

歴代の皇帝を祭る祭壇。

部屋振りもそのままだった。皇帝が食事をするための部屋の前には、扉を挟む格好で二人の近衛兵が立っていた。

「陛下はそこか」

おもむろに話しかけたエロールに、二人の近衛兵は同時に目を細めた。身の前に現れた奇妙な外見をした男を怪訝に見ている。だが、しばらくして第三皇子だと気付いたらしく、慌てて頭を下げた。

「はっ、皇帝陛下はただいま晩餐の最中でございます！」

「入るよ」

「はっ、どうぞ！」

皇帝の子息の顔を忘れるのは近衛兵としては失格だが、一年に数度しか上洛しないエロールは咎めようとしなかった。もちろん手間だったからではあるが。

「失礼します、父上。エロール・レイス・アルチェーロ・ベネレスクでございます」

一年ぶりにエロールは頭を下げた。返事はない。恐る恐る顔を上げると、一番会いたくない男が長机に一人で座って食事をしていた。異母兄弟がいないことに、彼はひとまずは安堵した。

「父上、どのようなご用件でしょうか」

再度エロールが呼びかけると、男は顔だけを向けてきた。深いしわが刻まれているにも関わらず、黒く生え際の整っている髪を持つ、いかにも皇帝らしい風貌の老人は、久しぶりに顔を見た息子に挨拶

もせずに一言だけ言った。

「……近いうちに、お前には婚姻してもらおう」

推測は当たっていた。それでも改めて告げられると少し身体が硬くなった。

「相手は、教皇の一人娘だ」

「教皇様のお嬢様ですか」

これは意外だった。貴族の娘が相手だとばかり考えていたエロールは虚をつかれて唇をかんた。だが、それ以上に意外なことに気がついてしまった。

「お待ちください、教皇様のお嬢様となると――」

二人の兄の嫁は年下だった。だが、せいぜい二つか三つだ。ほとんど同じ年のようなものだ。

しかし。

「ロマリア様はまだ――八歳ではありませんか」

二人の年の差は十二だった。

それでも皇帝は何も言わない。ただ沈黙しているだけで、無言で圧力をかけてくる。いくらエロールが講義しても決定事項は覆らないのだ。

第二話　く聖少女との邂逅く

王宮から館に着いた頃にはすでに周囲は漆黒の闇に包まれていた。すでに近隣の村からは物音一つせず、櫓から見張る兵士以外には人氣が無い。普段から陰鬱な影を帯びている自らの館だが、外から見ると改めて不気味だと、エロールは自嘲した。まるで奇妙な外見をしている自分のようだ。

「お帰りなさいませ、エロール様」

まるで計算されたように館の扉が、ティファヌによって開かれた。彼女は燭台しよくだいを片手に頭を下げた。他に明かりが無いためか、蠟ろう燭一本でも眩しく感じられた。

「手間を取らせたな、ティファヌ」

「いえ、とんでもございません」

二人は並んで歩いた。使用人が主人と肩を並べるのは無礼極まりないが、エロールは伝えたいことがあったので何も咎めることはしなかった。階段を上り二階へ登り、それから一番奥の部屋へたどり着いた。独房のようなエロールの寝室だった。

「座りなさい」

部屋に唯一設置されている寝台に腰掛けたエロールは、隣をティファヌに進めた。彼女は逡巡したが、失礼します、と一礼してから座った。

「ティファヌ、君は独り身だったか」

「……そうですが」

何の脈絡のない問いに、ティファヌは違和感を覚えた。我が聡明な雇い主が意味の無い戯言を言うために、普段は入室を禁じている寝室に呼び出すとは思えなかった。ならば何かしらの意図があるはずだが、彼女には推測できなかった。

考えあぐねているうちに、エロールから問いの意味が明かされる。「実は、婚約を命じられた。相手は教皇の一人娘であるロマリアと

いう少女だ」

「婚約……ですか」

一瞬にしてティファヌの表情が強張る。第三皇子から結婚に関して相談を受けると思わなかった彼女としては、二の句がつけずにいた。自分が未婚であるからではなく、王族の婚姻について自分のような一使用人が相談を受けていいものだろうかという役不足感が彼女を困惑させた。

「確かに、そろそろ妻を娶^{めと}る時期だろうとは考えていた。もちろん覚悟もしていたよ。だが、いくら私でも、八歳の少女を妻に迎えるとは仰天したよ」

「は、八歳——」

声を張り上げそうになるのを、ティファヌは必死で堪えた。それでも衝撃の年齢に、まことに無礼ながら皇帝陛下の考えを疑わざるを得なかった。

少女と聞いてはいたが、十八歳程度だと考えていたが、それが普通だ。どれだけ若くても十五歳を迎える前に婚姻するなど、ティファヌが知る限りでは前例がなかった。八歳といえば、まだ初潮前。自分が八歳の頃には、まだ両親と仲良く寝ていた、彼女にとって八歳とはその程度の年齢だ。そんな穢れ無き少女が、一回りも年上の男の妻になる。

エロールを嫌っているわけではないティファヌだったが、今回ばかりはそのロマリアという少女に同情した。

「無論だが、父上の決定を覆せるだけの立場ではない私だ。明後日からは、ロマリアという少女がこの館で生活することまで決められてしまったよ」

「明後日ですか……」

たとえ第三皇子だろうと皇帝には逆らえない。エロールが少女との婚姻を望んだわけではないのだ。一瞬でも雇い主を軽蔑した自分を恥じ、ティファヌは声にせず謝罪した。

「それで、必要なものが増えるはずだ。面倒だろうが、明日までに、

女性から見ても必要だと思われるものを準備して欲しい。金額を気にせず、高級品を選びなさい。相手は教皇の一人娘だ、私のような化け物とは育ちが違う」

伝えることを伝えたエロールはそれ以上は口を開かず、着替えすらせずに寝台に潜り込んだ。頭まで隠してしまった彼の表情はそれ以上窺い知ることはできなかった。

時間は矢のように過ぎた。

緊張しているのだろうか、エロールはいつもより早く目が覚めた。それでもすでにティファヌは館の掃除を終えていた。働き者な使用人に、エロールは改めて感嘆した。彼女はどれだけの時間を眠ることができるのだろうか。

「おはようございます、エロール様」

存在に気がついたティファヌはまだ日が昇ってもいないのに反射的にカーテンを閉めた。少しの日光でも、エロールにとっては好ましくないからだ。

「ロマリア様は、明け方には到着なさるそうです。まだ時間はありますが、準備を致しましょう」

「ああ、頼むよ」

着替えを済ませる前に、今日は朝から身体を洗うために水場に向かった。綺麗好きなエロールは普段から欠かさなかったが、いつも昼ばかりで朝に行うのは初めてだった。水が通常よりも冷たいからだ。

案の定、水は冷たく、瘦身のエロールは何度も身体を震わせた。髪を洗い終える頃には震えが止まらなくなっていた。ティファヌは素早く全身を拭き、厚手のガウンを羽織らせた。

「着替えの後は、御髪を整えさせていただきます」

「すまないな」

いつも通りの白い上下に身を纏^{まと}い、化粧台に座るまでに要した時間はずかだった。すでに震えが収まっているのもティファヌの行動が迅速だったからだ。

「このような私の姿をみた少女は、どのような反応をするだろうか」
独り言のように呟くエロール。ティファヌは返事をしない。

幼いころから外見で差別を受けてきたエロールは時々このような独り言を口にする。一見すると相手の反応を楽しみにしているようだが、実際には逆で、一切触れて欲しいとは思っていない。その重いと裏腹に、誰もが初見では表情を強張らせる。ティファヌですらも最初は奥歯をかみ締めたほどだ。

「怖がって泣かなければいいが」

そんな台詞を口に出しているが。本当に泣きたいのは自分自身だということのエロールはまだ知らない。彼は物心ついたところから一度も泣いたことがなかった。

約束の時が来た。

エロールはロマリアが待つ部屋へゆっくりと赴く。相手はまだ子ども、どのように相手をすればいいか短時間で、その聡明な頭脳を駆使して考える。

数手考え、その中から一番無難な方法を選んだ。優しく語り掛けつつ徐々に心を開いてもらうのが一番だろう。

扉の前に立ち、それから再度確認を行う。そして扉を軽く叩いた。

「どうぞ」

消えそうなか細い声が聞こえた。少し舌足らずな声だ。

「失礼する」

貴族としての威厳を見せるかのように迷い無く扉を開いた。十人は楽に座れる長机に少女が座っている。幸運なことに背を向けていた。

「こんにちは、ロマリア」

エロールは椅子の隣に寄り、ゆっくりと腰を折った。そして肩まである金髪を生やしている小さな頭を撫でてやった。

「あっ——」

ロマリアは一瞬驚いたように身体を震わせたが、すぐに目を閉じて大人しくなった。

「私がエロールだよ。ほら、こっちを向いて……」

まだ柔らかい頬を両手で支えるように持ち、ゆっくりと顔の向きを変えた。それでもロマリアはまだうつとりと目を閉じていた。

「どうしたんだい、目を開けてくれないかい」

顎^{あご}ラインを撫ぜ、そのまま首まで右手を滑らせる。小さな肩に行くと、可愛い鎖骨に当たった。するとロマリアは覚醒した。

「あっ、すみません」

「——あっ、ああ」

目が開かれた。それだけで、ロマリアの魅力が膨れ上がった。まだ幼い顔立ちながら、金色の大きな瞳と形のいい鼻と口が、まるで陶磁器のように美しい肌をした小顔に納まっている。触っていて分かったが、その髪はエロールよりもさらさらしていた。手櫛をしても、指の間から髪が逃げるように素通りする。本当に八歳だろうかと思ってしまうような、どこか神聖なほどの清楚な雰囲気を出している。

二人はお互いに見つめあってしばらく沈黙した。

ロマリアはエロールの特異な外見を怖がるどころか、まるで気にしていないようだ。彼女の視線は全くぶれることなく一直線にある部位を見ている。まるで極限まで集中した剣の達人のような眼差しに、言いようの無い威厳を感じたエロールは、彼女を子どもとして扱おうとした自分のあさはかさに笑いたくなった。

「ところで——」

子ども扱いした口調は止めよう。そう決めて口火を切ろうとしたエロールだったが、やわらかい少女の温もりにそれは憚^{はげ}られた。

「——んっ」

自らの半分も生きていない少女によってエロールは唇を奪われた。それでも怒りや驚きは湧いてこない。むしろ喜びに似た感情が、自らの心の水面に波紋を生んだように彼は感じた。

第三話　　夜の小川で

陶磁器のように白い肌は、まるで熟れた林檎りんごのように真っ赤になっている。自ら唇を離れたロマリアは恥じらいながらも、まだ残る余韻に浸っている。一見すると真面目だが、すぐに何かに気を取られてしまう性格のようで、正面で放心しているエロールのことなど眼中にないようだ。

「――ロマリア、私の話を聞きなさい」

忘我していたエロールが我に返った。彼は唇をハンカチでそっと拭い、それからロマリアの肩を優しくゆすった。

「あっ――」

同じくロマリアも覚醒した。その途端に自分の行動を思い返してしまったのだろうか、顔だけでなく耳まで赤くなっていく。目線はどんどん下がり、ついには膝を抱えて丸まってしまった。

「ごめんなさい」

年相応の台詞が聞こえ、エロールは少し安堵した。初対面の男性の唇を奪うような子どもなら、子どもらしくない言葉を使って話すのだろうかと心配したが杞憂だったようだ。相手がまだ子どもなら、やはり子ども扱いすることに抵抗はいらない。

「どうして、私にあんなことをしたのかな、ロマリア」

「えっ、それは、その……。私は、伯爵様のお嫁さんだから……」

「お嫁さん……か」

自らの口元が緩んでいくのを、エロールは隠そうとせずに小さく苦笑した。

「あ、あの、どうして笑ってらっしゃるのですか？」

「いや、すまない。お嫁さんという幼稚な言い回しが、君のような子どもには似合っていたからつい」

「そ、そんな、私はもう子どもじゃ――」

「ほら、いい子だよ」

エロールは再び頭を撫ぜた。今度は馬鹿にするように、優しいことばをかけながら長く撫でた。ロマリアは抵抗しようとするが、子どもとしての本能というべきものには逆らえず、徐々に心奪われていった。

「さあ、館を案内してあげるから、おいで」

「はい、伯爵様」

完全にロマリアを籠絡したと考えたエロールは彼女を伴って部屋を出た。

自分の寝室以外の二階部屋を全て案内したエロールは、ロマリアの手を握りながら階段を降りていた。すると、階段の袂でティファヌが立っていた。彼女は一礼してから道を開けた。

「ああ、忘れていた」

階段を降りてしまってからエロールは、まだティファヌを紹介していないことに気が付いた。今後この館で生活することになれば彼女のことも教えておかねばならない。

「紹介するよ、彼女はティファヌだ。私の身の回りの世話をさせている使用人だ」

「ティファヌです、ロマリア様」

主よりも高い場所にいるわけにはいかないティファヌは素早く二人の元に近づいた。

「ティファヌさんですか？」

同じ女性とはいえ、子どもと大人である二人の身長さは歴然としていて、ロマリアは完全に見上げる形となった。ブロンドの髪を腰まで垂らした、物静かで大人しい印象を受ける顔立ちの美人がいた。夫の周囲にはこんなに綺麗な女性がいて、自分のような子どもが相手にされるか不安が生まれた。

「どうぞ、私のことは呼び捨てでお願いします。身分が違いすぎま

すので」

ロマリアの目線にあわせるかのようにティファヌは身を屈めた。大人の女性特有の香りが鼻をついた。

「よかったね、ロマリア。同じ女性なら、君も相談できるだろうから頼りにするといい。もつとも、気のような子どもが、ティファヌのような大人と会話が弾むとは思えないがね」

「わ、私は、子どもじゃありません――」

「いい子だよ、ロマリア」

一見すると嫌がらせをしているようだが、エロールからすれば、ロマリアの頭を撫でることはそれなりに嬉しいことだった。綺麗な金髪が指の間をすり抜ける感触は気持ちがよく、髪が揺れることで甘い香りを楽しむことができるからだ。

「さあ、今度は一階を案内しよう。夜には外を案内してあげるよ」

雲ひとつ無い星空だった。

柔らかく小さな手を引くエロールは、ときどきロマリアの表情を確認しながら進んだ。すでに館からはかなり離れていた。夜間にこれ以上遠出するのは危険だと判断し、近くの小川で腰を下ろした。

「伯爵様の領土は、あの町までですか？」

指差された先には、エロールの領土で最も栄えている町だった。

彼が始めてこの領土を与えられた四年前に興した町であり、その当時は細々と商いをしていた寂れた町だった。だが、エロールの指導の下で財政再建に取り組んだ結果、数年で大陸有数の商業町に発展した。

重税を課すだけの領主もいるが、そんな愚かなことをせずともこの方法なら税を割高にすることさえできた。それだけでなく、領民からもいい領主として見られる利点がある。それにより受けられる恩恵はさまざまあり、それらもまた、エロールは聡明な頭脳を駆使

して有効活用していた。

「いや、違うよ。私の領土はあの山の向こうまでだよ」

「あの山までですか？ 伯爵としての領土としては少し広いですね」
ほお、とエロールは関心した。さすがに教皇の一人娘となれば爵位についても詳しい。だが、そんなところも子どもらしくなく、少し意地悪をする。

「教皇領と比べれば小さなものだろう、教皇の一人娘殿」

「そ、そんなつもりで言ったわけではないです！」

「いいんだよ、私は気にしていないから」

露骨に爽やかな笑顔を浮かべながらさらに苛める。

「子どもの言ったことには寛容な態度で接するのが大人だからね」

「わ、私は……」

ロマリアの声が弱々しくなる。彼女は身体を丸めて俯いた。

「ほら、子どもは泣いてもいいんだよ。いい子だね、ロー」

「私は子どもじゃありません！」

決して大声で無いにも関わらず、その声はエロールに響いた。いや、正確には彼の心に響いた。

「こ、子ども扱いされたくないから、初対面で唇を奪ったんです。

伯爵様も嬉しそうにしてらしゃいましたよ？」

「――っ」

「もしも、私が子どもなら、伯爵様は子どもに興奮するような変態だということですか？」

変態。

その言葉が、エロールの理性を一瞬だけ吹き飛ばしてしまった。

「――なら、君が大人か試してみよう」

「えっ――」

醜態に笑うエロールの姿に、ロマリアは脅えた。次の瞬間、彼女は力づくで押し倒された。

「君が大人なら、私を受け入れることができるだろう。さあ、見せてみなさい」

「えっ、それって――」

その言葉の意味するところをロマリアは理解していた。婚姻が決定してすぐに色々な教育をされたためだ。だが、それがこれほど早くにしなければいけないとは思っていなかった。

「ほら、やはり君は子どもだ」

まるで自分を慰めるかのようにロマリアの細くて白い足を撫でていたが、エロールは興ざめしたように解放した。最後に太ももを一度舐めた。

身体の自由を取り戻したロマリアは涙が湧いてくるのを感じた。

「やっぱり子どもだ、大人はこの程度で泣きはしないよ」

最後につきはなつように言ったエロールは、これで確実に破談になると確信した。これでこの穢れ無き聖女は自由になれる。自分のような化け物じみた外見の男に抱かれるよりは、せめて末の弟にでも抱かれたほうが幸せだろう。自分には、この少女を汚さない自身が無かった。

だが、それでもロマリアは逃げなかった。

「だめです、私を子ども扱いするかぎり、伯爵さまから離れません」
背後からエロールを包み込むように、ロマリアは両腕を回して抱きついた。同時に甘い香りがエロールの理性を復帰させた。

「……すまない、ロマリア」

彼は自分の行いを恥じた。

自分だけが不幸だと考えていた自分を冷笑した。

自分と同じほどに不幸な少女がすぐ傍にいたことが、彼に温もりを与えていた。

第四話　く家族のためにく

小川での会話から数日後。エロールとロマリアは同じ机で朝食を食べていた。隣ではティファアンヌが直立不動で控えている。

「ロマリア、残さず食べなさい。大人ならできるだろう」

ロマリアはエロールが気になり、満足に食事が進んでいない。と言うのも、彼の服装が余所行きの正装だったからだ。

「あの、伯爵様……」

「どうしたんだい」

「その服ですけど……」

貴族は普段着ですら高級な品を選んでいる。エロールも例外ではなく、普段から身なりには気を使っている。だが、今日の服は全体的に豪華だった。白を基調としていることは変わらないが、ボタンには綺麗な彫刻が施されており、清潔なだけでなく気品がある。指には王家の紋章があらわれた指輪がされている。彼が皇位継承者の一人であることを表すものだ。

「ああ、いつもと違うから驚いているんだね。今日は、久しぶりに仕事をしなければいけないから、それなりの服装でないといけないんだよ」

「お仕事ですか？」

「まだ教えていなかったね、私は正五位上ていごくじょうしやちやう帝国図書長の位を頂いているんだよ」

「図書長ですか？」

身分不相応だと思った。皇帝の子息であり第四皇位継承者である人間が任されるような仕事ではない。この程度は、庶民上がりの官吏が任されるものだ。彼の兄弟は、国を動かすほどの要職に就いているというのに。

「まともに仕事するのは四年ぶりだよ」

「よ、四年ぶりですか？」

さらりと言ったようだが、ロマリアからすれば軽く受け流せる言葉ではなかった。

「どうして、四年間も休職されていたのですか？」

いくらなんでも四年も休職することなどありえない、エロールが病弱な部類に入っていようと、最低限の執務はこなさなくてはならないはずだ。

「代理を派遣していたんだよ」

「あっ、代理ですか」

意外とあっさりとした理由に、ロマリアは少し拍子抜けしたが、どうして今頃になって復職する気になったのか疑問になった。

「復職した理由か……。収入が必要だからだよ。私が領主だといっても、徴収できる額には限度があるからね。それに、半分は国に納める義務があるから、そこまで豪遊することはできないんだよ。それに――」

「それに？」

「――家族が増えると、支出も増えてしまうだろう」

「あっ」

「だから、私は真面目に働くことに決めたよ。ロマリアには楽しく生活してもらいたいからね。それに、教皇の一人娘に惨めな思いをさせてしまったら、私の立場が無いからね」

二つ目の理由は付け加えたような雰囲気だった。優しさを素直に表現することにまだ抵抗が残っているようで、時々目が泳いでいる。そんなエロールの姿が、ロマリアは少し可笑しくて笑った。

「……どうして笑っているんだい」

心外といった口調で、エロールが首を傾げた。自分の目が泳いでいる自覚がないのだろう。

「い、いえ、何でもありません」

ロマリアは必死に誤魔化そうと俯いた。だが、一回りも年上の男が、自分のような少女を本気で大切にしようとする姿に、どうしても笑いが止まらなかった。

帝都に到着したのは昼過ぎだった。一年に一度だけしか訪れない帝都に、すでに二回も来てしまったことに、エロールは自分のことながら不思議だった。空は一面の曇り空で、日光を気にする必要は無かった。

王宮には入らず、隣接している巨大な建物に入った。中には殆ど人がおらず閑散としていて、働いている下級官吏たちを除けば不気味に静かだった。身の丈の何倍もある本棚はまるで壁のように立ちはだかり、そこに納まる本も膨大な数だ。帝国中の出版物を揃えているだけはある。

エロールは下級官吏たちにも挨拶を欠かさず、一度室内を回ってから執務室に入ろうとした。

「よお、久しぶりの職場復帰だな」

扉を開けようとした瞬間、どこからか不愉快な声が聞こえてきた。振り替えると同時に、下の階から人影が飛んできた。

「はあ、相変わらず白いな。すこしは運動しろ、運動」

一階から階段すら使わずに五階まで跳躍してきた男は、エロールがよく知る人物だった。いつものように手入が行き届いている長い金髪、襟元が薔薇の花弁のように広がっている普段着を細身の身体に纏まとっている。だが、その身体には細身ながらも十分な筋肉がついていることも、エロールは知っていた。

「相変わらず、私を馬鹿にしているな、ローゼン・バルトシュタイン」

「『辺境伯』までつけて呼んで欲しいな、エロール」

口元だけを露骨に緩ませながら、鍰に薔薇の形の彫刻がほどこされている愛刀ぶら下げながらローゼンは近づいてきた。

「冷やかしなら帰ってほしいのだが。それでも、今日からは真面目に職務に取り組もうとしているのでね。ローゼン陪臣長も、少しは

姉上の命令に従って職務をしてはどうか。姉上をなだめるのに、私はそれなりに苦勞しているのですよ」

「はっ、偉そうに。お前は正五位上、私は正三位だぞ。身分をわきまえてはどうだ？」

剣の柄が胸にあたる。軽い力だが、それでも不快だ。

「ああ、すまないね、ローゼン。でも、君は薔薇と呼ばれたほうがお気に召すだろう」

「ほお、よく俺を理解しているな」

「それは当然。私たちは変態仲間だろう」

「っは、確かに、お前は少女の裸にしか興味のない変態だった。はっはは」

「君こそ、茨に包まれて苦しむ女性を見て興奮する変態だったね」
二人は肩を震わせて笑った。お互いに相手を貶すのではなく、自分の性癖を確認するのが、友人である彼らの挨拶だった。

「お前が、八歳の少女と婚姻したと聞いたが、すでに調教は済ませたのか」

「馬鹿な。相手は教皇の一人娘だから、迂闊うかつに汚すわけにはいかな
いよ」

「っは、お前ほどの変態が、あんなに可愛らしい少女を舐めたりしないとは、病気にでもなったか。いや、お前はすでに病気だったな」
「私を甘く見るな、すでに太ももを舐めている。白くて細くて、甘い香りがしたよ」

「味は」

「今までで最高だったよ。早く、他の箇所も舐めてみたいよ」

「っは、例えばどこだ」

「それは言えないよ。私が変態だということは、ティファヌにも秘密だからね」

「おっ、ティファヌか。あの女も良いよな、庶民のくせに、半端な貴族の娘よりも美人だ。今度、俺に一晩譲れよ」

二人は白い歯を見せて高笑いする。人に暴露できない性癖を持つ

もの同士、彼らは幼いころより深く交流していた。エロールからすれば、ローゼンが五つ年上であっても、異母兄たちよりは親しみをもっていた。それは成人してから変わらない。

「それで何をするんだい」

「っは、楽しみを教えるわけにはいかないな」

二人の性癖も変わらない。毎回会うたびに、二人でこっそりことうして会話する。

それから二人は話し続け、お互いに話す内容が途切れるまで、お互いの変態さを誇らしげに語った。

「ああ、そろそろ時間だ。失礼するよ、ローゼン変態」
「っは、またな変態」エロール

第五話　く外出く

天気は曇り。作物を育てなくてはいけない農民からすればあまり好ましくない天候だが、日光を嫌うエロールからすれば絶好の外出日和だった。彼はいつも通りの上下白に統一した服装で鏡の前に立っていた。

「少し、髪型を変えてみようか……」

急に思いついたことだったが、考えてみれば髪形を変えるのは初めてだった。肩までの長さに維持しているだけで、縛ったりしたことはなかった。

「と言っても、どうすればいいだろうか」

その手の技術が一切無いので、とりあえず目に付いた櫛で髪を梳かす。

特に変化なし。

前髪の分け目を変えようと両手でいじる。

すぐに元通りになり、これも変化なし。

化粧台に置かれていた髪結び紐で後ろ髪を縛ろうとする。

身体が硬いので満足に手が回せず、変化なし。

「……不毛だな」

肩が外れそうになったところで、エロールは落伍した。毎日付け替える白い手袋をはめて部屋を出た。

「あ、伯爵様、おはようございます」

一階に下りると、ロマリアはすでに準備を済ませていた。真っ白な修道服を纏った彼女の隣では、編み籠をさげたティファンヌが立っている。

「おはようございます、エロール様」

「ああ、おはよう」

挨拶しながら失礼だが、エロールはもう一人を探していた。二人と一緒にではないようだが、近くに姿は見えない。

「俺は挨拶なしか？」

柱の影から探していた男が顔を出した。薔薇の花弁のように開いた襟が特徴の男は、エロールの古い友人であるろーゼン・バルトシュタインだった。何が嬉しいのだろうか、その声音は朝から機嫌が良さそうだ。いつものように一見爽やかに微笑んでいる。

「隠れている相手に挨拶などできないだろう。それに、私から挨拶しなければいけない理由はない」

階段を降りたばかりのエロールは真っ直ぐにろーゼンに歩み寄る。

「それに、これは家族での外出だ。君を呼んだ覚えはない」

「っは、俺が護衛してやらないと危ないだろ？ 役に立たない兵士を連れて行くよりも安全だぜ」

今更ながらに、エロールは外出の話をしたことを後悔した。知ってしまったろーゼンはこうして無理矢理に参加しようとしている。それでも、夫の友人と会ってみたいというロマリアの要望を優先して、エロールは口だけの文句で押さえている。

それに、ろーゼンが並みの兵士より格段に役立つことは事実だ。帝国全土でも十人程度しか存在しない『聖騎士』の位を、この変態薔薇男は叙位されている。純粋な剣術ならば、大の男が数十人束になっても問題にならない強さだと言える。

「まあ、いいだろう。いつまでも馬車を待たせるのも忍びないから、そろそろ出よう」

潮時だと感じたエロールは、先導するように歩き出した。

「っは、相変わらず優しいな、おい」

背後からからかう声が聞こえたが、振り返らずに無視した。

「なあ、ロマリア。もうエロールとは寝たのか？」

「いえ、まだ寝室は別ですけど……。正式な婚姻まではそれが普通ですよ？」

「まあ、そりゃそうだけど」

言葉の意味が正しく伝わらなかったようで、ロマリアからは清純な回答が返ってきた。やはりまだ子どもだな、とローゼンは内心でほくそ笑んだ。

エロールは近くの河原で対岸を、まるで死人のように眺めていたので、ローゼンはさらに質問を続けた。

「唇は重ねたのか？」

「あっ、それは……」

自分からしたとは言えずに、ロマリアは返事に困って俯いた。両膝を抱えて身体を小さくする。

「まあ、いいか。そのうち嫌でも、毎日することになるからな」

「そうでしょうか？」

「絶対なるな。俺は独身だけど、知り合いの貴族は殆どが毎日だぜ」
本当は、貴族が毎日それらの行為をするのは、正妻となった愛の無い相手ではなく、容姿に優れた妾だ。だが、ローゼンはそこまでいちいち説明するような細かい男ではなかった。もちろん、少女を氣遣ったわけではない。

「伯爵様は、私に何をして欲しいのでしょうか？」

「それは――」

発達途上の身体で奉仕することだよ、あの男は君のような少女に興味する変態だからね――とは言えず、ローゼンは考えた。変態的趣味で質問をしている自分とは違い、少女が真剣に聞いていることは、目を見れば一目両全だった。ひとまずは変態欲求に蓋をし、相応の態度で返事をする。

「とりあえず、髪型を変えてみればどうだ？」

「髪型ですか？ 伯爵様は、私のような髪型が嫌いなんですか？」

「いや、お前じゃなくて、エロール自身だ」

「伯爵さま自身ですか？」

男性貴族の中では最上級の容姿を持っているエロールだが、自らの目の色や髪の色を気にするあまりに、必要以上に自分を飾ることを避けていた。古くから親交のあるローゼンが一番に考えた解決策は、偶然にも今朝のエロールがしていたことと一致していた。

「とりあえず、後ろ髪をリボンで飾ってやれよ。男でリボンが似合うなんて、あの変——エロールくらいだろうからな」

「でも、怒られたりしませんか？」

「大丈夫だろ。あいつほど温厚な人間も珍しいからな」

「そ、そうですか？　なら早速——」

意を決して立ち上がったロマリア。普段から懷に忍ばせてある赤色の布を取り出し。エロールの背後に忍び寄る。

一步。一步。一步。一步。一步。

確実に距離は詰められているが、エロールは振り返る素振りもない。領内でも手がつけられてない小川に見蕩れているにしても反応がない。

「死んでたりしてな、っは」

遠目で見ていたローゼンだったが、軽口を叩いている割には二人が気になっていた。皮肉な笑顔ながらにしっかりと見据えている。

「あ、あの伯爵様！」

ロマリアは意を決して声をかける。いつでも縛れるようにしっかりと布を握り締めている。

ゆっくりとエロールが、白髪をなびかせながら振り返る。

「どうしたんだい、お腹が減ったのかい」

「えっ、あの、その、これは——そうです」

「それなら、早くティファヌのところへ行くといい。彼女が今日の昼食を持っているからね」

「あ、その、はい」

完全に誤解されたロマリアは否定できずに、しぶしぶながら元いた場所に引き下がるが、ローゼンは呆れて口を閉じれずにいた。

「どれだけ、空気を察知できねんだよ。子ども相手ならいいが、大人なら捨てられるぞ」

ローゼンは、隣でロマリアを待つ女性使用人を見てそんなことを考えた。

第六話　く妹く

家族での外出から数日後。エロールはいつもどおりに帝国図書館で書籍の整理を行っていた。よほど暇のなのだろうか、ローゼンは今日も遊びに来ている。二人は談笑しながら、昨日ティファヌに用意させた紅茶を楽しんでいた。

「それで、その髪型はどうしたんだ？」

今日のエロールはいつもと違った、髪型などには無頓着だった彼が、リボンで後ろ髪をまとめていた。男にリボンが似合うはずもないと思っていたローゼンだったが、あまりにも似合いすぎているので、笑うに笑えずにいた。

「ああ、これかい」

真っ白な頬が少し赤くなり、エロールは嬉しそうに今朝の出来事を話した。

「実は、ロマリアが整えてくれてね。まだ子どもだから小さいだろう。踏み台にを使って私の身長に合わせようとする姿が、どうしようもなく愛おしくてね。それにとても良い匂いがしてね、一瞬で眠気が覚めたよ。髪を触る小さな手も気持ち良かったよ。時々、『あっ』とか『わっ』とか言いながら健気に整えてくれたよ」

「っは、よく我慢したな」

「私もそう思うよ。彼女が教皇の一人娘じゃなければ、存分に味わえるというのに残念だよ」

心底悔しそうな表情で紅茶を啜る。

「そういえば、一年前に玩具だった少女はどうなった？」

「ああ、あの出来損ないか」

今から一年前、エロールは別荘で一人の少女を用人として雇っていた。使用人といっても扱いは玩具同前で、気が向くままに弄もてあそんでいた。弄んでいたといっても、女性としての尊厳を傷つけることまではしてないが。

「大変だったよ。すぐに失敗するから、結局は私が手伝うことになるんだ。まあ、申し訳なさそうにうつむく姿を見ると怒りなど湧いてこなかったけれどね」

「だからどうしたんだよ」

「故郷に帰らせたよ。元々一年間だけの奉公だったからね」

「惜しかっただろ？」

「当時はね。でも、今はロマリアがいるから関係ないよ」

一度話を切り上げ、話題の転向を図る。切り出したのはエロールだった。

「イゼルナを覚えているか」

「お前の妹だろ？ 第二皇女様だろ、今年の叙位式で話したな」

「どうも、私と会いたがっているそうだ」

「っは、あいつが子どものころに散々可愛がっていたからな」

今年で十六歳になるイゼルナだが、幼少期に自分を可愛がってくれたエロールを異常に慕い、いつまでも子どものような甘え方をする。最後に会ったのが去年の冬だったが、そのときの甘え方を思い出すと、今でも恥ずかしくなる。

「まったく、いい年をした女性に抱きつかれても困るよ」

「普通、あんなに可愛い妹に好かれるなんて最高だけどな。俺だったら絶対に我慢できねえな」

バルトシュタイン家の一人息子として生まれたローゼンは肩をすくめた。

「いや、すでにイゼルナに魅力はないよ。胸もそれなりに大きくなっているし、すでに大人と変わらないほどの身体だ。顔からもあどけなさが消えかかっているよ。身長も私ほどだから、無理矢理に頬ずりしてきて煩わしいよ」

「っは、とことん変態だな」

「君もだろう、ローゼン」

変態二人はいやらしい笑みを浮かべた。お互いに口外できない性癖を抱えているだけに、この空間ほど羽伸ばしになる場所はない。

仕事は面倒だが、復帰した意味はあったとエロールは割り切っていた。

「それで、イゼルナと会うのか？」

「遅かれ早かれ、いずれは会わなければいけないからね」

「そろそろ、禁断の兄妹になりそうだな」

「口を慎め。そこまで望むようなイゼルナではない。彼女は、あくまで兄としての私を慕っているだけだ。抱きつくことがあっても、脱いだりはしない」

「っは、つまらねえな」

「君を楽しませる必要はない」

ここで話題が途切れた。二人はいつも通りに、話題がなくなると早々に別れた。その別れ際、お互いを『変態』と呼び合って。

「明日、イゼルナを招待するから、食事を余計に用意してくれ」

館に着くなり、エロールはティファヌに命令した。彼女は一礼して了解の意を示した。

「おかえりなさい、伯爵様」

「ああ、ただいま」

「あの、イゼルナ様って……」

聞いていたのだろう、ロマリアが尋ねてくる。エロールはできるだけ簡単に説明した。

「私の妹だよ。あした遊びにくるんだ。ロマリアからすれば義理の妹だね」

「でも、私よりも年上ですよね？」

「ああ、そうだけれど、心配しなくてもいい。とても優しいからね」

「そうですか……私がんばります！」

自分に異常なほど甘えたがる妹、それが自分の幼な妻と仲良くできるだろうか。そんな心配をするエロールは、ローゼンとの会話を

思い出しながら悩んでいた。仲良くしてくれればいいが。

第六話　く妹く（後書き）

感想があればお願いします。作品に関するアドバイスやリクエストも歓迎します。

第七話　（衝突）

晚餐が終わりエロールは先んじて席を立った。まだ食事を続けているイゼルナは一言も話さずにロマリアを凝視している。その視線に気付いたロマリアは視線を落として眼を逸らした。

「ティファンヌ、イゼルナとロマリアを見ていてくれ。妹は食事中に話さないように躑けられているから心配ないと思うが、私のことになる和我を忘れるからね」

「はい、承知しました」

「すまないね」

聞こえないように細心の注意を払いながら小声で会話する。エロールは部屋を出るとそのまま応接室に足を運んだ。そろそろ待たせている男が飽きだして徘徊しかねない。

「待たせてしまったね、ローゼン」

扉を開けると、偉そうにソファーに寝そべる男がいた。大人三人用のソファーも、ローゼンが寝転ぶと小さい。足が完全にはみ出ている。

「遅せえよ、飯くらい早く食え」

「私は食が細いから仕方ないだろう。それでも急いで片付けたつもりだ」

「っは、無理して死ぬなよ」

「黙れ、この変態が」

「っは、変態に言われたくねえよ」
おまえ

いつも通りの挨拶を済ませてから本題に入る。

「それで、第二皇女様はどうだ？」

「まだ話していないよ。イゼルナは、食事中に会話をしないように躑けられたそうだからね」

「っは、愛しの兄上様ともまだ会話できずにいるのか。そんな状況で、ロマリアと二人にしてもいいのかよ。お前を取り合って殺し合

いするかもしれねえぜ？」

一見すると冗談のようなローゼンの台詞だが、彼は冗談のつもりではなかった。イゼルナがエロールに向ける愛情は並外れていて、過去にエロールの慰み物だった女性が彼女に殺されたこともあった。それだけに、例えば公式な妻であり教皇の娘であろうと、イゼルナが強行に及ばないという保障は無い。

「私もそれは心配しているよ。でも、ティファヌが注意してるから簡単にはイゼルナも動けないだろう。イゼルナはティファヌの万能さをよく知っているからね」

「ティファヌを頼りすぎだろ、お前は。俺と一緒に居れば止めてやるぜ？ お前もそのほうが安心だろ？」

「その気持ちは嬉しいよ。でも、ロマリアが私の妻となる以上、色々と超えなければならぬ障害があるだろう。イゼルナは最初の障害だよ」

「おいおい、義妹を障害扱いしてもいいのかよ？」

「例えの話だよ」

この部屋からでは向こうの音は聞こえない。もし何かがあっても駆けつけることはできない。エロールは久しぶりに味わう感覚に、普段は信じてもない神に心中で無事を祈った。自分の考えた作戦が上手くいくように、と。

机の上の食事は全て片付けられた。イゼルナは口元を綺麗に拭き、口直しに水を飲んだ。

「あ、あの……」

か細い声でロマリアが話しかける。両手を机の下ですり合わせながら視線を泳がせる。

「ロマリア司祭」

イゼルナは、役職をつけてロマリアの名前を呼んだ。初対面の相

手を呼ぶには相応しいが、本来ならばエロールの妻である彼女は、年齢が低かろうとイゼルナの姉になる。その相手には、義姉上様と呼ぶのが相応しい。

あえて避けたイゼルナの意図。

それは。

「私は、あなたが兄上様の妻とは認めませんから」

「えっ——」

話し始めてわずか数秒での発言に、幼いロマリアは戸惑った。歓迎されていると考えていたわけではないが、ここまで正直に言われるとは思っていなかった。どう返していいか分からずにいると、意識とは関係なく視線が下がる。

イゼルナはその動作を見逃さなかった。

「兄上様のことなら、私は何でも知っているわ」

肩まで伸びる薄紫の髪を触りながら誇らしげに続ける。

「ロマリア司祭は、兄上様のことをどこまで知っていますか？」

「そ、それは……」

言葉に詰まるロマリア。イゼルナは勝ち誇ったような表情で立ち上がる。

「お話になりませんね。やはり、兄上様にはあなたのような少女は似合いませんね。今までにも兄上様のお近くには女性がいましたけど、本当に兄上様が望んでいるのは、他でもなく私です」

勘違いを超えた誤解。だが、イゼルナは本気でそう信じていた。一人ぼっちで寂しい思いをした幼少時代に唯一遊んでくれたエロールだけが、今の彼女の存在理由であり。彼への思いに比べれば、神への信仰すら空虚だ。敬虔な信者であるイゼルナは、エロールのためならいつでも戒律を捨てる覚悟があった。

「ティファヌさん」

「はい、イゼルナ様」

「悪いけど、この邪魔な少女を早く寝かせて。私はこれから兄上様に朝まで話相手になってもらいうから」

「かしこまりました、イゼルナ様」

ティファアンヌは機械的に答えて扉を開く。無表情な彼女だが、この場で何も起こらなかったことに内心で安堵する。

「――伯爵様と唇を重ねたことはありますか？」

回避したはずの危険が再び息を吹き返した。

「は？」

理解不能、といった表情でイゼルナが振り返る。

「お前なんかが、兄上様と唇を重ねたのか？　馬鹿な、ありえない。ふざけるな！」

優しい顔立ちが一瞬で崩れ、嫉妬に狂った女の顔になる。振り返った勢いをそのままに大股で歩み寄り、ロマリアの肩を揺らす。

「ふざけるな！　私が十六年間で一番欲しかったものを、お前みたいな幼女が手に入れられるはずがないだろう！　いい加減にしないと――」

それ以上の台詞は、咄嗟とっさに間に入ったティファアンヌに止められた。イゼルナの利き腕である右手を押さえてから静かに説き伏せる。

「エロール様から、もしもの時は止めるように仰せつかりました。これ以上、イゼルナ様がロマリア様に何かされるようでしたら、全て報告させていただきます」

「し、使用人の分際で……」

第二皇女であるイゼルナからすれば、平民出身の使用人であるティファアンヌに命令されているようで腹立たしい。普通なら近衛兵を呼んで粛清させるところだが、一人も兵士を配置していないエロールの館では不可能だった。それ以上に、この会話が露見することをイゼルナは恐れた。

もしも、エロールに嫌われたら――

もしも、エロールが口をきいてくれなくなったら――

もしも、二度と会えなくなったら――

さまざまな不安がイゼルナの脳裏を過ぎり、彼女の動きを止めた。イゼルナは崩れるように倒れ、叱られた子どものようにうつむいてしまった。

「イゼルナ様、少々よろしいでしょうか――」

早々に切り替えたティファヌは、事前にエロールから受けた命令通りにイゼルナに耳打ちした。

「――えっ、本当に兄上様が？」

「はい、昨夜お聞きしました」

たった一言で、イゼルナの気持ちを安定させた。そこまで見越していた自らの主に、ティファヌは改めて感心せざるを得なかった。

ロマリア今にも泣き出しそうな自分を押さえるために、唯一イゼルナよりもエロールを知っている箇所を触りながら堪えていた。

第八話　く使用人く

ロマリアとイゼルナが衝突してから数日後に、ローゼンは素知らぬ顔で訪ねてきた。門番のいない門をくぐり、屋敷に続く整備された小道を歩きながら、ローゼンは二階の部屋を見渡した。すべての窓はカーテンで覆われていて中を窺い知ることはできない。

「ティファンヌ、エロールはいるか？」

途中でティファンヌを見つけたので声をかけた。彼女は、自分の腰ほどの高さの植木を手入れしていた。ローゼンの姿に気がつく、作業の中断し早足で歩み寄った。

「いらっしやいませ、バルトシュタイン辺境伯。申し訳ありません、エロール様は外出されています」

「あいつが外出？　今日は仕事が無いはずだろ」

前日に会った際には、今日が休暇だと聞いていたのでローゼンは思わぬ肩すかしを食らった。残念そうに肩を揺らすと、ティファンヌは、是非ともお上がりくださいと頭を下げた。

「なら、お前が話し相手になってくれよ」

「かしこまりました。準備をいたしますので、応接間でお待ちください」

ティファンヌは一礼して屋敷に消えた。残されたローゼンは、何気なく庭を見渡した。広い庭だが、どの植物も几帳面に手入れされている。使用人が一人しかいないこの屋敷で、この作業を行った人間はティファンヌ以外には考えられない。容姿に優れているだけでなく、使用人として求められるよりも高度な技術を身につけているということだろう。それに比べて自分の使用人は情けないと、ローゼンは苦笑する。

——まともなのは夜の世話だけだ

「お待たせしました、バルトシュタイン辺境伯。今朝に仕入れた紅茶でございます」

無駄の無い動きで紅茶が注がれる。カップは装飾の類が無く、実用本位といった形だった。すぐにエロールの趣味だと、ローゼンは理解した。

「失礼でなければよろしいのですが、今日はどのようなご用件でしょうか？ エロール様がお帰りの際にお伝えさせていただきます」

「あ？ そうだな……」

別に用事など無かった。いつものように暇を消化するために会いにきただけだった。強いて言うなら、最近仕入れた女奴隷のことについてだった。新しい奴隷が入るたびに、そのつどエロールに知らせていた。彼自身には大人の女子に興味がないので相槌を打つだけだが。

「輝かしい帝国の未来について語り合おうと思って訪ねただけだ」
本当のことを言うわけにもいかず、適当に思いついたことを口にした。皮肉にも、自分たちが最もどうでもいいと考えていることだった。

「そうでしたか。さすがは皇族と陪臣長さまでです。私のような浅学の庶民には考えもつかないような議論をなされるのでしょうか」

「まあ、そうだ」

考えもつかないような内容という発想だけは正解だった。八歳の妻に欲情するような変態と、大量の女奴隷を薔薇で痛めつけて喜ぶような変態の会話など、常人には想像できないだろう。

「私は、エロール様に仕えてから四年になります」

急にティファンヌが話題を変えた。その綺麗な黒髪が、普段は肩までかかっているにも関わらず、今日はしっかりと横で縛られている。そのおかげで、少し冷たい雰囲気のある綺麗な顔立ちが、非常にはっきりと見えた。

「エロール様が十六歳になられた際に、このレイス領を陛下から下

賜され、同時に伯爵の位を賜ったそうです」

「そうらしいな」

その当時のことは覚えていた。エロールが成人した年に、バルトシュタイン家の家督を継いだからだ。陪臣長の官位に就いたのも同じ年だった。

「エロール様の希望で、使用人として雇われたのは私一人でした。何故、私をお選びになったか御存知ですか？」

「さあ？ 聞いてないな？」

自分よりも年上の女性を雇うことで、異常性欲を隠そうとしたのだろうとはすぐに察しがついた。しかし、他にも理由があるならば是非とも聞きたかった。

「私が、厳しそうな女性に見えたそうです」

理由を聞いて、ローゼンは第一皇女の顔を思い出した。

「それは、アレシ阿斯第一皇女様に関係しているのか？」

「……」

返事は無かった。皇族に対しての自分の個人的な見解を述べることを躊躇しているようだ。使用人だからというよりも、ティファン又自身の忠誠心が許さないのである。

「気にするな。俺が個人的に知りたいだけだ。お前の意見を素直に言え」

「……恐らくは、バルトシュタイン辺境伯のお考えと同じでございます。エロール様は幼少より、アレシ阿斯様に異常なほど偏愛されていたとお聞きしています。その反動で、年上の女性に厳しくされたいとお考えになったのだろうと……」

アレシ阿斯がエロールに注ぐ愛は、姉弟の次元を超えていた。『偏愛』とされているが、その程度ではない。弟に無礼をした使用人容姿を嘲笑った貴族を、自らの手で殺害し、その親類を投獄したほどだ。事実、バルトシュタイン家創始以来から懇意にしていた男爵家が一夜にして改易されたこともある。当時まだ十三歳だったローゼンは初めて女性の恐ろしさを知り、二十五歳になった今でも、ア

レシアスを畏怖している。

「アレシア様とエロールの関係は、どこまで知っている？ 庶民たちも知っているのか？」

「それはございません。私は十三の頃より使用人として生活しているので、色々な噂を耳に挟む機会が多いからでございます。皇族の方々の噂が、庶民たちまでに届くことはありません」

「そうか……」

さほど皇族に忠誠を誓っているわけでもないが、下々に知られていないと分かると心配事が消えた。しかし、ティファヌの表情は暗い。

「……ですが、使用人の間では、アレシア様がエロール様と不義を犯したとの噂があります」

「うむ、俺の耳にも入っている……」

アレシアスは美人だ。身長が男性のローゼンより高く、女性の身で騎士の称号を得ていても、貴族からは人気がある。だから、そんな女性と関係があるエロールを、最初は羨ましく思っていた。しかし、今になって考えてみれば恐ろしい。

「病弱な弟が愛らしくて仕方が無いんだろ」

エロールの異常性欲は、年上の女性に対する反動から生まれたのではないかとローゼンは推測していた。最初にエロールが手をつけた使用人は、その当時まだ十歳で、彼自身は十五歳だった。

「バルトシュタイン辺境伯は、エロール様をどのように見られますか？」

「……あいつなら昔から知っているが、最近は少し楽しそうだ。四年間も休職していた仕事にも復帰して、毎日懸命に働いているよ。俺との会話には、絶対にロマリアの名前を出すんだぜ？」

「ロマリア様が、エロール様に良い影響を与えていると？」

「多分な」

確信は無いが、少女を娶った喜びで浮かれているのではない。生きる希望を得たような様子だ。長い付き合いのローゼンだからこそ、

何気ない会話でも変化に気づけた。親友が好転していくことは嬉しかったが、その変化が寂しくもあった。

「ああ、そういえば」

不意に思い出したことがあり、ローゼンは辛気臭い顔をやめた。

ロマリアとイゼルナの衝突をどうやって収めたかが気になったのだ。

「あの夜の衝突を収めた方法ですか？」

「教えてくれ。かなり気になる」

「事前に仰せつかったことをこなしたまでです。『これからはいつでも職場に遊びにおいで』と伝えるように指示されました」

「なるほど、さすがはエロール」

自分の親友ながらに、イゼルナの弱点を突いた言葉だった。非公式だが帝国一の切れ者とされているだけはある。今後からは変態な会話には注意しなくてはならないが、目々麗しい女性が自分たちの会話に参加してくるのは大きな喜びだった。

一息つくために紅茶を口にした。ちょうどよく冷めていて飲みやすい温度だった。エロールの職場で飲んだ紅茶は甘かったが、これはしっかりとした味で、薔薇のような香りがした。ローゼンの趣味に合わせて用意されたようだ。

「お前、幾つだ？」

脈絡もなく年齢を尋ねたことに自分のことながら驚いた。ティファヌも少し意外そうにしているが、それでもすぐ返事をする。

「すでに二十九歳になりました」

「俺よりも年上か……」

年上は好みだった。いや、年上こそが好みだった。エロールとは対照的に、ローゼンは年上が趣味だった。ティファヌの容姿は二十九歳にしては少し若い、落ち着きがあり清楚で、胸こそはないが足が長く、使用人にしておくには惜しい女性だ。

「ティファヌ、お前は独身だろ？ 誰か好きな男はいるか？」

「いえ、いません」

予想通りの返事だった。だが、それは彼女が使用人として一生を

終える覚悟をしているという信念の裏返しでもある。

「結婚はしないのか？」

「今の私には、エロール様とロマリア様にお使えすることだけです。このまま独り身のほうが使用人としては良いかと」

「っは、お前は使用人の鏡だな！ 俺の屋敷の使用人なんて、俺よりも先に結婚しやがった！」

「バルトシュタイン辺境伯ならば、素晴らしい相手が見つかることでしょう」

「っは、くそ貴族の娘に興味はねえよ！」

下品に笑い、さり気なくティファヌの手を見る。握りたくなる感情を、親友の使用人だと自分に言い聞かせて抑える。

「っは、お前なら皇族に嫁いでも大丈夫だな」

「もったいないお言葉です」

皇族に嫁いでも大丈夫——だから、立場の不安定な辺境伯に嫁いでもいいだろう、ティファヌ

第九話　く不穏く

帝国図書館の執務室から見える空は一面灰色の雲に覆われていた。ちょうど季節の変わり目で、冬はすぐそこまで迫っていた。

ローゼンは憂鬱そうに眺め、少しでも気がまぎれないかと思い紅茶を一口啜った。温度管理が杜撰だったのだろうか、せっかくの高級品が台無しだった。書類の整理をひと段落終えて休憩していたエロールも同じことを思ったのだろうか、一度口をつけただけで容器を置いた。

「まったく、君は紅茶もまともに用意できないのか、ローゼン」

「文句言うならお前が淹れろ」

今日の紅茶担当はローゼンだった。昨日まではエロールが淹れていたのだが、こういった風の吹き回しかローゼンが自ら志願し、見ているだけで不安になる手つきでやっと淹れたものだった。

「そもそも、貴族が自分おれたちで紅茶淹れるなんてありえねえだろ？」

「始まった。君はすぐに言い訳するからな」

完全に言い訳だが、ローゼンの言い分にも一理はあった。紅茶を淹れることなど使用人の仕事で、自分で淹れる貴族など珍しい。辺境伯であるローゼンはそれが当然であって、むしろ皇族であるエロールができることのほうがおかしい。

「ともかく、今度からは君は一切触れないでくれ。せっかくティファアンヌが用意してくれた茶葉が無駄になってしまう」

「はいはい、ティファアンヌが用意したならしかたねえな」

口調こそは嫌々だったが、ローゼンにしてはあっさりした引き際に、エロールは目を瞬く。

「驚いたね。君が一度の忠告で従うなんて……。ティファアンヌと何かあったのかい」

「っは、聞くか？　聞きてえか？　教えてやるよ」

話したくて仕方が無い、そんな口調だった。

ローゼンは以前にティファヌと半日会話した日のことを、異常なほどうれしそうに話した。

話し終えたころには、すでに放置していた紅茶が冷めていた。

すべてを聞いたエロールの口から、当然とも言える台詞が漏れた。

「……君はティファヌが好きなのか」

それ以外に聞きたいことはなかった。

「悪いか？」

威嚇するようにローゼンは言った。彼からすれば、意中の女性が使っている男が気に食わないのだろう。薔薇の彫刻をあしらった剣の柄に手が置かれているのも偶然ではないだろう。

「悪くはないよ」

剣の存在に気づいたエロールは、まさか切りかかってはこないと思いつつも、落ち着かせるために紅茶を差し出す。

「飲むか！ そんなまずい茶！」

自分が淹れたものだということも忘れていたようだった。寝そべっていたソファから立ち上がり、講義するかのように机に拳を叩きつけた。

「ティファヌを汚したら殺すぞ？」

目が本気だった。凡俗なら腰を抜かすことは確実な気迫は、たとえ変態だろうと彼が聖騎士であることの証だった。

だが、エロールの反応は――

「貴様、私が成人女性に性的な魅力を感じるとでも思っているのか」
激怒していた。表情こそはいつもと変わらないが、雰囲気の変態のものだった。同じ変態にはすぐに理解できた。

「っは、そうだったぜ、この変態！ この前、ロマリアの髪についたごみをとるふりして、さりげなく匂いを嗅いでいたな！」

「黙れ。貴様こそ、奴隷三号が流した血を本人に飲ませていただろう」

「あれは鼻血だ！ 髪がなくてふけなかったんだよ！」

「また言い訳か。変態なら変態らしく素直に変態らしい返事を、変

態的な声でしろ」

「てめえ、殺すぞ」

「面白い。好きにするがいい」

殺すとは言っているが、それは先ほどとは意味合いが違う。本気ではない。すでに変態の本性を丸出しにしている二人には、くだらない遺恨などない。どちらの性癖がすばらしいかが、それが争点になっている。

「すばらしいのは十歳以下の少女だ」

「年上のお姉さまだ！」

それを合図に本格的な変態争論が始まった。この間に誰も執務室の扉を開かなかったことは幸運だった。ローゼンだけでなく、聡明なエロールですら我を忘れて少女の魅力について変態全開で主張していた。本当に幸運だった。

終止符を打ったのは、日の入りを告げる鐘の音だった。

「……君のせいで時間を無駄にしたよ」

「それは俺の台詞だ」

お互いの歪みに歪んだ性癖を主張した二人は心底疲れたように、二人がけのソファアに隣り合わせに座った。

「そういえば、お前は何処にいたんだ？」

「……君とティファヌが半日いっしょにいた日のことか」

服の第一ボタンを外しながらエロールは答えた。

「ロマリアと一緒に、父上に呼び出されただけだ」

「はあ？ ついに変態だと知られたか？」

「……来年の準備をするように言われたただだ。具体的には、婚礼の儀と――」

エロールは口をつぐんだ。口止めされているわけではなかったが、それでも勝手に伝えてもいいのだろうか悩んだ。この事実を知っているのは皇族と、一部の大貴族だけだからだ。

だが、古くからの親友であるローゼンに伝えないことで、彼との距離をつくってしまうのではないかと考え、他言無用だと釘をさし

た。

「来春に備えて、領地において準備をしておくように厳命された。兵士、兵糧、武器、防具、馬、それと荷役の奴隸たちを規定数以上そろえなければいけない。守備拠点や補給経路も確保しなければいけない」

一瞬にしてローゼンの表情が強張った。瞳孔が開き、奥歯をかみ締めた。

兵士、兵糧、武器、防具、馬、荷役の奴隸、それに守備拠点と補給経路の確保。

それが意味することは一つ――

「馬鹿な、戦争かつ！」

机を揺らしてローゼンは叫んだ。

すでに夕日は沈み、外では守衛が火を灯しはじめていた。

登場人物紹介

主要人物

エロール・レイス・アルチェーロ・ベネルスク

赤い瞳、白い髪と肌という特異な容姿をした第三皇子。爵位は伯爵。二十歳。

その外見ゆえに幼いころより疎まれ、成人した今でもローゼン以外には心を開かない。姉からの偏愛により幼女崇拜者となり、困惑しながらもロマリアが妻になることに喜んでいる。

妹であるイゼルナからの偏愛をロマリアを利用することで平定するなど、聡明な頭脳を有する。

官位は、正五位上『ていこくすしよのかみ帝国図書長』

ローゼン・バルトシュタイン

金色の髪と瞳を有するバルトシュタイン辺境伯家の当主。爵位は辺境伯。二十五歳。

エロールを彼の親以上に知っており、主従の関係を超えて親友と豪語している。特に変態仲間としては、普段から溜め込んでいる変態的欲求を語り合う。

薔薇の栽培ばかりしている変態だが、帝国でも数えるほどしかない聖騎士の一人で、最高戦力の一人として数えられている。そのため職務怠慢を黙認されている。

ティファヌを妻候補として見ている。

官位は、正三位『陪臣長』

ロマリア・ディルフア・ラスチエーノ

聖少女と呼ばれ、陶磁器のような白い肌と金髪、大きな金色の瞳が特徴。八歳。

ディルフア教皇の一人娘で、皇室との調和政策としてエロールに嫁いだ。純粋な少女だが、初対面のエロールの唇を奪うなど、彼に対しては好意を抱いている。

大人びているが所詮は子どもで、ティファヌに頼りながら生活している。そのため彼女に懐いており、同時に尊敬している。

官位は、正六位上『神祇巫^{じんぎかんなぎ}』

ティファヌ・リベラ

エロールに忠実な唯一の使用人。二十九歳。

肩まで伸びた黒い髪と瞳が冷たい印象を与える美人だが、実際には心優しく、非常に有能な使用人。一般的な家事だけでなくあらゆることに万能で、馬術、剣術、槍術などの武術。さらには学問にも詳しく、特に地理学に造詣が深い。その能力は貴族間でも有名で、ローゼンは妻候補としている。

七年間エロールに使っているが未だにわからないことが多く、それについてはローゼンから助言を得ている。しかし、彼に対しては雇い主の友人として接している。

エロールの関係者

フロウリー・アッシュレット

エロールの主治医で、アッシュレット準男爵家の当主。三十一歳。引き込まれそうになるような濁った瞳が特徴。髪は群青色の短髪で、後ろ髪を麻紐で縛っている。服は本来は真っ白だが、ところどころが破れ、黄ばんでいる。

七年前からエロールの主治医になったが、形だけの適当な診療しか行わない。ローゼンと違い毎日仕事はしているが、常に飲酒している。だが、子供時代から毎日飲んでいるため、顔が赤くなっても酔っ払うことはない。エロールとローゼンの変態性欲についても知

っている。

官位は、従六位上『ていこくてんいはくし帝国典医博士』

リシャーナ・レフィスト

かつてエロールの後見人を務めた貴族で、レフィスト子爵家の当主。三十五歳。

茶色い髪と、年齢より若く見える顔立ち。

困窮を極めていた際に、エロールの後見人となり、成人まで援助する。現在ではすでに家を建て直したが、付き合いは続いている。一人の人物に集中して借りを作らず、偉い相手とは必要以上に仲良くせず、ある程度距離を置いて関わることを信条とする。若く見えるが、年相応に肉体は衰えている。

官位は、正六位上『ていこくえんちのかみ帝国園地正』

第十話　（白い皇子の変化）

目が覚めると、すでに室内は少し明るくなっていた。エロールはガウンを纏い、応接室に向かった。すでに暖炉に火が灯されていた応接室に入ると、窓際に立っていたティファンヌがすぐに気がついた。

「お目覚めですか、エロール様」

彼女はカーテンで窓を閉ざした。途端に室内が薄暗くなる。

「ああ、少し寝過ぎしてしまったようだ。昨日は、兵糧確認に時間を使いすぎてしまったからだろうね」

「左様でございますか。さぞ大変なことだったでしょうが、昨日までに済ませていたことが幸いでしよう」

「それはどういう意味かな、ティファンヌ」

ティファンヌは無言でカーテンを開くことで答えた。空は雲に覆われ、庭は雪に覆われていた。肌を焼く日光がないことが分かった、エロールはゆっくりと窓際に寄った。

「夜中から降っていたようだね」

庭で一番大きな木が完全に雪化粧をしている。眠りにつく直前はいつもどおりだった庭が、朝になると自分と同じ色に変化していた。親近感を覚えると共に、まったく知らない土地に来てしまったような違和感。

「確かに、君の言うとおりだ。私の徹夜も無駄ではなかったようだね」

そこまで言ったエロールだが、積もった雪を喜ぶことはできなかった。

「しかし、これでは当分は外に出られないね。今日の仕事は休まなければいけないな」

本当は今日中に、近隣の貴族たちを集めて戦争へ備えるように指示しようと考えていたが、この雪では簡単に集めることはできそう

にない。やはり先に伝えておけばよかったと後悔したが、ローゼンに伝えたときのことを思い出すと、今でも早いのではないかと考えてしまった。

大陸東部のこの地域は、領土争いの最前線で常に一定の緊張感が保たれている。そこに領地を持つ貴族は、皇族の代表によりまとめられている。その代表がエロールで、事実上の副官がローゼンだ。彼にだけ極秘である戦争について伝えたことも、ただ友人であることが理由ではない。

だが、問題がある。それも非常に厄介な問題が。

「ところで、ティファヌ、君は、コーハリス共和国についてどこまで知っている」

共和国。これまでの歴史では一度も実現しなかった体制で、主権は民衆にあるという、それまでの絶対王政を覆すものだった。帝国がその大部分を領有するテレモニア大陸において数年前に成立したばかりだが、絶対王政に真正面から対立する姿勢を貫くことから、改易された一部の諸侯が亡命するなどして帝国としても無視できない勢力と成長を果たしつつある。

それが、宣戦布告する予定であるコーハリス共和国。味方の諸侯にも内通者がいるという噂があり、エロールとしては開戦には反対だった。だが、宰相である大貴族に押されるかたちで決まってしまった。

尋ねられたティファヌは、一度下を向き、まるで何かを吐き出すかのように口を開いた。

「存じております。バルトシュタイン辺境伯が懇意にされていた、ゴードレス元男爵が加わっているという噂がある、と」

やはり知っていたか、と表情が曇った。

「それも、すでに総司令官代理にまで昇進されているとも噂されています」

そこまで言われているならば、それはすでに噂の域を出ている。エロール自身も、間違いのない情報だと認識している。

ローゼンが戦争に消極的な姿勢を見せているのにはそれが大きな原因となっている。ゴードレス元男爵は、爵位こそ男爵と下から二番目だったが、帝国滅亡の危機であった約百年前の戦いで英雄の子孫であったために民からの信頼も厚く、諸侯からも尊敬されていた。事実、第一皇女アレシアスの逆鱗に触れて改易された際にも、二千人以上の民が蜂起した。

さらに、ゴードレス元男爵は、聖騎士であるローゼンの剣の師匠だった。自身は聖騎士になることはできなかったが、その指導技術は高く、彼が総司令官代理を務めている軍隊の兵士もおのずと強いだろうと予想できる。

「やはり、姉上の判断は間違っていたようだ。私に対して少し冗談を飛ばしただけで改易にするなど、どう考えても、何度考えてもおかしい」

誰に言うでもなく口から言葉が漏れた。今まで心に秘めていた姉に対する不満と共にティファンヌの耳へと届くと、彼女は表情を変えた。そして静かに囁く。

「……エロール様。ロマリア様が自室でお待ちです。執務をお休みになられるなら、どうぞ、ロマリア様とお過ごしください」

何気ない言葉だが、それはティファンヌにとって最大の氣遣いだった。目の前の難題と、これからの難題、その『双子の難題』に立ち向かわなければならぬ主にせめてもの安らぎを、たとえ一時的な気休めだとしても。

「ああ、そうだね。この頃は忙しくてあまり会話できなかったから、ロマリアも退屈だっただろうね。今日はそうしてみよう」

素直にその好意を受けたエロールは踵を返した。

「私は、これから除雪を行いますので、御用があればお呼びください」

エロールはそのまま一階にあるロマリアの部屋に向かった。そして、そこで立ち止まった。勝手に入るのも無礼だが、これから夫婦になる関係の相手の部屋に入るのにわざわざノックまでする必要があるのか悩んだ。彼は少し考えてから声をかけた。

「ロマリア、起きているかい。私だ、エロールだ」

ノックはしなかった。すぐに扉の向こうで動きがあった。

「おはようございます、伯爵様。と言っても、もう朝は過ぎていますよ?」

「ああ、そうだね。つい遅くまで仕事をしてしまって、いつもよりも就寝時間が遅くなってしまったよ」

腰を屈め、視線をロマリアに合わせる。お互いの瞳にお互いの姿が映る。

「でも、今日は図書館には行けそうにないから、お休みするよ。だから、少しお話ししようか、ロマリア」

「えっ、少しですか……」

途端に表情が曇った。悲しそうに半歩下がり、そのまま両手を胸の前で組んだ。

「やはり、伯爵様は、何か用事があるのでしょうか?」

「いや、そうではないよ。時間はたくさんあるから、今日はずっとお話ししよう」

改めて言葉を代えて言うと、今度は満面の笑みで答えた。

「はい、うれしいです!」

心なしにか、普段の彼女からは見られない子供らしさが垣間見えた。嬉しいことや楽しいことに無邪気な笑顔で反応できることが、大人にはない子供の特権だ。

自分の子供時代に、自分はどんな顔で笑っていたのだろうか。不意にそんなことが気になった。今までに教育されてきたことは全て覚えていたが、それは覚えていなかった。その記憶だけが奪われてしまったかのように抜けている、もしくは元から存在しない記憶なのだろうか。だとすれば、自分の子供時代は何だったのだろうか。

「さあ、どうぞ伯爵様」

ロマリアの招きに応じ、立ち上がると同時に脱力感を払拭するかの様に前髪をかきあげた。

室内は、独房のようなエロールの部屋ほどではなかったが簡素だった。寝台、鏡台、机と椅子。どれも高級品だが、広い部屋にあると何の変哲もない家具にしか見えない。

「どうぞ、お座りください」

「失礼するよ」

進められた椅子に腰掛けたエロールは、寝台に移動しようとするロマリアを呼び止めた。

「ここに座っても構わないよ、ロマリア」

両手を広げ、自分の膝に座るように促した。最初は躊躇いと恥じらいを見せたロマリアだったが、照れくさそうな表情で頷き、そつと腰を下ろした。

「ロマリアはいい匂いがするね。どんな香水をつけているのかな」

「えっ、は、伯爵様？」

エロールはロマリアの小さな体を包み込んだ。耳元で囁くと、甘い香りに鼻腔がくすぐられた。

「ローゼンは薔薇の香水を使っているそうだけど、私にはどうしても合わなくてね。それに、ティファヌは香水の匂いが苦手らしくて、彼の匂いが大嫌いだと言っていたよ」

「そ、そうですか？ 私は上品な香りだと思いますが……」

いきなり後ろから抱きしめられて困惑するロマリアはたどたどしい口調で答えるが、エロールの胸板に頭を預けている。

「それで、ロマリアはどんな香水を使っているのかな」

「いえ、私は何も使っていません。デイルファ教では、修道女が必要以上に飾ることはいけないことだと、お父様から教えを受けましたから」

「さすがは、オーゼフィス六世教皇だね。歴代で最も敬虔な教皇だ

と、父上もよく仰っていたよ。それなら、ロマリアは何もしなくても素敵な匂いがするということかな」

少し悪戯っぽく聞いたエロールは、ロマリアの反応を見るために顎を持ち上げた。

「そんな……意地悪です……」

小さな口を真一文字に結び、これ以上は会話しませんよと目で伝えてくる。

「はは、かわいいね、ロマリア。そんな顔をするなんて、君はまだ子供だね」

「私、もう子供じゃありません！　意地悪な人には、もう髪を整えてあげませんよ」

エロールがリボンをつけられてから、彼の髪を整える役目はティファンヌからロマリアに代わっていた。だから今日はまだ髪は寝起きのままで、長い髪は跳ねたままになっている。

「それは困るよ。じゃあ、大人なロマリアに整えてもらおうかな」
なだめるように頭をなで、それから両手を垂らした。ロマリアは早足で鏡台に向かい、櫛と何色かのリボンを手にして戻ってきた。

「今日のリボンは何色にしますか？」

「そうだね……ロマリアの髪と同じ色がいいな」

「ふふ、それだと、ローゼン様と同じですよ？」

「ああ、私としたことが、忘れていたよ。それなら、黒色を頼むよ。
今日はティファンヌの色にしてみよう」

「はい、伯爵様」

久しぶりの休日はどうして過ぎていく。外では、雪が止むことなく降り続け、白くなった庭をさらに染めていく。この雪が消えるころには戦争が起ることを、ロマリアはまだ知らない。本来なら伝えるべき相手だが、エロールはあえて伝えなかった。彼女がまだ子供だからではなく、一人の女性だからこそ、そんな物騒な話題でこの幸せを汚してしまいそうで出来なかった。

愛する女性には幸せでいてほしい。そう考えることができるほど

にエロールは落ち着いていた。ロマリアがこの館に来た日から、彼の中で止まっていた何かが動き出した。それが何かは分からない。だが、彼女との日々を過ごすことで分かるかもしれない。

その日が来るまで、歩幅の違うこの少女と共に生きていこうとエロールは決心した。

第十一話　く薔薇と酒治医く

グラスにはワインが並々に注がれていた。ローゼンはそれを一度に飲み干した。庶民には到底手が届かない高級品にもかかわらず、まるで井戸水のように味わいもせず舌の上を滑っていく。昼間にも関わらず、ローゼンは普段は少しだけしか飲まないワインを朝から飲み続けていた。

エロールから戦争の話聞いてからしばらくは、表面上は落ち着いて振舞っていたが、今朝、雪を見た瞬間に無性に現実から逃げたい衝動に駆られた。廊下を歩いていった使用人に命じて用意させたが、高級品を手渡されたときには笑いそうになった。

今の自分に、この高級品を飲む価値があるのだろうか、普段ならありえない考えが脳裏をよぎった。貴族とはいったいどこが偉く、平民たちとは違っているのだろうか。そんな階級主義の意味についてなど、考えたこともなかった。剣の師であったゴードレス元男爵が改易されたときにも、帝国の支配者である皇族への不敬だから仕方が無いと割り切った。

だが、今になってみれば、何も考えていなかったにすぎない。皇族は偉いという一般論を自分の考えと同化させ、自分自身は何も考えていなかった。その結果が、今の苦しみだ。

グラスを机に置き、視線を暖炉の上に向ける。薔薇の形をした鍔、柄と鞘にも薔薇の彫刻がされ、彼が外出の際には必ず身に付けている剣が掛けられている。

千鳥足で暖炉に進み、小刻みに震える手で剣を抜いた。刀身は曇りなくローゼンの素顔を映している。真っ赤になった顔で笑おうとするが、口元感覚が鈍ってしまつて上手くいかない。右だけが引きつってしまい、冷酷な笑いになる。もしも、悪魔がいればこう笑うのだろう。

鏡は真実を映し出すという言い伝えがあるが、この悪魔のような

表情が本性なのだろうか。ローゼンは刀身を収めた。また、考えもせずに逃げた。

もう一度、酔いたい。逃げたところで誰も自分を責めはしない。再び、ワインの置かれた机に戻ろうとすると、扉を叩く音がした。

「ローゼン様。お客様がお見えですが、お会いになりますか？」

この館で一番の古株である使用人の声だった。ワインを用意させた男だ。剣を戻しながらローゼンは舌打ちした。

「客？ この雪の日に客だと？ ——まあ、いい、通せ」

あのエロールがわざわざ雪の日に訪ねてくるとは思えなかったのだ、仕事の催促に來た役人だろうと考えたローゼンは、早々に追い払うために許可した。それから、部屋の隅に置かれている豪華な柵を一番上から開いて、探し物をする。地下で飼っている奴隷たちの体液や体毛を入れた小瓶が転がり落ち、まるでゴミのように放置されていた金貨を無造作に一掴み取り出す。いつも仕事を催促にくる庶民上がりの役人には、餌としてこれを与えて帰らせるのが彼の常套手段だった。

一般庶民の年収に半分以上に相当する額の金貨が無造作に床にまかれた。庶民上がりの役人からすれば大金だ。しばらくすると、「入るぞ、変態」という声とともに扉が開いた。

「それを拾って、俺の前から消えろ。陪臣どもにはいつも通り、俺は体調が優れないと伝えろ」

相手の顔を見ようともせずに背を向けながら、ローゼンはグラスにワインを注いだ。これでいい、いつも通りの逃げ腰だ。

だが、今日の反応はいつもと違った。床から金貨を拾い集める音はせず、返事もない。それに、この匂い。酔いもさめるような酒の匂いだ。

「賄賂を払って仕事を怠けるとは、薔薇馬鹿にしては賢いな、ローゼン？ ん？」

声は耳元で聞こえた。だが、声だけではなく、とてつもない口臭がした。

「うおう！ げほっ！」

思わず吐き出しそうになり、口と鼻を片手で押さえ、鎖を外された犬のようにその場から逃げた。千鳥足で寝台にたどり着き、やっとのことで振り返った。

「おっ、お前、フロウリーかつ！」

激臭で酔いは完全に醒め、目の前にいる人物が誰か気がついた。

「見ればわかるだろ？ まだ、酔っているのか？」

「酔っているのは、お前だ！ 酒女！」

今しがたまでローゼンが座っていた椅子に、エロールほどの身長
の女性が座っている。髪は群青色の短髪で、唯一長い後ろ髪を麻紐
で縛っている。服は、典医療の役人が着るものだが、どこかで転ん
だのだろうか、破れ、泥がついている。本来なら真っ白なはずの服
が茶色や黄色に変色している。一重の瞳は揺れることなくローゼン
を見つめているが、完全に濁っていて、見ていると引きずり込まれ
そうになる。

「私は、酔っていないぞ？ これは食前酒だ、ローゼン」

手には安物のワインが握られている。彼女の標準装備は、典医療
の役人として必要な薬ではなく、庶民が飲むような安酒だ。初めて
会った七年前からまったく変化しない容姿は三十一歳には見えない
が、酔っている状態も変わらない。

「おっ、これはワインだな？ 何だ？ いいことでもあったのか？」

ああ、いい奴隷が手に入ったのか？ 今度は、幾つだ？ どうせ
年上だろ？ エロールほどにとは言わないが、お前も少しは好みの
年齢を下げたほうがいい。女は三十を超えると、肌の維持が難しく
なることを知らないのか？」

そう言いながら、彼女は赤くなった頬を軽く平手打ちした。意味
もなく笑いながら。

「奴隷はしばらく購入してねえ。こんな昼から酔っ払っている官吏
は、お前くらいだ、フロウリー」

「仕事をしていない官吏も、君を除くと珍しいな？」

彼女は手にしていた酒を全て飲み干した。そして、空になった瓶を机に置いた。表情こそは酔っているが、足取り軽やかでローゼンに歩み寄ってくる。吐きそうになるほどの口臭だが、これは今日昨日の話ではなく、水の代わりに酒を飲み続けた結果だ。

「お前が、陪臣長になったのは二年と少し前か？　それまでは最低限の仕事はしていたな？　職務放棄の理由を当ててやろう、ゴールドレス男爵だろう？」

ローゼンは答えなかった。とぼけたように肩を揺らし、明後日の方向を向く。

「私を無視して、さらに目をそらすとは、お前も偉くなったな？　ならば、お前の歪んだ性癖を城下で暴露してやろう、喜べ、薔薇馬鹿」

貧しい胸を張りながら彼女は、空になった瓶の口を人差し指でなぞった。

「……勝手にしろ、酒女」

「何？」

「聞こえなかったのか、酒女。暴露されようと、バルトシュタイン家が改易されるわけでもないからな。お前の好きにしろ」

視線だけではなく、全身をフロウリーからそらした。その背中は今にも逃げ出してしまいうさだ。

「お前は——馬鹿そうだが、以外に繊細で、それでいて分かりやすいな。私の患者も、お前のように分かりやすい男なら助かるな」

「なら、早く行け。あいつのことは、お前が二番目にわかっているはずだ。俺に追いつくまでには、もう時間はかからないだろ」

自分が行く必要はない、と言い聞かせた。主治医はフロウリー・アッシュレットであり自分ではない。そう言い聞かせて、親友の傍からも逃げようとした。戦争が起ることを一番に伝えてくれて、自分の力を頼ってくれた親友から逃げようとした。

——だが、逃げ切れなかった

「そうはいかない、お前には同行してもらおう。同じ戦争協力者とし

てな？」

直接肩をつかまれたわけでもないのに、ローゼンは振り返ってしまった。フロウリーはまだ椅子に座っている。飲み残された高級ワインに直接口をつけて飲んでいる。

昼食の後始末を終えたティファヌは、庭に出て除雪の続きに取り掛かろうとしていた。すでに館から門までの道は全て取り除かれ、移動に不便はないが、門を一步出れば、そこにはまだ雪が残っている。足の甲が埋まる程度の雪だが、それでも馬車を通るには不便で、今後のことを考えれば少しでも早く行動をしたほうがいい。

特に、主であるエロールの唯一の友人であるローゼン・バルトシユタイン辺境伯がいつ訪れても問題がないように注意を払わなければならぬ。彼と過ごす主の表情はどこか晴れやかで、幼妻と過ごしているときはまた違う。皇族でありながら疎まれる主の人生における、たった二つだけの希望。守ることが使用人である自分の使命である、ティファヌ・リベラは、それを行動原理の一つとしている。

——外見で他人から普通でない扱いをされるのは辛いことだ

「おい、ティファヌ・リベラ！ 久しいぞ」

風上から声がした。ファミリーネームで呼ばれるのは久しぶりだった。そう、ファミリーネームをいっしょに呼ぶ人間は珍しい。彼女が知る限りでは、常に呼ぶのは主の主治医だけだ。

「……収穫の季節以来になります、アシュレット準男爵。それに、バルトシユタイン辺境伯。エロール様は、お食事を終えて、ロマリア様のお部屋でございます」

一匹の馬にまたがった二人の貴族に、使用人であるティファヌは一礼した。すぐに馬の傍により、手綱を受け取る。ローゼンは何も言わずに降り、彼の後ろにいたフロウリーがゆっくりと足をつい

た。

「おっ、これはお前が全てやったのか？」

門から館までの道を見たフロウリーは濁った瞳を見開いた。ローゼンの視線も動いたが口は動かなかった。

「はい、先ほど終えました」

「お前に、こんな重労働をさせておいて、私の患者は幼妻と仲良くお話か……。これは少し、荒療治の必要ありだな」

完全に濁っていたフロウリーの瞳に、帝国典医博士としての光が垣間見えた。利き腕の左手を何度か開き、それからティファヌヘ言う。

「私は先にお邪魔する。お前は、薔薇馬鹿といっしょに私の馬を馬小屋に入れてくれ」

踵を返す直前に、不自然にローゼンの肩を叩いたが、嬉しそうな反応は無い。怒っているようで、それでいてどこか諦めたような表情だ。だが、気にせずそのまま進んだ。

「ああ、そうだ——」

数歩進んだだけで立ち止まった。ローゼンは反応しない。ティファヌだけが姿勢を正す。

「高級ワインを貰うぞ、バルトシュタイン君たち？」

口元を緩ませ、酒の臭いを漂わせながらフロウリー・アッシュレットは、ティファヌとローゼンをまとめて呼んだ。

「はい、どうぞご自由に」

ティファヌは短的に答えた。

ローゼンは両肩を大げさに揺らし、口の片方だけを釣り上げて悪魔の笑いを真似た。

第十一話 〔薔薇と酒治医〕（後書き）

登場人物紹介に、フロウリー・アッシュレットを追加しました。

第十二話　く戯れく

すでに二本もボトルを空けているにも関わらず、フロウリーは酩酊^{めい}することもなくしつかりとした足取りで廊下を歩く。右手には、地下の貯蔵庫から拝借した高級なワインを握り、左手には同じく拝借したものを開栓状態で、時々口に運んでいる。

「醸造年、皇暦978年か……。私より年上だったのか」

気まぐれで醸造年を見ると、自分が産まれる三年前の代物だった。自分よりも長生きしているものを飲むのは久しぶりだったフロウリーは、各上に打ち勝ったような気分になり、酔いも手伝い、走り出した。十分に助走したところで廊下を蹴った。それなりの高さまで跳んだが、着地に失敗して尻餅をついた。それでも、酔いがまわっている彼女はほとんど痛みを感じなかった。

突然響いた音に反応したのか、近くの扉が開き、白髪の青年が顔を覗かせた。フロウリーは腰をなでながら開栓前のワインを持った手で手招きした。

招きに応じてエロールが傍に来ると、彼女はボトルの底で彼のふくらはぎを軽く叩いた。

「よう、患者さん。か弱い使用人に除雪をさせて、自分は新妻と楽しくやっているそうだな？」

「博士、止めてください」

ふくらはぎに対する悪戯を止めさせるためにエロールは屈み、フロウリーの手を両手で押さえた。顔が近づいたことで、強烈な臭いが鼻をついた。

「……酔っておられるようですね」

真っ白なハンカチを取り出して鼻を庇った。

「これは目覚め一杯だ。私は、まだ酔っていないぞ」

悪臭と言っても差し支えない臭いを発しながらも、フロウリーはふらつくことなく自力で立ち上がった。今度はボトルの底で、自分

よりも低い位置にいるエロールの頬を押した。

「痛いので止めてもらえませんか、博士。口の中が切れてしまいます」

「切れろ。婚約したんだから、我慢しろ」

理不尽なことを言いながら、フロウリーはエロールをしばらく弄び、飽きると彼を放置して、開けられたままの部屋に入った。最低限の家具だけが置かれた質素で広い部屋に足を踏み入れると、純白の法衣を着た少女が突然の侵入者に戸惑いながら、その背丈には合わない長椅子で膝を抱えていた。

「あの……貴方は？」

切り出したのはロマリアだった。たどたどしい口調で尋ねられたフロウリーは酒臭い息を吐きながら名乗った。

「フロウリー・アッシュレット準男爵だ。お前の旦那様の主治医を仕方なくやっている」

「典医療の方ですか？ 伯爵様の主治医？」

「官位は『ていこくてんいはくし帝国典医博士だ。患者とは、十四年の付き合いになる。

——それで、お前がロマリアだな？」

「はい、ロマリア・ディルフア・ラスチェーノです。伯爵様からはお世話になっています」

椅子から下りて一礼するロマリア。フロウリーはそれを無視して、ワインを口に運んだ。そこに、エロールがちょうどよく戻ってきた。「おい、患者さん。お前の新妻は、教皇の奴の娘だそうだな？」

耳元で囁かれることで酒臭い息がかかり、エロールは唇を歪めた。それでも、ロマリアの手前で汚い言葉を吐くこともできずに不承不承ながら答えた。

「正しくは、一人娘です」

「どっちでもいいだろ、そんな細かいこと。——それで、私にディルフア教への宗旨替えを勧めないのか」

「勧めてほしいのですか」

「誰が、宗教に無駄な時間を費やすか！ 寄るな、離れろ！」

「近づいたのはご自分でしよう……」

遠慮なく耳元で怒鳴られたエロールはゆっくりとフロウリーから距離をとった。彼女は威嚇するかのようにボトルを突き出した。

「いいか、これだけは言っておくぞ。私は、絶対に宗教というものを許容しない！ いいな、ロマリア・ディアル・ラスチート！」

「ロマリア以降から全て間違いです。やはり、酔っていますね」
「うるせえ！」

唾を飛ばし、同時にボトルを容赦なく近距離から投げた。それは右に逸れて、運よく軟らかい寝台に落下した。あわや大怪我をするところだったエロールはため息をつきながらボトルを回収するために寝台に向かった。

そこに、金髪の青年が介入した。

「大声が廊下まで聞こえたぜ？ 酒乱の相手は大変だな、^{エロール}変態」

「君が連れてきたのか、^{ローゼン}変態」

厄介なことを、と聞こえないように呟いたエロールは、寝台に腰掛けてロマリアを手招きした。彼女は救いの手にすがり、可愛らしい動作で膝の上に座った。

なおも暴れようとするフロウリーだったが、ローゼンによって背から抱きかかえられるかたちで押さえ込まれた。酒で勢いをつけているとはいえず、女性である彼女には、聖騎士に勝てる力などない。

「離せ！ 後ろから抱きつくな！」

「押さえているだけだ！ 誰が、お前を抱くか！」

その失言が発せられた瞬間、フロウリーの後頭部がローゼンの鳩尾へ直撃した。闇雲に暴れたことが、油断していた聖騎士を大いに怯ませた。彼女はその好機を逃すことなく、足の甲を踵で踏みつけた。

「がっ！」

端正な顔立ちが歪んだ。同時に、枷となっていた両手の力が緩み、フロウリーが抜け出すだけの隙間を作り出してしまった。

「はっ、お前の年上趣味には、軽蔑の念すらも覚えるぞ。三十一歳の私に手を出そうとするとは、想像できなかったぞ」

体の自由を取り戻すと、開栓してあったボトルを口に運んだ。先ほどの飲み合いで、中身が少しこぼれたようだ。二人の服にはシミが目立つ。

「子どもの前で、勝手な嘘ばかり言うな！ お前は、論外だ！」

服に染み付いたワインを気にかけてながら叫んだローゼンの視線の先には、エロールの膝の上で呆然とするロマリアがいる。彼女はフロウリーを凝視することで、彼女なりに冷静になろうとしているようだが、破綻的すぎる性格を理解することに窮しているようだ。

少女の視線を感じたのだろうか、フロウリーが舌打ちする。

「おい、じろじろ見るな。切断するぞ」

大人気ない怒声を発しながら一歩踏み出すと、ロマリアは小動物のようにエロールの背中に隠れた。そこから様子を伺いながら彼女は謝った。

「申し訳ありません。今までに出会ったことがない方だったので、つい……」

「はっ、希薄な人生経験だな。私よりも厄介な人間はこの世に――」
すかさずローゼンが横槍を入れた。

「――いるはずがない。ていうか、いたら困る」

「いるぞ！ エブリンスとか、厄介すぎて、私でも近寄りたくない！」

あり得ない、と言いながら嫌な記憶を払拭するために、フロウリーはボトルを傾けた。一口ではなく、残り全てを飲み干すような勢いで。

「ああ、思い出したら、寒気がしたぞ……」

「飲みすぎで、体温に狂いが――」

「うるせえ！」

再び二人がいがみ合う。どうしたものかと毎回悩むエロールだが、毎回のことだと諦め、ロマリアにかまうことにした。隠れていたの

を優しく引き戻し、再び膝に乗せた。

「ロマリアは、あんな下品な人に影響されてはいけないよ。特に、あのおばさんは、酒乱だからね。一人でいるときに話かけられても、絶対に返事をしてはいけないよ。下手をすると、暴れだすからね」
「えっ、それは可哀相です……」

「ああ、ロマリアは優しいね。でも、あのおばさんは無神論者だから、経典を説いても無駄だよ。下手をすると暴れだすからね」

「そ、そうですか？ デイルファ教を信じない貴族がいるとは知りませんでした」

冗談にも真剣に答えるロマリアに、エロールは微笑んだ。隣では、金髪と青髪の男女が幼稚な言い争いをしている。

ティファヌが真顔で、失礼します、と断ってから入ってくるまでそれは続いた。

第十二話 〽戯れ〽 (後書き)

次回更新は、三月二十九日です。変更があつた場合は申し分ございません。

第十三話 ぐどこにでもある不幸

周囲など見向きもせず言い争いをしていたローゼンとフロウリ―だったが、ティファンヌの登場により二人は凍りついたように口を閉ざした。ときに何かを言われたわけではないが、彼女のもつ固有の雰囲気がそうさせた。

このままでは埒が明かれないと考えたエロールは、ロマリアの相手をティファンヌに任せ、自分はローゼンとフロウリーを応接室に誘った。彼らも気まずさを覚えていたのか、黙って従った。

紅茶を淹れながらエロールはため息をついた。

「君たちは、いい大人が恥ずかしくないのか」

いまだに不機嫌そうな表情で顔を合わせない二人。エロールの問いかけにも答えようとはしない。

「コーハリス共和国とは争いたくないそうだな、ローゼン」

ローゼンの隣に、体が密着するほど近くに座り、できるだけ刺激をしないように注意しながら伝聞したことのように言った。すると彼は酒臭さが残る口を歪ませた。

「当然だ。だれが、自分の大切な人と殺し合いがしたい？ 俺にそんな苦しみを背負わせて、お前は幸せに生きるのか？ はっ、馬鹿にするのもいい加減にしろ」

「それについては、心からすまないと思っている。だが、君の力がなくてはこの戦争は不利になる。父上が、私にどれだけの兵を預けたか知っているだろう。たったの八千人だ。コーハリス共和国は、総兵力二万を擁すると間者から報告があったにも関わらず、その半分以下の人数だ。周辺の貴族たちも、私には非協力的だ。私が信頼できる貴族は、今のところ君たち二人だけだ。後生だから、聖騎士である君の力を預けてくれ」

険しい表情で懇願するエロールには、すでに見栄を張る余裕などなかった。ティファンヌやロマリアの前では皇族の対面を無意識の

うちに守っているが、実際には八方塞がっている状況だ。兵糧の買い付けはすませたが、これも普通は国が用意するものだ。これだけでも十分に悪意に満ちているといっている。

薄々だがそれ気がついていっているローゼンだったが、すでに歯止めがかからなくなっているようだ。思いつく悪態をエロールに対して矢継ぎ早に浴びせた。

「はあ？ 自分に都合がいいことばかり並べるな！ 俺に辛い思いをしろと言うなら、お前も諸共だ！ その手で、妹を切れるか？ 姉を切れるか？ レフィスト子爵を切れるか？ そんな覚悟も無い奴に、俺に命令する資格はない！」

「お、落ち着かないか、ローゼン——」

「これが冷静になれるか！」

怒声と共にローゼンは掴みかかった。胸倉を掴まれたエロールはそのまま床に押し倒されて、その衝撃を背中で感じた。内臓が跳ねたような感覚だ。

「痛いから、離してくれ。謝るよ」

「口先だけだ！ 当事者の俺以外に、この辛さは理解できない！」

離すどころか、掴む力はさらに強くなる。エロールの細く白い首が圧迫されるにつれて、彼の呼吸が徐々に苦しくなる。同じ男でも、虚弱なエロールには外すことはできず、自由が利く脚で抵抗するくらいしかできない。それすらもほとんど無意味だ。

見かねたフロウリーが立ち上がった。まだ少しだけ残っているボトルの中身を急いで飲み干し、空になったことを確認すると自分の頭の位置まで振り上げ、迷うことなくローゼンの後頭部に叩きつけた。

「がっ、ああっ！」

これにはさしものローゼンも堪えたのか、後頭部を押さえた。彼の手が留守になったことで解放されたエロールは這うように逃げた。簡素な装飾ながらも高価な絨毯にボトルの欠片が散乱している。

「貴様あ！ 俺を殺すつもりかあ！」

血走った目でローゼンはフロウリーを睨んだ。片方の手は、薔薇の装飾が施された鍔が特徴的な剣を握っている。まだ納刀状態だが、いつでも抜刀できる姿勢だ。

「抜くな、ローゼン。抜いてはいけないぞ」

命の危機を感じたエロールは必死に説得しようと試みた。帝国の最高戦力とされている聖騎士であるローゼンが剣を抜けば、自分とフロウリーなど抵抗すらできずに命を落とすことになる。いつもは軽口を交わす仲だが、二人はいわば兎と虎のようなものだ。虎を怒らせた兎は餌になるしかない。

「怖いかな？ そうだな、俺は聖騎士だから怖いよな。その俺をここまで鍛えたのは、ウォーレン・ゴードレスだ！ あの人は、俺にとっては育ての親だ！」

まだ剣は抜かれていない。怒りで見境がなくなりつつあるが、騎士としての礼儀は体が覚えているらしく、あと一步を踏み出せないようだ。丸腰の相手には剣を抜かないことが騎士の美学である。

お互いにけん制しあう二人をフロウリーは冷めた目で見ていた。

「おい、ローゼン。殺せるなら、殺してみろ」

必死に説得を試みるエロールなどまるで無視した挑発。酔っているからではない。酔っている状態こそが彼女にとっての通常で、その通常ではほとんどのものは恐れるに足らないだけだ。

「お前、最後に戦場に立ったのはいつだ？」

割れてしまい先が鋭利になったボトルを突きつけられたローゼンは、口を閉ざして答えることはなかった。代わりに、質問したはずのフロウリーが回答した。

「最後に戦場に立ったのは、三年以上前だ。覚えていないのか？」

「黙れ。覚えている」

「それなら、そこで骸をさらした兵士たちの死に顔は覚えているか？」

「……どういう意味だ」

察しが悪い、とフロウリーは呆れた。

「どうもお前は、自分だけが不幸だと暴れているようだが、その程度なら道にでも落ちているような不幸だ。最大の被害者は、戦争に利用される兵士だということがわからないのか？　だから、貴族は嫌いだ。民の上に立っていることが当然だと勘違いしている」

その口調は、馬鹿にするというより哀れんでいるように聞こえた。荒れていたローゼンだけでなく、それはエロールにも向けられた言葉だったようだ。二人は明らかに意気消沈している。

「そんなことがわからずに生きるなら、死ね。生きているだけで迷惑だ。お前たちと一緒にいる私まで、腐った貴族と思われたくないからな」

完全に突き放したフロウリーは、それ以上は言わずにそのまま退室してしまった。まだ何か言われるかと身構えていたエロールは肩すかしを食らった気持ちになり、その場に座り込んだ。

「――エロール」

ばんやりと天井を見ていたエロールは慌てた。すでにローゼンは剣から手を離していた。怒りがある程度収まり、今は行き場を失った暴力が彼の中で葛藤というかたちで残っているようだ。

「悪かった」

謝罪の言葉を短く告げただけで、会話につながることはなかった。エロールとしては何を言えはいいかわからなかった。自分が不幸な境遇だということを理由に、周りのことなど考えずに我を通していたことは自らにも当てはまっていた。ローゼンには彼なりの苦悩があり、誰にでも辛いことはある。それは当然で、それでも耐えなくてはいけない。耐えがたきに耐えることが人の上に立つ者の義務だ。

エロールは窓から門につながる道を覗いた。ローゼンが金髪を揺らしながら去っていく姿が見えた。門前では馬上のフロウリーが待機している。これからローゼンがどういう道を選ぶかは、彼女によって決まるのだろうとエロールは想像した。

完全にローゼンたちの姿が消えたことを確認したエロールは、ティファヌを呼ばずにボトルの欠片を始末した。本来ならば使用人に任せる仕事だが、これだけは自分ですべきことだと勝手に体が動いた。小さな欠片も全て丁寧に取り除き、最後に確認までして証拠を隠滅した。

そして、何食わぬ顔でロマリアの部屋に戻った。

「すまなかったね、ティファヌ。二人はすでに帰られたから、君は仕事に戻りなさい」

「はい、承知いたしました」

ティファヌはいつも通りの動作で命令に従った。先ほどの言い争いには気がついていなかったようだ。それでもエロールは樂觀しなかった。近いうちにそれとなく聞いてみようと思った。

「伯爵様。もう、お二人はお帰りになられたのですか？」

二人になるなりロマリアが尋ねてきた。エロールは努めて優しく答えた。

「ああ、もういないよ。驚かせてすまなかったね。ローゼンはともかく、フロウリー博士は常人離れたところがあるから、君と引き合わせる機会はまだ先だと考えていたのだけれど、上手くないものだよ」

「ふふ、そうですね。でも、私は平気ですよ。伯爵様の近くにおられる女性は把握しておかないといけませんからね」

悪戯っぽくロマリアは笑った。大人の女性がすれば妖艶だが、年端も行かない彼女がするところか笑いを誘う。

「あっ、笑ってはいけませんよ」

「笑ってないよ。可愛いから、頬が緩んでしまっただけだよ」

「もう……、子ども扱いは嫌ですよ」

ああ、すまない、とエロールは頭を撫でた。子ども扱いされることに抵抗があるロマリアだが、これだけは嬉しいようで文句は言わない。

自分にはあって、ローゼンにはないもの。それは自分を愛してくれる人間。一般的な感覚からすれば異常である腹違いの姉と妹からの愛情も、広義では幸福な部類だ。まして、自分にはロマリアがいる。これまでの人生がある程度不遇でも、自分は皇族としての立場は保障されてきた。だが、ローゼンはどうだ。努力の末に聖騎士となり、当主となり、そして今は尊敬する師との殺し合いを迫られている。これほどの苦痛も珍しい。

だが、エロールにも譲れないことがある。コーハリス共和国をこれ以上放置することは国を左右する問題に発展しかねない。国の未来と親友との絆を秤にかけてみる。当然、それは前者に傾く。

衝突は避けられないだろう。そうなれば、親友との絆を壊してでも自分は進まなくてはいけない。皇族としての地位を利用して彼に命令を下す。

穏やかな表情を崩さないエロールだったが、それとは裏腹にすでに彼は決意をしていた。

第十三話 くどきにもある不幸（後書き）

次回の更新は未定です。申し訳ありませんが、決まり次第に活動報告でお知らせします。

第十四話　く説得く

北城門の門番はいぶかしむ様な視線で目の前の女性を見ていた。また真昼だというのに酒の臭いを漂わせる浮浪者のような女性だ。群青色の短髪を麻紐で結んでいる。

臭いだけで酔っぱらいそうな口臭を漂わせながら彼女は抗議した。「だから何度も言ってるだろ。私は、フロウリー・アッシュレットだ。準男爵にして『帝国典医博士』のフロウリーだ」

「ですから、身分を証明できるものが無くてはお通しできません」規則を盾にすることで門番は頑なに拒んだ。このやり取りがすでに何度も繰り返されている。後では順番を待つ行商人や市民が口にはしないが明らかに不満そうな表情を浮かべている。

金髪の青年もその一人だった。薔薇の花弁のように開いた襟が特徴的な白い服を着た彼は、その退屈を紛らわすため手持ちぶさたに剣で遊んでいたが、そのうちに痺れを切らしたのか自ら割って入った。

「おい、ちょっといいか」

彼は門番に対して右手を突き出した。その薬指には精密な薔薇の彫刻が施された銀の指輪が輝いている。

「こ、これは――」

屈強な門番が見る見る青ざめていった。アッシュレット家は知らなかったようだが、やはりバルトシュタイン家のことはよく知っていたようだ。

「俺は、バルトシュタイン家当主であるローゼン・バルトシュタインだ。早く開門しろ、門番」

軽薄ともいえる普段の態度はなりを潜め、さながら獅子のように彼は命令した。その声が届いたのか、背後にはひれ伏す人々がいた。フロウリーだけは不愉快そうにそっぽを向いている。

北城門を通過した二人は城に向かう前に市場に立ち寄った。そこ

には多くの市民が混在していて歩けば必ず肩がぶつかる程に人との距離は近い。それ故に、フロウリーの臭いは圧倒的な避けられ方だった。

「お前のおかげで歩きやすいな」

「感謝しろ。これが私の仁徳だ。指輪を見せなくては何もできない馬鹿貴族とは違うだろう」

うるせえ、とローゼンは後頭部を撫でながら悪態をついた。そもそも北城門は市民などが利用するための門であって、貴族には専用の城門が用意されている。南城門と呼ばれる門だ。そこでは指輪を見せる必要などない。門番が貴族の顔をすべて記憶しているからだ。「いちいち文句の多い男だ。何が気に入らないか言ってみろ」

市場の中央でフロウリーはいきなり進行方向を変えた。これまでの大通りから薄暗い小道に進んでいく。

「星の数ほどあるが、とりあえずは俺を帝都に連れてきた理由を教えないことに文句がある」

「そんなことか。お前は小さい男だな」

文句には応じるつもりはなかったようだ。彼女はさらに細い道に入っていく。ローゼンの肩幅では体を横にしてやっと通れるほどの狭さだ。

「おい、どこに行くつもりだ。これは明らかに猫の通り道だろ」

「猫に似ているとよく言われたものだな」

「ああ、化け猫ならそっくりだ」

少し広い場所に出るとフロウリーが振り返った。先ほどの軽口に怒ったわけではなさそうだが、ローゼンは一応身構えた。

「ここの常連なんだ」

それだけ言ったフロウリーはそのまま脇を通り過ぎた。手前には一軒のバーが店を構えている。看板は無いが、外に放置された空ボトルが代わりをはたしている。

「フロウリーだ。邪魔するぞ」

店内にはまったく言っていない程に何も無い。あるのはカウンタ

ーだけで、奥の棚にはボトルが一本も置かれていない。ローゼンには空き家にしか見えなかった。

「おい、こんな空き家で何をするつもりだ」

「うるさい。別に、お前といやらしいことをするつもりじゃないから安心しろ。それに、ここは空き家じゃない」

「その通り」

フロウリーの言葉に便乗するかのようにカウンターの奥から低い声がした。振り返ると懐かしい男が立っていた。

「ローゼンか……、久しぶりだな。エロール様はご健在か？」

「レフィスト子爵ですか……」

カウンター越しに手を振る壮年の男は、リシャーナ・レフィスト子爵。第三皇子エロールの成人までの後見役を務めたことで知られる貴族。茶色の髪にどことなく愛嬌があり、歯をむき出しにした子どものような笑顔がまぶしい。

彼との再会はおよそ四年ぶりだった。エロールが十六歳で成人して以来だ。

「いや、まさかこんな場所で再会するとは……」

何と言ってよいかわからずに口ごもるローゼン。リシャーナはカウンターを飛び越えてこちら側にやってきた。

そしていきなりこう言った。

「エロール様と仲違いしたそうじゃないか？ 理由はフロウリーから聞いているぞ」

ローゼンはさらに戸惑った。つい十日前のことだけにまだ鮮明に覚えていたからだ。

「いや、それは……」

「はは、緊張するな。俺が聞いた限りでは、エロール様はちと強引だ。もう少しはお前のことも考えて行動されるべきだ」

狭い道を通ったために汚れた肩を叩かれたローゼンは、無性に何かを言いたくてたまらない衝動に駆られた。それを言葉にしようと試みたがどうにも上手くいかず、助けを求めるように振り返った。

フロウリーは壁にもたれかかった状態で瞑想していた。自分はこのにはいない、と誇示しているようだ。それは不介入の姿勢だ。

「さてさて、お前は戦争への参加を渋っているらしいが、理由はゴードレス男爵への恩義か？　そうだろうなあ」

頷きながら、ローゼンの肩に手を回す。友達のような動作に、古い知り合いながらも抵抗を覚えた。

「でもな、敵は敵だぞ。一兵卒だって、身内で殺し合いをさせられてるはずだ。俺たち貴族だけが、わがまま言っちゃいけないだろ」

「……同じようなことをフロウリーから言われました」

そう切り返すと、リシャーナの表情が固まった。小さく口笛を吹きながら、視線をフロウリーに送る。

「おい、重複したぞ。せっかく、渾身のかっこいい台詞を考えてきたのにどうすりゃいいんだよ」

「知るか」

一言で切り捨てられてしまったリシャーナはため息をついて脱力した。全体重がローゼンにかかり、崩れそうになる。

「重いです、ちゃんと立ってください」

「これしきに耐えられない男が、ゴードレス男爵を斬れるか、馬鹿」
「俺は、絶対にあの方とは剣を交えたくありません。エロールの頼みでも、これだけは譲れません」

「そう言うなよ。ゴードレス男爵の強さは知っているだろ。聖騎士にはなれなかったことが信じられない実力者で、倒すとしたら、それこそ聖騎士じゃないと無理だって。北から呼び出すような余裕がないことは承知だろ？」

「首都から、適当な騎士を呼べばいいでしょう」

「役に立たないだろ。お前じゃなきゃ、敵わないって言ってるだろ」
堂々巡りになる会話。最初は熱心に説得していたリシャーナも、だんだんとやる気を削がれ、ついには投げた。

「フロウリー、代われ」

「放棄するな！　最後まで粘れ！　相談したときに、偉そうなこと

言ってたのは、誰だ！」

「俺の幻影さ」

「子どもか、お前は！」

怒鳴りながらも、フロウリーは渋々進み出た。ローゼンの胸倉を掴み、自分の顔の位置まで引き込む。

「何だよ、酒乱」

「うるさいぞ。いい加減に、腹を決めろ。過去がどうだろうと、ゴードレスは敵だ、裏切者だ、倒さねばならない相手だ。理解しているなら、すぐに納得してしまえ」

リシャーナと違い、彼女は強く詰め寄る。貴族たる役目云々など細かいことは言わず、単純に敵を倒せ、とだけ。

だが、肝心のローゼンはそれを鼻で笑い。一呼吸置いてから、逆にフロウリーを高々と持ち上げた。片腕で成人女性を軽々と自分の身長より高い位置に。

「うるせえよ、下級貴族」

罵りながら、解放した。フロウリーは受け身を取れず、強打した腰を押さえた。すでに酔いは醒めていたようだ。

苦悶する相手を無作法にも跨ぎ、出口に立ったところでローゼンは振り返った。

「こんな汚い場所で説得とは、お前たちも馬鹿だな。俺は、絶対に戦わないぞ。お前たちで好き勝手にすればいい」

呼び止めようとするリシャーナの声を無視し、ローゼンは帰ってしまった。取り残されたフロウリーはすぐに追いかけてようとするが、腰の怪我が許さない。

「あの、変態め……。無駄なところで強情を張りやがって……」
声を出すだけで鈍い痛みが走る。この怪我は治癒するだろうか、と考えながら彼女はリシャーナの介抱を受けた。

第十四話　く説得く（後書き）

次回の更新は、5月4日です。よろしくお願いします。

第十五話　く救いとは何かく

やがて雪が融けようとする時季。冬季における兵糧の確保は、何よりも困難だったが、それでもやり遂げれたことにエロールは安堵した。

領内から徴兵した兵士は千人。いずれも、農村から集めた。すでに収穫の季節を終えているということもあって、ある程度の給金を与えるという誘い文句に乗る若者は多かった。訓練された傭兵を雇うことも考えたが、後腐れ考慮してそれは避けた。

いくつかの諸侯へ使いとして向かわせたティファンヌが戻ってきた。

「ただ今戻りました、エロール様」

腰を折るととも、彼女は書簡を差し出した。

「グロリアーナ侯爵、ヴェルギス伯爵より、各保有戦力に関する詳細な記録を受け取ってまいりました」

「ごくろうだったね。しばらく、休むといい」

簡単な労いの言葉をかけ、そのまま下がらせた。エロールは暖炉の前に立ち、書簡を開いた。そこには、予想していたよりも頼もしい数が記されていた。

グロリアーナ侯爵——保有戦力、騎兵二百、弓兵五百、槍兵七百。
ヴェルギス伯爵——保有戦力、騎兵二百、弓兵四百、槍兵七百。
両者合わせて、二千七百。事前に用意させていた、フロウリーとリシャーナの兵力は、各二千。これにエロールの兵力を足せば、計七千七百。

「厳しいな……」

思わず唇を噛んだ。少ない兵力ではないが、それでも心もとない。敵となる、コーハリス共和国の兵力はさらに増強され、一万近くまで膨れ上がっているとなれば、どうしても七千七百では不利になる。もちろん、兵力がすべてではない、戦争において勝敗を分けるのは

将の器だ。二千三百の差を埋めるほどの能力が、エロールにあればだ。

そうなれば、どんな手段だろうと、ローゼンを戦場に引っ張り出さなければいけない。彼が自ら剣を振るわずとも、そこにいなければ彼の軍隊が動かせない。その保有する兵力は、味方では最大の三千。辺境伯ともなれば、領地の立地条件により一般諸侯よりも多く保有することになる。

さらに言うならば、ローゼンは聖騎士。まさに一騎当千の実力者。その圧倒的な戦闘能力があれば、敵の士気を削ぎ、味方の士気を鼓舞できる。

せめて彼の軍隊だけでも、と考えたがそれはできない。むしろ、彼一人のほうが重要だ。敵の総司令官代理である、ゴードレス元男爵は聖騎士ではないが、それに匹敵する実力者であることは周知の事実だ。対抗するには、ローゼンしかない。

「やはり、皇族としての権力を振りかざすしかないのだろうか……」
もちろん、エロールとしてはそんなことは避けたい。ここで、皇族としての地位を利用するということは、主従の関係なしに自分を慕ってくれている人たちを裏切ることになる。

ティファヌ、リシャーナ、フロウリー。そして、ローゼン。彼らがいなければ、今の自分はないだろう、とエロールは自覚している。

苦悩する彼の傍に寄り添う者がいた。彼の腰を少し超えるほどの身長——ロマリアであった。

「伯爵様。顔色が良くありませんよ？」

「ああ、暖炉の火にあたりすぎたのかもしれないね……。あそこで、休むとするよ」

無理に微笑みながら、エロールは腰かけた。その膝に、ロマリアが座る。

「……ティファヌさんから伺いました。その、バルトシュタイン様と仲違いされたそうですね。何故でしょうか？」

「ロマリアが気にすることではないよ」

「そんなことはありません！」

珍しく強気のロマリア。しっかりと、エロールを見据え、ぎゅつと両手を握っている。

隠し事はよそう、とエロールは正直に話すことにした。

「コーハリス共和国と戦争になることは、知っているね？」

「はい、ティファンヌさんから……」

「原因はそれだよ。敵の総司令官代理——つまり、二番目に偉い人が、帝国の元貴族で、ローゼンの師匠だった人なんだよ。彼は、どうしても自分の師匠と剣を交えることを拒んでいてね。私は、どうあっても戦ってもらわないと困るんだよ」

なるべくわかりやすく噛み砕く。ロマリアは真剣な表情で耳を傾けている。

「何とか説得しようとして、博士に頼んでみたのだけれど……。ローゼンは彼女を床に叩きつけてまで抵抗したそうだ」

先日、腰を押さえながら報告してきたフロウリーは、彼女には珍しく苦しんでいた。それは、肉体的なものだけではなかっただろう。「正直なところ、もう時間が無いんだよ。どうしようもないんだよ……」

弱音を吐くエロール。彼はロマリアの身体を片手で抱きしめ、もう一方の手でその頭を撫でる。美しい金色の髪が心地よく、わずかに眠気を誘う。

そんな眠気が、一瞬にして吹き飛ばされた。

「どうして、そんなに辛いことをなさるのですか？」

ロマリアが、全力でエロールの手を振り払ったのだ。彼女は身体を反転させ、正面から向き合った。

「伯爵様は、バルトシュタイン様と国からの命令を天秤にかけて、ご友人を裏切るのですか？　それが、人間のすることですか？」

厳しい指摘。それは、ディルフア教の教義に基づいた裏付けある指摘。だが、そんな精神的なことに耳を貸すほどの余裕は、エロー

ルにはなかった。

はじめて、彼はロマリアに対して語調を強くする。

「宗教的な君にはわからないだろうが、戦争において慈しみの心など無意味だ。いや、その存在自体が不必要と言ってもいい。くだらない感情を背負いながらでは、勝てる勝負にも勝てない」

「それは、詭弁です。誰かを思いやることができない愚か者がする言い訳でしかありません。恥ずかしくはないのですか？」

「誰もがしていることだ。すでに、宗教など衰退している。敬虔に毎日教会に通ったところで、神は私たちに何をしてくれるというのだ」

宗教を根本から否定するような言葉の数々。教皇の娘である、ロマリアからすれば、例え婚約者だろうと許しがたい。だが、彼女は怒りを抑えつけた。代わりに、否定されたばかりの慈しみの心で接することに切り替えた。

「確かに、我らが主は、私たちを必ずお救いになるとは限りませんが、助けることだけが救いだというわけではありません。その考え方は間違っています。試練を与えることも、我らが主による救いです。伯爵様がどんな選択をされるかによって、あるいは救われるかもしれません」

「それこそ、詭弁だ」

「違います。これは、教典をいかに解釈しているかによる価値観の相違です。私は、あらゆる試練は、我らが主に救われるためのものだと考えています。伯爵様は、どうお考えですか？」

「私は……」

言葉に詰まる。教典こそはすべて暗記し、最低限の主教的儀式も果たしている彼だが、今回はじめて、本質を理解できていなかったことに気付かされた。

「答えられませんか？」

しばらくして、ロマリアはエロールの膝から降りた。重みが無くなったにも関わらず、彼にはまだ何かがあるかのような負荷を感じ

た。

部屋から出ようとするロマリアを、エロールは慌てて呼び止めた。「待ってくれ。教えてくれ。私は、どうすれば救われるのだ」

すぎるような言葉。苦悩する表情に、ロマリアは思わず心が揺れたが、すぐに立て直した。

「情けないですね、伯爵様」

八歳と少女はまるで、北海に漂う棚氷のように冷たい目をしていった。

「一生、悩んでいなさい」

それだけ言い残し、彼女はエロールの前から姿を消した。

取り残されたエロールは、しばらく呆然と立ち尽くした後、暖炉の上の燭台や装飾品を、感情に任せて薙ぎ払った。椅子を振り上げて窓硝子を碎き、机の果物を暖炉に投げ入れ、素手で壁を殴り、何度も蹴った。壁は、当然ながら痛がることはない。

一通り暴れたエロールは、暴力がいかに虚しいか気が付いた。これから、自分は戦争というさらなる暴力に身を投じようとしている。それを終えた自分は、どれだけの虚無感に苛まれるのだろう。

第十五話 〽救いとは何か〽（後書き）

次回の更新は、5月6日です。よろしくお願いします。

第十六話　君が、親友だからだ

応接室では、不機嫌な金髪と悲しそうな白髪が睨み合っている。自分が呼び出したにも関わらず、白髪は自ら口火を切ろうとしない。金髪も同様に。

しばらくして、使用人が恭しく一礼して紅茶を運んできた。

「すまないね、ティファヌ」

「恐れ入ります」

一瞬だけ、ローゼンとティファヌの目が合う。お互いに口を動かそうとするが、言葉にならず、応接室には再び男二人だけになる。紅茶は適温で飲みやすかった。一口だけ口をつけ、ローゼンが切り出した。

「俺を呼び出した用事なら、大体は察しが付く。何度も言うが、俺は戦争には参加しない。お前が皇族だろうと、改易されようと、な」
「そう言うと思っていたよ」

あまりにも呆気ないエロールの態度。これまで、どうあっても参加させるつもりだった人間がここまで変わってしまったことに眉をしかめるローゼン。

「だから、私は、君を戦力として数えないことにした。無理矢理に戦場に引き出しても、半端な覚悟では役に立つどころか、邪魔になっってしまうからね」

ああ、とエロールは付け加えた。

「これは皮肉でも嫌味でもないよ。じっくりと考えて、私が自分で出した結論だ。そもそも、ゴードレス元男爵と君が戦う姿など、私も見たくない。悲しすぎるよ、師と弟子が命のやり取りをするなんて」

「それが戦争というものだ。お前もその程度は理解していて、納得しているだろう」

珍しく感傷に浸る姿に、おもわずローゼンはつまらない一般論を

持ち出してしまった。これまでの自分が戦争参加を拒んできたことを考えれば、これ以上の矛盾はないだろう。彼は、やられたな、と自嘲した。

だが、エロールはその点には何も言わずに続ける。

「そうだ、君は正しい。それが戦争だ。その正しいであろう概念に正面から反発する姿勢こそが正しいのだろうね」

エロールは腰を上げ、暖炉に歩み寄った。視線を炎に向ける。

「先日、ロマリアからお叱りを受けてね。彼女の宗教観を説かれたよ。我らが主は、我々をお救いになるが、それは必ずしも優しいとは限らない、時に我らが主は試練という形で我々に救いを与える、とね。もっと拙い言い方だったけれど、要約するならこうだろうね」振り返った彼の表情は晴れやかだった。巣くっていた迷いをすべて取り除くことに成功したというよりも、それは妥協した人間の晴れやかさだ。

それでも、諦めたわけではない。諦めと妥協は全く違う。エロールは後者で、自分は前者だとローゼンは気付かされた。だが、すでに遅い。

「エロール、俺は――」

「もういいんだよ、ローゼン。君を悩ませ悪かったね」優しく微笑むエロール。暖炉から戻り、ローゼンの肩に触れる。

「後は、私に任せてくれ」

そのまま立ち去ろうとするエロールを、ローゼンは立ち上って引き留めた。必死に声を張り上げた。金切声だ。

「何故だ！ どうして、俺を責めない！ 自己中心的な、我儘な俺を、どうして責めない！ お前は皇族で、俺はただの辺境伯だぞ！ その立場を利用して、俺に命令すれば済むことだろ！ どうしてだ！」

「君が、親友だからだ！」

暖炉の炎が揺れた。まるで、その声に揺さぶられたかのように。「私たちの関係は親友だ！ 二人で馬鹿なことを語り合う私たちは、

決して皇族と辺境伯ではない！ 一人の人間としてお互いを見ている！ だからこそ、私は君の意志を尊重したいだけだ！」

すべてを吐き出したエロールは不格好な走り方で、その場から離れた。

取り残されてしまったローゼンは全身の力が抜け、座り込んだ。机が揺れ、紅茶がこぼれた。彼の容器だ。

あれは絶縁宣言だったのだろうか、と考え、それが被害妄想だと自分を恥じた。エロールは親友である自分の心境を汲み取ってくれたのだ。親友を傷つけてしまうならば、自らが棘の道に進もうとする自己犠牲。

「俺は……、馬鹿だ……」

泣きたくなった。エロールがかつて暴れた部屋で、今度はローゼンが暴れた。

＊

一階から物音がする。独房のような自室で、エロールは耳を塞いだ。耳障りだったわけではない。以前の自分の姿がそこにあるようで恐ろしかったのだ。

扉が開いた。ロマリアがゆっくりと中に入ってくる。

「バルトシュタイン様に、ご自分の気持ちをお伝えになられたのですね」

少し躊躇ってから答えた。

「……ああ、そうだよ」

「それでこそ、伯爵様です」

エロールの背中にロマリアがすり寄る。彼女は目をつぶり、まるで母親のように語りかける。

「辛いことをよく我慢しましたね。これで、伯爵様は救われます。いずれ救われます。それが、明日か、半年後か、一年後か、十年後かはわかりません。ですが、私はいつまでも拍車様と共にあります」

「ロマリア……」

その身体を抱きしめたい、と思った。エロールは何もしなかった。自分が触れてはいけないものだと感じた。今の自分では触れることは許されない。聖少女なのだ、ロマリアは。

神が彼女ほど慈悲深ければ、世界はどれだけ平和で、人々の笑顔に満ち溢れるのだろうか。

聖歌が聴こえる。ロマリアの声だ。まだ舌足らずだが、それはどんな教会で聴くよりも心地いい。同じ歌でも、歌い手ひとつで変わってしまうように、すべての事象は関わる人間によって変わる。何为中心になるか、それも事象を変える。

友情を優先した自分の判断は正しいのだろうか、とエロールは自問する。

自答することはできなかった。

少なくともこの戦争が終わるまでには答えは出さなければいけない、と彼は心に決めた。

一章　　く開戦まで　　完

第十六話 く君が、親友だからだく（後書き）

次回の更新は、5月9日を予定しています。よろしくお願ひします。

第十七話　　く布陣完了く

エロールが率いる共和国討伐軍は、早朝から出陣、正午にはアルス平原に至った。早々に布陣、各隊の隊長となる諸侯への連絡を済ませ、フロウリーを個別に呼び出した。

本陣を置く小高い丘には、農村からの志願兵が緊張した表情で遠くを見ている。すでに、共和国の帝国迎撃隊も布陣を完了しているのだ。両軍の距離は半里ほどで、間には水深が脛ほどまでの浅い川が流れている。

鎧がまるで様になっていない兵士に案内されて本陣に入ると、屈強な二人の兵士に挟まれるかたちでエロールが腰かけていた。フロウリーに気付くと、彼は立ち上がり、ついてこようとする兵士に待機を命じた。

「忙しいところを申し訳ありません、博士。そちらの準備は整いましたか？」

「ああ、大丈夫だ」

彼女が率いる二千の兵だが、その半分は兵站に回されている。軍隊を進軍させるにおいて、どうしても補給するために兵力を割く必要がある。効率を考えて配置したが、それでも千人を失うことになった。

自隊の兵力を割かれることを、戦功をあげようと躍起になっている諸侯は嫌う。そういう事情もあり、エロールからすればフロウリーの隊の存在はありがたかった。彼女の隊が、それほど熟練していないことも気がかりだったので、できるだけ前線に出したくないという本音もあったが。

エロールは本題を切り出した。

「やはり、指揮官はゴードレス元男爵でしょうか？」

「偵察兵曰く、あいつの家紋が軍旗になっているそうだ。間違いないだろうな」

ここからは到底見えないが、敵軍の大將旗には双剣が印されている。ゴードレス家と親交が浅い、フロウリーですら知っている。彼の家系は、その昔、外敵から帝国を死守した英雄の一人からはじまっているからだ。

予想はしていて、覚悟もしていたことだったが、実際にそうなってみると心が抵抗を示す。

「そうになると、どこから攻めるべきでしようかね」

「知るか。私は、あくまで『ていこくてんいはいはくし帝国典医博士』であって、軍事は専門じゃない。正直なところ、まともに指揮ができるか不安になっているところだ」

そう言いながらも、その手はボトルを握っていない。不安を解消するために酒を飲まず、酒を飲まないことで平静を保とうとしているのだ。

「お前は、どう考えているんだ？」

「私ですか？」

ゆっくりと視線を、自軍と敵軍の間を流れる川に向ける。中州に、布陣している隊がある。共和国側の隊だ。それが、なかなか攻められずにいる最大の理由だった。

脛ほどもまでの水位といえども、武装した状態では進軍速度は遅れ、そうしている間に敵軍の先制攻撃を許してしまう危険性があるからだ。弓兵による一斉射撃があれば、それで完全に浮き足立ち、一気に敗北へ突き進むだろう。

だからこそ、慎重にならずにはいられなかった。

「ですが、それは敵軍も同様だと思われます。私たちが先に動けば有利ですが、動かなければ有利にはならない。かと言って、自らが先に動いても特に利点はない。そうなれば、敵もうかつには動きませんよ」

「それって、要するに膠着状態ってことだろ？」

論理的に説明したつもりのエロールは苦笑するしかなかった。そう言われてしまえば、その通りだ。

「ところで――」

頭をかきながら、フロウリーは周囲を見渡した。

「ロマリアとティファンヌ・リベラは留守番か？」

「当然です。ここは戦場ですから、使用人がいてもどうしようもありませんし、『神祇巫』じんぎかんなぎであるロマリアからすれば地獄ですよ。そもそも、女性が戦場に立つべきではありません」

「何だ、その男尊女卑思想は。本当は、私が戦場に立つことにも反対ってことか？」

「いえ、そういうつもりでは……」

不愉快そうに問い詰められてお茶を濁したエロール。なだめながら、話を上手にすり替える。

「ところで、ゴードレス元男爵との交流は？」

「うん？ ああ、ほとんど無かったな。私は、正直なところ真面目な人間とそりが合わないからな」

「それは、博士に問題が……」

「あ？ 何か言ったか？」

「いえ、何も、とエロールは誤魔化した。

「貴族のくせに、あいつは領民のことを考えて行動しすぎなんだよ。税が納められないって相談されたら、馬鹿みたいに期限を延ばすし、馬上から降りて話すし、あれは貴族っていうより、庶民上がりの小役人だったぞ」

「それこそが、元男爵の魅力ですからね。素晴らしいことですよ」

そう、素晴らしいことだったのだ。

彼が改易されたことで領民の暴動が発生したことも不思議ではない。あれは間違った処分だったのだ。第三皇子に対する失言は許されないが、領地をすべて召し上げられるほどのことではない。

それを考えれば、やはりこの戦争も無意味なのだろう。

後腐れなど気にせずに不参加を表明したローゼンの判断は、あるいは正しいものだったのかもしれない。

それでも。

「いかに過去に功績を残した素晴らしい人間であろうと、帝国に刃を向ける者は切らなければならぬでしょうね」

「そう……、だな」

戦わなければならないのだ。

どちらに正義があるかと問われれば、貴族制を廃したコーハリス共和国にあるだろう。だが、帝国にも正義がある。正義の反対は別の正義だとは断言しないが、それでもどちらにも『是』と『非』があることだけは明白だ。

エロールは咳払いしてから言った。

「そろそろ、お戻りください。こちらから攻めるにしても、あちらから攻めてくるにしても、今は少しでも英気を養うべきです。博士もお休みになられたほうがよろしいかと」

「ああ、そうさせてもらう」

踵を返し、そのまま立ち去ろうとしたが、すぐにまた振り返った。

「仮に――仮にだぞ？」

そう前置きしてから彼女は言う。

「……ゴードレスが自ら前線で剣を振るった場合、お前はどのようにやって食い止めるつもりだ？」

「それは――」

彼にとってこれほど答えづらい問いはなかった。答えが手元に無いというのに、そもそも考えたくないのだ。

しばしの沈黙の後に答える

「大型の騎馬に鎧を着せた兵士を乗せて囲ませます。後から弓兵による一斉射撃で足止めを行い、槍兵を突撃させる計画です」

悪くない作戦だ。まさに兵法の定石。教育されたことがそのまま実践で応用できるわけではないが、強敵を討伐するにはこれしかないだろう。質で勝てないならば、量で勝るしかない。

そうか、とだけ言い残してフロウリーは立ち去った。

エロールはすぐには戻らず、もう一度敵軍を眺めた。小高い丘からはよく見える。中州の隊もそのままだ。少しだけ視線を逸らすと、

自軍の前線が見える。ガイゼル・グロリアーナ侯爵率いる隊と、ハイドロ。ヴェーギン伯爵率いる隊が一番手柄を争うことは容易に想像できる。リシャーナ・レフィスト子爵は争い事では後手に回る性格で、能力があるにも関わらず地味な勲功をあげるだけに甘んじている。今回もそうなるのだろうか。

だが、どれだけ善戦しようと、ゴードレスが自ら出陣すれば戦況は一転して最悪になるだろう。それを考えると頭が痛い。

ローゼンの顔が脳裏をよぎる。彼の存在があれば、憂いなしに指揮を執ることができるのに。だが、それは友情を壊すことが条件だ。それを天秤にかければ、やはり友情に傾いてしまう。皇族として、一軍の将としてそれはあってはならないことだろう。しかし、エロールは後悔していない、少なくとも友情を守ることができたのだ。まだ負けると決まったわけではない、と自分に言い聞かせ、彼は本陣に戻った。

第十七話 く布陣完了く（後書き）

二章を開始しました。次回の更新は、5月11日です。よろしく
お願いします。

第十八話　　コーハリス共和国

中州に布陣する、自軍で最も小規模な隊を小高い丘から眺めながら、ゴードレスは開戦の時を静かに待っていた。

ここ数年からしわが目立つようになった彼だが、鍛えられた筋肉は二十代の若者にも引けを取っていない。事実、今年で四十三歳になったにも関わらず、彼に敵う者は共和国内にはいない。

背後から声をかけられて振り返った。

「ゴードレス司令官代理、少々、相談があります」

声の主は、この軍団の副司令官を務める男、カール・スレットマンであった。二十五歳と若いのが、実直な人柄を評価されたのだ。部下から信頼されているという点では、ゴードレスには及ばないが、それに次ぐほどの人望の持ち主でもある。

「どうしたというのだ、カール？」

彼は気軽に名前と呼ぶ。それは、一兵卒にいたるまで同様だ。自軍の仲間の顔と名前を、すべて記憶しているのだ。

「作戦についての最終確認をお願いしたく参上いたしました」

ゴードレスは苦笑させられた。カールを評価する一方で、心配性すぎる性格については余計だと時々思っていた。

遠くに布陣する隊を指さし、彼は言う。

「まず、帝国軍が先制攻撃を仕掛けてきた場合、中州に布陣する隊が足止め。その隙に、近くにいる隊から順に突撃。我が隊は、後手詰め。これで間違いはありませぬか？」

完璧だ――とゴードレスは応じた。

「しかし、中州に布陣する隊は、わずか五百。いささか、寡兵ではありませぬか？」

「カールは、そう考えるか」

真剣な表情のゴードレスに、元々姿勢のいいカールがさらに背筋を正した。司令官代理に過ぎた進言をしてしまったか、と自分を責

めた。

姿勢とは対照的に伏せがちな視線をあげると、腕組みをしたゴードレスが笑みを浮かべていた。

「その判断は、確かに正しい。よくぞ、申したな」

ゴードレスはカールの肩を叩いた。とてつもなく強い力であるはずが、同時に優しい力でもあった。そこから元気と勇気を与えられているような気分になってくる。

「よし、その進言を採用しよう。伝令、ここに」

すぐに軽装の伝令がやって来て、腰を折った。

「中州に布陣するムーアの隊に、私の隊から三百人移す。ムーアに伝えた後、すまないが、私に報告してくれ」

布陣が完了している状態から兵を動かすことは、軍略の基準からすれば邪道だ。普通の軍隊なら、規律を乱す進言だとして、きついお叱りをされるところだ。

だが、この共和国軍には、そのような古臭い基準は存在しない。この国が、帝国に真正面から挑むと決めた際に、『既存の規則はすべて不問とする』という決意を掲げたからだ。だから、各隊の指揮官も貴族ではない。平民だ。司令官代理であるゴードレスすらも、あくまで国の代表であるというだけで、それ以上でもそれ以下でもない。

伝令が去っていくのを最後まで見送り、再び視線をカールに向ける。

「立派な指揮官になったな、カール。帝国の馬鹿貴族どもとは比べものにならないぞ」

「い、いえ、私などまだまだでございます……」

滅相もない、と彼はかぶりを振った。その様子がおかしく、ゴードレスは豪快に笑った。

カールは、農村の出身で、身分は当然ながら農民であった。それが、今は立派に甲冑を着こなし、千人の部下の命を預かる立場にある。彼の進言を聞き入れることは、ゴードレスにとっては当たり前

のことであつたのだ。

もう一度、肩を叩く。

「そろそろ、隊に戻れ。いつまでも隊長が不在では、部下が不安になるぞ?」

そうやって、カールを戻らせた。ゴードレスは再び帝国軍の軍勢を凝視する。

赤い薔薇の刺繍がされた軍旗は無い。

「ローゼンはいないのか……」

懐かしい記憶が不意に蘇る。

まだ、ゴードレスが帝国の貴族であつた時代よりも前、彼が家督を継いだのは二十九歳のときであつた。ちょうど、その頃、バルトシュタイン辺境伯家の長男が彼の弟子になった。まだ十歳であるにも関わらず、すでにローゼンからは将来の端正な顔立ちを予測させるものがあつた。それだけでなく、彼には剣の才能も備わっていた。強い聖騎士になるだろうな——とゴードレスは期待していた。その期待を裏切ることなく、ローゼンは鍛錬を重ねて、ついに聖騎士に叙任された。自らが叶えられずに終わつた夢を叶えてくれた弟子を、彼は手放しに褒めた。

なつかしい思い出だ。

自分にとっては最も楽しい時期であつただろう。

回顧すれば必ず、頬が緩む。

「はは、私も歳を重ねたな……」

肉体的なことではない。精神的なことだ。

身体こそはまだまだ動くが、昔のことを思い出して、いちいち躊躇しているようではすでに年寄ではないか。

今はこの戦場に集中しよう——ゴードレスは視線を逸らそうとした。

その時、彼は見てしまった。

新たに中州へ向かわせた三百の兵が到着した途端、明らかに帝国軍が動揺を示したのだ。配置換えを増援だと勘違いしたのだろうか、

と一瞬だけ考えたが、すぐに行動に移した。伝令を呼び、各隊への指示を伝えた。

「全隊、川を越えて帝国軍を殲滅せよ」

数分後、共和国軍は獣のような咆哮をあげて突撃を開始した。

第十八話　くコーハリス共和国　く（後書き）

次回の更新は、5月13日です。よろしくお願いします。

第十九話　　ゝアルス平原の戦い　前編ゝ

すでに両軍が激突している状況にも関わらず、リシャーナ・レフイスト子爵は壮大なため息をついた。隣の副官が驚いたような目で見ている。

そんな態度の彼だが、決して不真面目になっていないのではない。冷静に戦況を見極めた上で、呆れたのだ。敵軍が少し布陣を変えただけで、それを攻撃の動作だと勘違いした前線の二隊――グロリアーナ侯爵とヴェーギン伯爵は我先にと進軍をはじめたのだ。

中州に布陣していた敵軍から足止めされているのは、グロリアーナ候の隊だ。そして、敵に川越させまいと必死に防戦しているのが、ヴェーギン伯の隊だ。

「馬鹿ども、皇子からの命令がまだされていないだろうが……」
彼が隊をとどめている理由はそれだった。いかに勲功をたてようと、勝手な行動は処罰の対象だ。

そろそろ、グロリアーナ候の隊が雲行き怪しくなってきた。満足に動けない状態では、敵の弓兵から狙い撃ちにされ、中州に上陸するなり槍兵から突かれ、あっという間にやせ細っていく。

川越を防いでいるヴェーギン伯の隊はまだ大丈夫だろうが、地の利を活かしていないため、いずれは突破されるだろう。

舌打ちしたくなる気持ちを押さえて待つこと数分。待ちわびた伝令が姿を現した。

「おお、来た、来た！」

指揮官である彼自らが歩み寄ると、伝令は明らかに表情を強張らせた。普通、こういうことは側役がするものだからだ。

「皇子からの命令は？」

「は、はっ！　レフィスト子爵におきましては、隊の一部をヴェーギン伯の援護に回し、槍兵に盾を持たせて一列にせよ、とのことであります！」

「よし、ご苦労！」

すぐに側役を呼び、自隊を二つに分けた。七百を、ヴェーギン伯の隊に合流させ。のこった千三百から、槍兵を選び、盾を装備させた。命令通りに一列の横隊を完成させた。背後には弓兵と騎兵が控える。

ついに、グロリアーナ候が後退をはじめた。中州に布陣していた敵も、じりじりと押ししながら向かってくる。ヴェーギン伯は立て直しに成功したようだ。

「ああ、来るぞっ！ 怯むなよ！」

鈍い音がした。衝突音だ。自隊の兵と敵兵の勇み声が聞こえる。

グロリアーナ候の隊は、そのまま後退を続ける。合流するよりも、後方で立て直しを図り、再起するつもりだろう。

そのまま帰ってくるな、トリシャーナは毒づいた。一度でも後退してしまえば、混乱してしまえば、それはもう邪魔になるだけだ。

皇子の周囲を護衛してくれ、と彼は願った。

弓兵に命じて、敵に向けて斉射を行う。槍兵を二十歩後退させ、騎兵を投入する。これだけで随分と有利になる。共和国側には、帝国と違い騎兵は用意されていなかったため、容易に突き崩すことに成功した。

全員が平等であるという精神を持つ共和国軍は、特定の誰かが馬に乗ることを意図的に避けたのだ。乗馬できるということはそれだけで身分が高いということを表しているからだ。

敵が若干浮き足立っていることをリシャーナは見逃さず、すぐに指示を出す。

「槍兵、構えよ！ 密集して突撃！ 槍のない者は、剣を持ち、援護せよ！ 帝国に栄光と勝利をもたらせ！」

大木槌で杭を叩くかのような突撃が始まる。川を越えたばかりの隊が、再び押し戻されようとしている。すでに最後尾の兵は、足元が浸水していた。

押し切れるだろうか、と邪推する。あくまでこれは一時的な勢い

であって、主導権はどちらかといえば、敵にある。川の向こうにはまだ待機状態の隊が布陣している。今後の戦況を見極めて、それから前進するつもりだろう。有利になろうが、不利になろうが、いずれは攻めてくる。遅いか早いかの違いだ。

視線を目の前の敵に戻す。

「恐れるな！ 押し返せ！ 槍兵は、騎兵の援護に切り替えろ！ 弓兵は側面から斉射せよ！ 徐々に敵を囲め！」

その声に従い、兵士たちは徐々に敵を取り囲む動きを見せた。共和国側もそうはさせまいとして、積極的に広がろうとする。

今度は、ヴェーギン伯の隊に視線を移す。少しずつではあるが、押されているようだ。このままでは、グロリアーナ候の二の舞を踏みかねない。

脳裏に、合流という選択肢が浮かんた。別々に戦うよりも一か所で戦うほうが、味方も増えて安心だが、その代わり、指揮系統を再編しなければならぬことが問題になる。それらを天秤にかけると、その選択肢を破棄せざるを得なかった。

後ろを振り返る。フロウリーの隊はまだ動かない。あれが助けに来れば、ほぼ確実にこの場を治めることができるだろう。

だが、やはり、動く気配はない。後退したグロリアーナ候の負傷兵の処置に追われているのかもしれない。『帝国典医博士』であるフロウリーならば十分にあり得る。常に酔っていて、乱暴で、毒舌でも、彼女が怪我人を無視してられるはずがない。優しいのだ、本当は。

それでも、リシャーナからすれば今回だけは後回しにしてほしいところだった。

「くそ、一進一退だな！」

押されたと思えば、次には押し返す。堂々巡りだ。

その頃、本陣ではエロールとフロウリーが口論を繰り返していた。

第十九話 くアルス平原の戦い 前編く（後書き）

次回の更新は、5月15日です。よろしく願います。

第二十話　くアルス平原の戦い　中編く

負傷した兵は、本陣にまで流れ込んでいた。あまりにも数が多すぎたために、治療するにしても場所がなかったのだ。

そのことについては、全軍の司令官である、エロールも文句はなかった。だが、目の前に敵が迫っているにも関わらず、治療にばかり人員を割くやり方には目をつぶることはできなかった。

自ら陣頭指揮を執る、フロウリーに抗議する。

「博士、今は、前線に兵を送ることが先決でしょう。負傷兵については、後程処置を施せば――」

「黙ってる！　生きているやつより、死にかけているやつの方が優先だ！　何もできないなら、指でも啜えているしろ！」

手にしていた当て木を投げつけた。寸前でエロールは回避する。

「いいか！　こいつらは怪我人だ！　私は、『帝国典医博士』として、こいつらを見捨てることはできない！」

「ですが――」

「くだいっ！」

普段からは想像もできない気迫。酔っている彼女とはまるで別人だ。憑りつかれたのように、彼女は自らの職務に直向きであった。

本来なら、それも評価されるべきことだが、エロールからすればそうはいかない事情がある。共和国軍は、あきらかに帝国軍よりも勢いがあるのだ。リシャーナが中心となって善戦しているものの、近いうちに押し負け、本陣まで侵略されることは容易に想像できる。この局面で、フロウリーの隊から援軍を出せるかによって、勝敗が決すると言っても過言ではないのだ。

だから、エロールも引かない。

「司令官命令です。早々に、自隊を率いて、前線に向かってください」

「断る！」

聞く耳を持たない、フロウリー。さすがのエロールも、この状況で苛立たないわけがない。端正な顔を歪ませて、唾を飛ばす。

「いい加減にしてください！ 負ければ、すべてが終わりです！ 我々も、捕虜の恥ずかしめを受けることになるのですよ！」

「それがどうした！ 嫌なら、今すぐにでも帰れ！」

睨み合う二人。側役ですらも、その間に入り込む隙がない。

＊

共和国軍司令官代理である、ゴードレスは戦況を落ち着いた眼差しで見ている。予想以上に、自軍に勢いがある。一見すると互角の争いだが、軍略的な良識を兼ね備えていて、経験豊富である彼には、じきに大きく片方に片方が蹂躪されるであろうことが想像できた。

敵軍で特に息を吐いているのは、紫の朝顔の軍旗を掲げた隊だ。記憶が正しければ、あれはレフィスト家の家紋だ、とゴードレスは瞬きした。

レフィスト家といえば、当主が第三皇子の後見役を務めていたことで知られている。取りたて何かに優れている家系ではない。それが皇帝の子息を預かるまでに認められたということは、当主は優秀なのだろうと、これまでゴードレスは考えていた。

だが、それは見込み違いだった。そう判断せざるを得なかった。いくら善戦しているといえど、指揮能力は平凡だ。

「農民であった、カールの方がよほど優秀だ」

本陣の背後に控える、カール・スレットマンの隊からは、静かながらも鬼気迫るものを感じる。彼らを前線に投入すれば、勝利は確実だろう。経験が無かったとしても、それは誰にでもわかるのではないだろうか。

それでも、まだ投入はしない。じっくりと、少しずつ敵を疲労させたところで、その時にこそ引導を渡すのだ。

＊

ああ、これは負けたな——リシャーナは周囲をはばからずのため息をついた。

すでに、こちらが押されている。一度は川まで押し返したが、あつという間に逆転された。この隊の指揮官は、本当に農民出身か、と自分が情けなくなった。

離れた場所にいた副官に声をかける。

「副官、少しずつ後退するぞ。アッシュレット準男爵の隊と合流する」

隣を見ると、ヴェーギン伯の隊が壊滅状態で敗走していた。勢いを増した共和国側の隊が、それを追撃する。このままでは、本陣に至ってしまう。それまでには、確実に合流を済ませなくてはいい。

それには、自隊の一部を切り捨ててはいけない。それを考えると頭が痛くなる。

「最前線にいる兵たちには後退することを伝えるな。俺が合図をしたら、すぐに離脱できるように準備させろ」

冷酷非道な命令を副官に与える。唇を噛みしめて、副官は頷く。俺の苦しみも少しは伝わっているのか、とリシャーナは苦笑した。

前を向いて言う。

「無能な司令官で申し訳ない。お前たちは、命を捨てて国に貢献した立派な男たちだ。こんなところで死んでも、誰の記憶にも、記録にも残らないだろうが、俺だけは生涯忘れないぞ」

聞こえるはずもない。最後に彼は深々と頭を下げた。

数分後、リシャーナの隊は仲間を見捨てて離脱を開始した。

第二十話 くアルス平原の戦い 中編く（後書き）

次回の更新は、5月17日です。よろしく願います。

第二十一話　くアルス平原の戦い　後編く

本陣には絶望的な空気が漂っていた。仲間を半分置き去りにして後退してきたリシャーナをはじめ、各隊長たちからは疲労の色がうかがえる。普段より白い肌であるエロールだが、日陰にいるにも関わらず明らかに顔色が悪い。

頬をかきながらリシャーナが挙手する。

「エロール様、ここは全軍を撤退させるべきでしょう。我々が引き受けいたします。どうぞ、御身をお守りください」

自分で言ったことだが、彼は虚しくなった。すでに、本陣は敵に囲まれてしまっている。退路こそは断たれていないが、負傷兵を背負った帝国軍が、勢いに乗る共和国軍から無傷で逃げおおせられる可能性は低い。

治療をする過程で血まみれになってしまったフロウリーが舌打ちする。

「その……、悪かったな。周りが見えてなかった……、すまん」

項垂れて、殊勝な態度で謝罪する彼女を誰も責めることはなかった。もはや、誰に責任があるかということはどうでもいいことだ。そんなことを考える気力も残っていないのだ。

「……博士、もう結構です」

その時、伝令が姿を現した。彼もまた、同様に疲労が色濃い。

「申し上げます、共和国側は、降伏を勧告する狼煙をあげています」
天に向い、二本の煙が伸びている。敵に降伏を勧告するためにつかわれるものだ。その申し出を蹴れば、すなわち全軍で攻めるという意味も含まれている。

「いかながなされます、エロール様。ここは、敵の慈悲にすぎりましようか。いかに敵だろうと、帝国の皇子を手打ちにするようなことは――」

「ならん！　高貴なる貴族が、農民や亡命者の軍門に下るなど、そ

んな屈辱に耐えられるはずがない！」

「グロリアーナ侯爵に賛成だ！ そのような辱めを受けるならば、いっそ討死したほうがいい！ 私は、降伏には断固反対する！」

真っ先に敗走したグロリアーナ侯が怒鳴ろうと説得力に欠けるが、援護を受けていたとはいえど善戦していたヴェーギン伯が抗議すれば立派な意見として成立する。

意見が対立すれば、最終決定権は全軍の司令官である、エロールに託される。

「いかなされますか、皇子！」

「さあ、ご決断を！」

「降伏するのです、エロール様！」

時間はあまり残されていない。狼煙が消えれば、それで終わり。敵軍は、要求を棄却したと判断し、総攻撃を仕掛けてくるだろう。

エロールはゆっくりと目を閉じる。

「我が軍は——」

脳裏に浮かんだのは、故郷で自分の無事を祈る人々。

ロマリア・デイルファ・ラスチエーノ。

ティファンヌ・リベラ。

そして、ローゼン・バルトシュタイン。

死にたくないと自らの本能が叫んでいるのと同じく、彼らも叫んでいる。

必ず、生きて帰れ。

——答えは決まった。

「私が率いる隊以外の撤退をはじめる」

諸侯たちは度肝を抜かれた。それは、すなわち皇子を見捨てて落ち延びることだ。そんなことをすれば、最低でも改易、最悪なら一族一首にされるほどの重罪だ。一般的に大逆罪と呼ばれ、皇族に対する罪は一等重くなる。まして、エロールは第三皇子の身分。見捨てれば、確実に打ち首だろう。

リシャーナが唾を飛ばしながら説得を試みる。

「考え直されよ、エロール様！ そうなれば、御身は囚われることになり、我々は一族そろって打ち首。二度と、この屈辱を晴らす機会を失いますぞ！」

「心配無用だ。私が、父上に一筆したためよう。それに今回の旨を記しておけば、皆の身に危害が及ぶことはない」

「し、しかし！」

それでも、リシャーナは引き留めようとする。彼からすれば、一番の問題は、自らの命ではなく、エロールの身の安全だった。確かに、帝国の皇子となれば雑な扱いをするわけにはいかないだろう。それでも、共和国内にも強行的な考えをもつ輩がいて、命を狙われないという確証はない。

必死になるリシャーナの肩を掴む者がいた。

「無駄だ。こいつが時々、強情になることは知っているだろう、後見人」

「フロウリー……」

力が一瞬にして抜けた。倒れこまないように注意しながら、下がる。

「お前が、どうしようと構わん。だが、残るというなら、私も残る！ 私は、お前の主治医だ！」

力強く進み出る。その目には迷いが無い。

「……命の補償はありませんよ、博士」

「お前よりは早く死なん。私は百歳まで生きる」

すでに、狼煙は消えかかっていた。時間が無い。エロールは、リシャーナに撤退の指示を与える。最後の瞬間まで、リシャーナは納得することはなかったが、それでも苦虫を噛み潰した表情で耐えていた。

本陣に残ったのは、わずかに八百。騎馬はすべて撤退するために回したので、全員が歩兵。最後尾で指揮を執る、エロールすらも自ら剣を抜いた。

その姿を見て、フロウリーは一言。

「似合わないな」

「大きなお世話です。そんなことは自覚しています」

色白で、今にも死にそうな男が剣を握ったところで別段どうともない。実際、天気が晴れならば彼はすぐにでも倒れただろう。

剣の柄を撫でながら、エロールは言う。

「剣を握る姿が様になるような、筋骨逞しい男が助けにすれば、私たちの命も安泰でしょうね」

「だろうな」

狼煙が消えた。敵軍から掛け声がこだまする。自軍を遥かにしのぐ兵力を目の当たりにしながらも、エロールとフロウリーには恐怖などほとんど無かった。

「全軍、突撃せよ！」

慣れない動作で構えられた剣が、敵軍に向けられた。

第二章　く開戦く　完

第二十一話　くアルス平原の戦い　後編く（後書き）

次回の更新は、5月21日です。よろしくお願いします。

第二十二話　（再戦への布石）

リシャーナ・レフィストは満身創痍で自分の館にたどり着いた。皇族を置き去りにして戦場から帰還すると、早々に帝都へ召集され、グロリアーナ侯爵とヴェーギン伯爵と共に沙汰を受けた。

再戦への準備を早急に済ませること――それが、リシャーナへの沙汰であった。

疲弊しきった身体には堪えるが、実のところ、その程度で済んでよかったというのが彼の本音だ。同じく戦場から離脱してきた、グロリアーナとヴェーギンには期限付きの謹慎が命じられたのだ。再戦まで一切の行動を制限されるということだ。

まず彼は、すでに夜中だというのにエロールの館を訪れた。

「この度は、エロール様を置き去りにするという失態をいたしました。再戦に向けて、可能な限り尽力いたしますので、ご容赦ください」
頭を下げた相手は、エロールの妻となる予定であるロマリアではなく、使用人であるティファヌであった。

レフィスト子爵家の当主である男に頭を下げられ、さすがの彼女も動揺する。

「い、いえ、私はただの使用人です。謝罪なら、ロマリア様に……」

「ロマリアは、まだ起きているのか？」

「すでに、お休みになれましたが――どうされます？」

起こすな、とリシャーナは念を押した。後日、しっかりと説明しようと思った。

「ところで、ティファヌ。あいつは、今どうしている？」

「あいつ、ですか？」

「ローゼンだ」

「……ここ数日は、音沙汰がございません。恐らく、エロール様が捕縛されたことについても、まだご存じないかと」

やはりそうか、と思った彼は、ローゼンに対して怒りを覚えた。

仮に捕縛のことを知らなかったとして、あれから引きこもったままでいることが許せない。敗北したといえど、可能な限り全力で戦ったつもりである彼からすれば、侮辱も甚だしい。

怒りを表情に出さないように言う。

「実は、軍務卿から命令を受けた。再戦に向けて早急に再軍備をせよ、とのことだ。今回の戦いで、主力をほとんど失ってしまったから、遠方の貴族からも兵を借りなければならない。ティファンヌ、お前にも頼み事をしていいか？」

「私にできることなら、どうぞお申しつけ下さい」

「引きこもりの金髪を今度こそ、戦場に引きずり出してくれ」

唇を噛み、視線を逸らす。ティファンヌはしばらく考えてから返事をした。

「可能な限り尽力いたします。さっそく、明日、バルトシュタイン家の館へ向かいます」

「頼む。悔しいが、今回の敗戦で身に染みた。ローゼンがいないと分が悪すぎる。もともと、我々の軍は士気が低いからな」

責任をすべて兵士に押し付けるつもりはなかったが、そうやって合理化なしていかなければどうにもならないほど、彼の頭は混乱していた。

これからすべきことを考えると頭が痛くなる。兵を集めるにしても、最悪の場合は訓練の必要がある。兵糧を確保しようにも、すでに近隣の村々から徴収してしまったために、もう一度同じことをするわけにはいかない。

そして、最大の障害は、エロールの姉と妹である。アレシアとイゼルナー——厄介きわまりない人種だ。

いつそのこと、自分も改易されて、コーハリス共和国に合流すれば楽になれるのでないか、と彼は邪なことを考えた。

＊

エロール第三皇子が敵により捕縛されました——血相を変えて使用人が伝えてきたことも、ローゼンからすればどうでもいいことであつた。

あいつらしいやり方だ、彼は納得した。敗北したことは全力で戦つた結果だろうが、捕縛されたことについては故意だろう、と。皇族である人間を置き去りにして帰還するような貴族など、この国内にはいない。ならば、それは命令されてしたことに違いない。

これは、エロールからの伝言であると彼は確信した。

「要するに、助ける、つてことかよ。しかも、フロウリーまで一緒つていうところが、芸が細かいな」

不謹慎なことであるが、まったく心配ではなかった。共和国側にゴードレスがいるなら、捕虜に対して非人道的な所業がなされることはないだろう。それだけで、彼からすれば大きな安心であつた。

だが、だからといって自ら戦地に赴くつもりは毛頭ない。確かに、ゴードレスの戦闘能力は脅威になりうるが、それを超える聖騎士なら国内に数人はいる。彼らを送り込めば、それで万事解決する。むしろ、そうすれば今回の敗北もなかっただろう。

「……俺じゃなきゃ、殺してもいいんだよ」

そう、自分以外の人間が、ゴードレスを殺めることについてはまだ我慢できる。だが、自分で手を下してしまえば、誰を恨んでいいかわからなくなる。自分を恨めばいいのだが、そうやって割り切れるほど彼は冷徹になれない。

誰かが背中を押してくれることを待っている——彼はそう自己分析していた。中途半端なんだよ、と何度か心の中で悪態をついたこともある。自分の弱さを責任転嫁していたのだ。情けないな、とおもわず自嘲する。

扉を叩く音がした。年嵩の使用人であつた。お客人です、と彼は告げた。

第二十二話　く再戦への布石く（後書き）

次回の更新は、5月26日です。よろしくお願いします。

第二十三話　友人と恩人

バルトシュタイン家の起源は、約百年前に遡る。当時の帝国は存亡の危機に瀕していて、外敵と戦うために剣すら握ったことのない農民を寄せ集めていた。その絶望的な戦争を終結させたと伝えられている英雄たちと肩を並べた敵将、それが、バルトシュタイン家の始祖である、フイネット・バルトシュタインである。戦争終結を予期して、さらに自軍の敗北を悟った彼女は、あっさりと帝国に寝返ったのだ。

最終的には辺境伯の爵位を与えられ、広大な領土を有することになったが、それでも周囲は冷淡であった。所詮は妬みである、と割り切って存続してきたのだが、ローゼンにはそれが耐えられなかった。

公式の場でも冷たく扱われた、少年時代の彼は次第に内向的なり、ある程度成長すると反対に攻撃的な性格に変貌した。大人を敵視することで精神の均衡を保っていたのだと、今になってみればわかるが、それでも容認できないほどひどい荒れかたであった。

転機は、ゴードレス男爵とであったことであった。彼の家系は、帝国存亡の危機を救った英雄の一族であり、同じく一代で成り上がったバルトシュタイン家とは違い、常に尊敬されていた。そういう理由もあり、ローゼンは最初、いつもに増して敵意をむき出しにした。

そんな彼に、ゴードレス男爵は一声だけかけた。剣術に興味はないか、と。不思議なことに、ある、と素直に頷いてしまった。

それからというもの、ローゼンの人生は一転したと言っても過言ではない。剣術を学ぶにつれて、行き場をなくしていた暴力はなりを潜め、性格も徐々に改善された。才能があったのだろうか、それとも努力の賜物だろうか、聖騎士に叙任された。努力の積み重ねによる結果だと彼は信じている。

聖騎士として認められたことよりも、ゴードレス男爵から褒められたことが何倍も価値のあることだった。よく努力したな、と握手を求められ、それに応じたときの感覚は今でも鮮明に覚えている。身体が記憶しているのだ。

それだけに、ゴードレス男爵が改易されたことは衝撃であった。些細なことで激怒した、第一皇女アレシアスは当然憎いが、一番許せないのは、あるいは自分のことかもしれない。何故か、改易処分に対して異を唱えることができなかったのだ。

自分に火の粉が降りかかることを恐れたから。

＊

客人とは、ティファヌ・リベラであった。ロマリアの姿はない。一人だった。

「連絡を怠っての訪問をお許しください」

慇懃に一礼する姿からは気品が漂う。美貌だけでなく、使用人としての能力も折り紙つきなのだから、貴族の間で話題になることは必然だろう。

机を挟んで向かい合うかたちで、二人は腰かけた。ティファヌが遠慮せずに座ったのは、対等な立場で話をするためだった。

視線を逸らしながら、ローゼンが口火を切る。

「……エロールのことだが、残念だったな。やはり、俺が参加するべきだったようだ。本当にすまない」

「謝罪は必要ありません。すでに、レフィスト子爵から十分に謝罪をしていただきました。それよりも――」

あらかじめ決められた台詞を読んでいたような口調が、誰にでもわかるほどに真剣味を帯びる。

「――後悔なさっているなら、実際に行動で示してください。こんなところで閉じこもっているよりも、再戦に向けた準備にご協力ください」

丁寧な言葉づかいだが、それは一介の使用人が貴族に向かって言うことを許さるような内容ではない。はたから見れば、まるでティファンヌが命令をしているようだ。

これまで定まることがなかったローゼンの視線が、一点に集中した。二人はお互いにお互いをしっかりと見据える。

「……ローゼン様にとって、エロール様の存在はどのようなものでしょうか？」

「親友だ」

意識せずともすぐに返事ができた。それほどに、彼の中では当たり前のことになっていた。

ティファヌの表情が少しだけ優しくなる。

「では、友人と大切な恩人。どちらの味方になりますか？」

「大切な恩人だ。これだけは譲れない」

これもすぐに返事ができた。当然すぎることだった。

そうですか、とティファヌは頷いた。彼女はそれ以上何も言わずに席を立った。去り際に、微笑を残して。

再び独りになったローゼンは、ゆっくりと暖炉に近寄った。飾つてある真剣に手を伸ばす。久しぶりのそれはあまり手に馴染まず、回転させると危うく落としそうになる。

「友人なら助ける義理にはならないな」

誰に聞かせるでもない独り言。もしくは、自らに向けた言葉だったかもしれない。自らを鼓舞する言葉だろう。

友人を助ける義理などない。所詮、友人は友人に過ぎない。大切な恩人は、絶対に変えが利かない存在だ。

何故、それほどまでに違うものを比べようとするか不思議でない。馬鹿馬鹿しい。

――だが。

親友と大切な恩人なら、ローゼンの天秤は前者に傾く。

「そうだ、エロールは親友だ。親友なら、しかたない。特別に助けてやるよ。感謝しろよ、幼女愛好者の変態野郎。ロマリアが成人す

るまでに手を出したら、二度と不可能にしてやるぞ」
意味の無いことを繰り返すのは、照れ隠しであった。

第二十三話　　ゝ友人と恩人ゝ（後書き）

次回更新は、5月29日です。よろしくお願いします。

第二十四話　　準備段階

孤独な雰囲気醸し出している、エロールであるが。それは勘違いだ、とりシャーナはつくづく思う。男の兄弟とは折り合いが悪いが、姉と妹からは非常に好かれている。捕縛されたことで取り乱すほどに好かれている。

リシャーナは、第二皇女イゼルナ・フロブレリア・アルチェーロ・シェアノートの館で、彼女と対面していた。ちょうど今、逃げ帰ったことについてのお叱りが終わったところだ。

うるさいよ、と心中で思いながら、リシャーナは本題に入る。

「当然ながら、私には、エロール様を奪還する義務がございます。一刻も早く、お助け申し上げて、共和国を崩させたいと考えております」

視線を逸らして、されど、と言う。

「共和国の軍は、思いのほか強力であります。先の一戦での敗北も、恥ずかしながら、油断したことが敗因でございます。ならば、こちらも強い軍隊が必要になります。ですが、すでに我が手元には殆ど残っておりません」

「つまり、兵を用意して欲しい、ということですね？」

「左様であります」

実際には、それだけではなく兵糧も欲しいところだが、それは我慢した。一人の人物に集中して借りをつくらないのが、リシャーナの流儀だからだ。ましてや、相手は皇族。偉い相手とは、浅からず深からず付き合うものだ。

そんな彼が、いかなる経緯でエロールの後見人を務めることになったかという。単純な話が、金であった。当時のレフイスト家は、領内での大飢饉により、その年の年貢がまったくないという状況であった。最初こそ金目的であったが、最終的には情が移ってしまった。

後見人を務めていなければ助けることはなかっただろう、とりシヤーナは冷静に、無情なことを考える。

しばらく考えていたイゼルナが答える。

「いいでしょう、兵を貸しましょう。ただし、条件があります」

「条件？　どのような条件でしょうか？」

大体は想像できたが、確認のために尋ねておく。

「兄上様を奪還するための戦いに、私を加えなさい。その戦いは、聖戦と言っても過言ではありません。私が、皇族の代表として指揮を執って差上げます」

結構です――とは言えない。実は、そう要求されるだろうと考え、事前に準備は済ませていた。

「光栄に存じます。イゼルナ様の指揮下に入れば、必ず勝利し、囚われのエロール様をお救いできるでしょう」

邪魔するなよ、というのが本音であった。

ともあれ、これで兵力を確保するという課題は攻略した。すると、残る問題は兵糧と武具、そして指揮官だ。

あの敗戦で学んだことは多いが、やはり指揮官の質が大切だということとは痛いほどわかった。グロリアーナ侯爵とヴェーギン伯爵は、無能でないが、とりわけ有能でもない。あの二人と再び戦場にて戦うことなど、願い下げだ。

ならば、曲者だろうと、有能な貴族を味方につけた方が利口だ。

「私は、これから最北に向います」

去り際に、リシャーナが呟いた言葉に、イゼルナは敏感に反応した。

「ノースフィールド子爵に会うつもりですか！　やめなさい、後悔しますよ！」

彼女が焦るのも無理はない。最北の帝国領である島を領有する貴族、ノースフィールド子爵家には黒い噂が絶えない。異界からの移住者の子孫であるとか、根も葉もない噂だが、国内では忌避されている。

だが、慌てる理由はそれだけではない。

「この時期に、あの島へ渡航することは不可能でしょう！ 何を馬鹿なことを！」

そう、ノースフィールド家が領有してる島は、夏季のわずかな期間に渡航できるだけなのだ。原因となっているのは、棚氷だ。それが船の行く手を拒むのだ。故に、ノースフィールド家は、貴族なら一年に一度上洛する義務があるにも関わらず、それが三年に一度とされている。

「事態の深刻を打開するには、不可能を可能にするしかありません。私は、護衛を引き連れて、棚氷を歩きます」

さらりとした口調だが、それは簡単なことではない。棚氷だろうと、そこは極寒であり、半端な装備では生きて帰ることは困難だろう。野生生物の存在もあり、敵は寒さに限ったことではない。

ここで、リシャーナに死なれては困る。引き留めようとするイゼルナだが、早足で退出する彼をとめることは叶わなかった。

＊

イゼルナの館を後にすると、休む間もなくローゼンの館に馬車を走らせた。

一度は殴ってもいいだろうと考えていたが、実際に会ったことでそんな気持ちは失せた。ローゼンが、すでに臨戦態勢に入っていたからだ。目には覇気が宿っている。

最北の島に向かうことを告げると、彼は同行を申し出た。錆びついている感覚を取り戻し、自分に活を入れたいとのことだった。もちろん、承諾した。

「しかし、よく立ち直ったな。これが、ティファンヌ効果か？」

からかわれたローゼンは、形のいい顎を撫でながら答える。

「どうでしょうね。フロウリーの年増に叱咤されるよりはやる気になりますけど」

「あいつも捕まっているぞ。助けたいんだろう？」

その問いには返事はなかった。

代わりに、ローゼンは剣を抜いた。薔薇の彫刻がされた一点ものだ。バルトシュタイン家に相応しいその剣には、決意が宿っているように見えた。

第二十四話　く準備段階く（後書き）

次回更新は、6月1日です。よろしくお願いします。

第二十五話　　極寒の地へ

帝国最北の地とされる島は、夏季のほんのわずかな期間を除いては渡航不可能である。だが、破天荒ながらも、島へつながる道が残されている。島の周囲を浮かぶ、巨大な氷棚の上を歩くことだ。

中規模の木造船で棚氷までたどり着いた、リシャーナ率いる部隊は、構成員三十人。いずれも、屈強だけでなく豪雪地帯の出身者である。イゼルナに兵を借りてからまだ三日も経っていないことを考えれば、充実した人員だ。

さらに、この部隊には心強い助っ人がいる。バルトシュタイン辺境伯家の当主にして、聖騎士の称号を持つ、ローゼン・バルトシュタインである。

身長こそはローゼンに少し劣るものの、岩のような逞しい筋肉をほこる男たちが、尊敬の眼差しで見ている。帝国でも数少ない聖騎士が、それほどまでに格の違う実力者だという動かぬ証拠である。肩をすくめながら、ローゼンは言う。

「俺のことじっくり見てますけど、気でもあるんでしょうかね？」
尊敬されることは嬉しいが、男に凝視されることは、彼の趣味ではなかった。

「そんな軽口が叩けるなんて元気じゃないか……」
上等な毛皮であしらわれた防寒具をまといながらも、リシャーナは身を縮めていた。一方のローゼンは、普段とさほど変わらない服装であるにも関わらず顔色一つ変えない。

「聖騎士っていうのは、化け物ぞろいだな……」
「そうですね。単独で、この極寒から生還できる人もいますからね」
その言葉に、男たちが反応した。口々に感嘆の声を漏らす。
「お前、覚悟してろよ。今はまだ昼間だから余裕でいられても、夜になったら、さらに冷えるらしいぞ……」

この時点で、最も死に近い人間は自分であるにも関わらず、脅し

をかける。その寒さを体感することになるのは、彼も同様だ。

ローゼンは、進行方向を見定めた。一面の銀世界である。天候は良好で、日の光が射している。これから移動する条件としては、最高と言ってもいいだろう。仮に、吹雪であれば、ローゼンですらも余裕はなかっただろう。

そして、敵は寒さだけではない。この気候に適応できる生物が生息しているのだ。例えば、熊だが。その大きさは、大陸で見られる個体の倍を超える。加えて、凶暴性も増しているため、簡単には手が付けられない。音を鳴らすことで、こちらの存在をあらかじめ知らせれば遭遇する可能性は低いが、不運にも遭遇した場合には戦わざるを得ない。

肩を叩かれ、ローゼンは振り返った。

「さ、そろそろ向かうとしよう。今日中に、島までたどり着けないとなると厳しい……」

すでに、全員が装備を整えている。ローゼンは剣を確認して、しんがり殿を務めるとになった。

一歩踏みしめる度に、足が沈む。歩けなくなるほどではないが、少しずつ水分を含んでいく軍靴が重くなっていく。ここが氷の上だということを忘れてしまいそうになるほど、周囲には何もない。動物避けの鈴が鳴る音だけが聞こえる。

ノースフィールド家の館がある島だが、島民は千人未満であり、そのため子爵といっても徴収できる税は限られている。さらに、年中が冬季であると言っても過言ではないので、漁業などの産業は存在しないに等しい。貴族とは名ばかりの貧乏人。平民にすら陰口を叩かれる斜陽の一族である。

そんな家が、国内で、特に貴族の間で忌避されているか。それは、出所不明な経歴が原因である。文献において、その存在がはじめて確認されたのは、約百年前。帝国が存亡の危機に瀕していた時代だ。ノースフィールド家は、バルトシュタイン家と同様に最終決戦直前に帝国へ寝返ったことで創設された。加えて、始祖である、ユーフ

オニー・ノースフィールドは異界の人間だという噂がある。伝説的な時代にはこの類の噂がありふれているが、ノースフィールド家については信憑性を超えて遍く伝わっている。

信じているわけではないが、ローゼンもあまり良い印象を抱いていない。似たような経歴で誕生した家だが、まるで別の生き物のようだと言っている。だが、一度は直接話してみたいという願望もある。

今回の動向を申し出の理由は、エロールを助けるためだけではなかった。鈍った剣の感覚を研ぎ澄ます為と、覚悟をより強固にする為でもある。もしも、ノースフィールド家の当主が自分に近い人生を送ってきたならば、あるいは苦しみを共有できる仲間ができるかもしれない。皇族でありながら不遇な人生であったエロールと同じように。

エロールの存在は、ゴードレスと並んで、ローゼンにとっては特別だ。簡単に、ゴードレスへの恩義を優先させて、先の戦いに不参加したわけではない。誰にも相談することなく、彼なりに悩んだ末に選んだ選択であった。

あるいは間違っているであろう決断だったが、もしもそれについて過剰に咎められることがあったならば、彼はその相手を許さなかっただろう。傲慢かもしれないが、彼は自分の選択を自分以外の誰かに咎められる謂れはないと考えている。そのせいで捕虜になってしまった、エロールとフロウリーならば別だが、他は納得できない。人を咎めるという行為は難しいことだ。咎める人間は、どんなに丁寧な口調だろうと、必ず相手より高い位置にいることになる。相手のすべてを知ってでもない限り、反省させることは無理だろう。それは悪戯に傷つけることになる。

ある意味では、ローゼンは被害者である。肉体的ではない、精神的に苦しんだのだ。親友と恩人を天秤にかけるという苦行を与えられたのだ。

だが、ローゼンには、エロールたちに弁明するつもりなど毛頭な

かった。助けた後に、どんなに罵られようが、絶交されようが、改易されようが甘んじて受ける覚悟だった。

第二十五話　く極寒の地へく（後書き）

次回更新は、6月4日です。よろしくお願いします。感想があれば、ぜひお願いします。

第二十六話　　横顔美人の子爵家当主

獰猛なはずの熊が、目を剥き、血を流して、冷たい雪の上で絶命している。致命傷となった傷は、成人男性の両腕を合わせた以上に太い首に深く刻まれている。

それだけの仕事を成し遂げたにも関わらず、ローゼンは涼しい顔で白い息を吐いている。

「一撃か。さすがだな……」

今にも倒れそうになりながら、リシャーナは賛辞する。だが、ローゼンのかぶりを振ってため息をついた。

「いえ、これではいけません。太刀筋が、微妙に違います。少しですが出遅れました」

それは謙遜ではなかった。純粹に、自らの剣技に納得していないのだ。常人には華麗な動作に見えても、達人からすれば失敗なのだ。日々の鍛練を怠けていたことを、ローゼンは心の底から悔やんでいた。

もう一度、剣を抜く。細身の両刃には、細かい傷がある。先ほどの一撃で、恐らく、骨にあたっただろう。剣は万能ではない。素人が振り回せば、数人斬っただけで使い物にならなくなる。聖騎士ともなれば相当な人数を斬ることができるが、今のローゼンにはそれはできないだろう。

リシャーナが声をかけてきた。熊の解体が済んだようだ。少し遅れて歩き出す。

「レフィスト子爵は、ノースフィールド子爵との面識はありますか？」

ひとまず剣のことは忘れようと、気分転換に自ら話題を振った。

「エリノーラ・ノースフィールドか……。最後に見たのは、かなり昔だな。今年で、二十八歳くらいか、あの女……」

「へえ、二十八歳ですか」

完全に好みの年齢であった。剣のことを頭の外に放り出し、さらに尋ねる。

「ちなみに、容姿のほうは？」

「美人。ただし、角度による」

最適な角度は横顔だ、と彼は言った。

質素な応接室には、質素な暖炉が備え付けられている。家具も同様で、高価な装飾など皆無である。子爵だろうと、人口千人未満の島の領主であれば暮らし向きは決して楽ではない。

扉が開き、黒髪を後頭部で一本の三つ編みにした女性が入室する。欠伸をしながら、自ら暖炉に火をつける。この島は、夏季を覗いて、火を絶やすことは命取りになるほど気温が低い。島民の死亡原因の第一位は、病気でも戦死でもなく、凍死となっているほどに。

火の勢いが安定すると、黒髪の女性――ノースフィールド子爵家当主である、エリノーラ・ノースフィールドは質素な長椅子に椅子に腰かけた。

「ああ、腹減ったなあ……」

貴族らしからぬ下品な発言をして、エリノーラはため息をつく。すでに五日以上もまともな食事をしていなかったからだ。

徴収できる年貢が限られていて、さらに特記する産業も存在しないこの島では、定期的に飢餓に襲われる。それは領主も例外ではなく、生まれて二十八年間悩まされている。

「寝ようかなあ……」

少しずつ室内が温かくなってきたことで、それに比例してエリノーラの瞼は重くなる。空腹だろうと、寝てしまえば、その間は楽になれる。寝ようと、彼女は決めた。

だが、眠りに落ちる寸前でエリノーラは立ち上った。

「……戸締りはしておくか」

人口が少ないだけあって、島内の治安は非常に良いが、それでも用心するに越したことはない。意外にも、エリノーラは用心深い性格だった。

老朽化して色が剥げてしまった扉を開き、そとに誰もいないことを確認する。

「いや、そもそも、この館に私しかいないし……」

馬鹿だなあ、と苦笑いしながら扉を閉じようとした。その時、前方に人影が見えた。

最初こそは、島内にいる役人かと思ったエリノーラだったが、違うと悟った。服装が、明らかに違った。この島では、彼女も含めて、あれだけ高級な服を着るものはいないからだ。

「失礼、どなただろうか？」

先ほどまでのだらけた姿勢を改め、貴族としての顔で尋ねる。人影は、金髪の青年と、茶髪の壮年男だった。

金髪の青年が答える。

「これは失礼、正門が空いていたので勝手に入ってしまった」

「いや、構わないよ」

あれは壊れているんだよ、とは言えなかった。相手の正体分からない状況で、舐められるような発言は控えなくてはならない。

独特の動きをしながら、金髪の青年は名乗る。

「申し遅れたが、私はローゼン・バルトシュタイン。バルトシュタイン辺境伯家の当主であります」

「レフィスト子爵家当主、リシャーナ・レフィスト……」

次いで、茶髪の男もふらふらになりながら名乗る。エリノーラは怪訝な顔で、死にそうなりシャーナを覗き込む。

「生きてますか？」

「一応……」

無理をして笑った表情は、まるで意識不明から回復した直前のように青白い。釣られて、エリノーラも苦笑いする。

「私は、ノースフィールド子爵家当主のエリノーラ・ノースフィー

ルドです。ようこそ、我が館に」

このままでは凍死するな、と考え、早々に中に招いた。

先ほど暖炉に火を入れた部屋で、三人は向かい合って座った。椅子はちょうど三人分、部屋に置いてあった。

「すると、お二人は、棚氷を歩いてここまで？」

当初からどのような手段を用いてたどり着いたのか気になっていたが、そこまで破天荒だとは考えていなかったエリノーラは驚くというより呆れた。

「ははは、驚かれるのも無理はありませんな。ここまで来るために雇った男たちは、適当な宿に停まらせましたが、すでに限界のようでした。最後まで元気だったのは、この男だけですよ」

血色のよくなったリシャーナの滑舌は完全に復活していた。隣に座るローゼンを軽く叩きながら、身振り手振りを交えて語る姿は、まるで役者だ。

「なるほど、さすがは聖騎士ということですか」

挨拶の際にローゼンが見せた独特な動作は、聖騎士のみが許される伝統的な儀礼で、エリノーラも実際に見たことは数回しかなかった。同時に、聖騎士ならばこの程度の寒さなど平気か、と納得した。「それで、どのような用向きでしょうか。このような辺鄙な島までお越しになったということは、相応の事情があるとお見受けしましたが」

雑談はこの程度で、とエリノーラは本題に入る準備をする。それを見て、ローゼンとリシャーナも姿勢を正して、神妙な表情になる。「よくぞお分かりで」

「この島に物見遊山というはずもありませんからね」

「それもそうですな」

リシャーナは懷から、一枚の羊皮紙を取り出した。受け取ったエ

リノーラは熟読した後、自ら切り出した。

「イゼルナ様というと、第二皇女殿下ですね。コーハリス共和国との戦に助力せよ、ということですが、戦があったこと自体初耳でした」

「氷に閉ざされた世界では仕方ありませんよ。ですが、エロール様が捕縛されたとなると、無関係では通せませんな」

「第三皇子殿下が、敵の捕虜に？ それは間違いないのですか！」

「私も参加していたからな。エロール様の判断が無ければ、恐らく全滅は免れなかっただろうな」

悔しそうに唇を噛むリシャーナ。その姿を見て、忠義だな、とエリノーラは冷ややかな評価を下した。

忠義というものに、エリノーラは――むしろノースフィールド家は縁が無い。地理的な理由だけでなく、心も帝国の中心から距離を置いているからだ。黒い噂がるだけに、誰も進んでノースフィールドと関わろうとしなかっただけに、その溝はより一層深くなってしまったのだ。

役人が派遣されてくることもあるが、誰もが任期制であるために、深いつながりを持つこともできなかった。島民との関係もそれほど深くない。

だから、エリノーラは友情だとか、忠義だとか、その手の感情には関心が浅かった。

「助力するのは吝かではありませんが、何故私を選ばれたのですか？ この地から出陣するとなると、相当な苦労が予想されますよ。装備と兵糧を揃えるにも時間が必要です」

「その点は心配なさるな。装備と兵糧に関しては、イゼルナ様がありがたくも自ら揃えてくださるそうだ」

「ですが、私の配下は百人程度ですよ。これで役に立ちますか？」

「十分だ。足りない兵力は、イゼルナ様に掛け合ってみるさ」

遠回しに断ろうとするエリノーラだったが、肝心のリシャーナは勝手に話を進めてしまい、隙が無い。

ならば、と黙り込んでいるローゼンに対象を換える。

「バルトシュタイン辺境伯はいかがでしょうか。私がいたところで足手まといだとは思いませんか？」

腕組みをしていたローゼンはゆっくりと口を開いた。

「――確かに、横顔は最適な角度ですね。正面ならそうでもないのに、横からだと美人だ」

この重要な話し合いで、ローゼンのはのん気にエリノーラの最適角度を研究していた。隣のリシャーナは、何も言わずに、椅子を蹴り倒した。

第二十六話　　く横顔美人の子爵家当主く（後書き）

次回の更新は、来週です。よろしくお願いします。

霧島卿

第二十七話　く困窮する子爵家く

参戦についての返事はひとまず保留することにして、リシャーナは近くの町に行ってしまった。その際に彼は一言だけ言い残した。

「形式上は参戦を任意にしているが、実際には皇女殿下からのお願いだからな。その点には留意しておかれよ」

脅しもいいところだな、とエリノーラは苦笑した。

「皇女殿下も、素直に命令なさればよろしいのにね。そう思いませんか、バルトシュタイン辺境伯？」

先ほどと同じ応接室で、ローゼンとエリノーラは暖炉の真正面に座って談笑していた。ローゼンは頭を撫でながら返事をする。

「面倒な人間が多いのでしよう、皇族には。強制的に参戦させれば楽なものを、わざわざお願いするのだから理解できませんよ」

「第三皇子殿下も同じでしたか。それで、バルトシュタイン辺境伯は参戦を拒否されたのですか。納得です」

「はは……、納得されても困りますよ」

失言だったな、とローゼンは自分の発言を悔やんだ。参戦を拒否したという先例があることを知られれば、拒む口実になってしまう可能性があるからだ。

「ですがね——」

何か興味を惹き、参戦を促そうとするローゼンだが、話題を探す段階から進まない。そのつど適当に誤魔化すのだが、すでに限界に近かった。

「ところで、バルトシュタイン辺境伯」

「ええ、何でしょうか？」

珍しくエリノーラから話題を振られ、ローゼンはすぐに反応する。「この島をご覧になられて、何か感想などありませんか？　島の今後において、島外の方からいただく意見は非常に重要ですので、ぜひお願いいたします」

「島についての感想ですか……」

それどころじゃないだろう、と言いつ返したい気持ちを抑え、ここにたどり着くまでの道のりを思い出す。氷棚のことは省き、上陸後のことを思い出しても、島内には大陸とは違い活気がまったくなかった。気温が低いからだろう、民家はどこも窓を閉め切っていて人の気配がせず。売り場らしき場所では、まるで嵐が過ぎ去った後のように荒れ果てた光景が広がっていた。

考えてみると、同行してきた男たちを泊めた宿以外では、人も一人も見えていなかったのだ。

「……その、非常に言いにくいですが、寂れているとしか私には思えません」

お世辞で誤魔化すようなことはしなかった。この狭い島で二十八年も生きているエリノーラにとって、島内などすでに知り尽くした場所であるに違いないという確信があったからだ。それに、領主がわざわざ意見を求めているというのに、それに対して嘘で答えるのはローゼンにとって耐えられないことだった。

正直な意見を聞き、それが想像通りだったエリノーラは両手を広げて天を仰いだ。

「そうでしょう。普通ならば、そう思われるのが正常でしょう」

「申し訳ない、ノースフィールド子爵……」

律儀に頭を下げるローゼン。構いませんよ。とエリノーラは声をかける。

「正直な意見をありがとうございます。大陸の方とお会いする機会が減多にないので、必ず尋ねることにしているのですよ」

「そうですか……。あなたは良い領主ですね、子爵」

「そんな立派な存在ではありませんよ」

首を振るエリノーラ。それは謙遜ではなく、自分が良い領主とは遠い存在であるという負い目からの行動だった。

「私が父の後を継いだ時期には――九年ほど前ですが、すでに島内の人口は千人を下回り、寂れる勢いは止まりません。主要な産業も

無く——強いて言うなら熊の毛皮程度ですが、猟師や毛皮職人がほとんどいないので、それもままなりません」

「農作物も壊滅的だとか……」

「それは元々ですよ。農業には最悪な環境ですから、諦めています。林業も、下手に木を切りすぎると、冬場の薪が無くなりますからね」
冷静に島の現状を伝えられ、本来なら参戦を促すために足を運んだローゼンだが、心のどこかで目的を二の次に考える自分がいることに気が付いた。

そもそも、バルトシュタイン家とノースフィールド家は似たような出自であり、帝国に寝返ったという過去に関しても同じなのだ。だが、両家の扱いは後者が圧倒的に冷遇されている。

辺境伯として大陸に領地を持ち、さらには代々当主が『陪臣長』として年貢以外にも多額の報酬を得ているバルトシュタイン家。対して、ノースフィールド家は帝国最北の小さな島を領土としているだけで、特に高い官位も与えられず、他家とのつながりも薄いために困窮を極めている。

女性であるエリノーラが当主となったのも、彼女の兄が適切な治療を受けることができずに夭折したためだった。この島には医者や二人しかおらず、それも経験の浅い若者で、さらに高級な薬も売られていないことが原因だった。

「一応は、『帝国主水正』ていこくしゅすいのかみとして官位を頂いているので、生活できないというほどではありませんよ——使用人を雇う甲斐性はありませんけど」

使用人すら雇えない——つまり平民と大差ない生活ということだ。官位といっても、『帝国主水正』は従六位上。これだけで平均的な貴族の生活を維持するなど無理だろう。

よくよく見れば、エリノーラは顔立ちこそ並より上だが、衣服に使われている布は質が悪く、後ろで一本の三つ編みにしている黒髪もさほど綺麗ではない。身なりに気を使う余裕すらないのだろう。

「余計なことを言わせてしまいましたね、申し訳ない……」

「いえ、私が勝手に話しただけですから。愚痴を聞いてほしかったのでしよう、私は」

両者の間に気まずい空気が流れ、特にローゼンは何を言っているか分からず、ただ黙るしかなかった。

しかし、この沈黙がローゼンに閃きをもたらした。

「――それなら、参戦することはノースフィールド家にとって得になるのでは？」

考えるまでもなかったのだ。困窮しているにも関わらず、大陸とつながりを持てる機会を逃す道理など存在しない。これを利用すれば、容易に参戦させることが可能ではないかと、ローゼンは気が付いた。

「仮に、コーハリス共和国との一戦で勝利してエロールを奪還すれば、参戦していたノースフィールド家にも皇室から褒美があるかもしれないよ。エロールから何かしらあるかもしれないし」

「え、ええ、そうですね……」

これまで消極的な姿勢を見せていたエリノーラが、ここで初めて歯切れの悪い返事ながらも、肯定的な言葉を口にした。

「ですが、我が手勢は百人足らずで、皇女殿下から兵を借りてしまえば意味がありません。戦功は、自らの手勢で挙げることに意義があるのです。それは、聖騎士であるバルトシュタイン辺境伯が一番よくお分かりでしょう？」

筋の通った切り返しだった、他家から兵を借りて戦功を挙げた場合、その利益は貸主に還元されることが軍法で明文化されているのだ。

だが、ここで引くわけにはいかないローゼンは押し続ける。

「それについては、私が取り計らいましょう。イゼルナ様は、単純にエロールを助けることだけが目的です。戦功ごとき、すべて子爵に下賜されるでしょう」

「そう、でしょうか？」

それでも渋るエリノーラに、最後の一押しとしてローゼンは付け

加える。

「私の戦功についても差し上げましょう」

これが今のローゼンには精一杯の説得だった。リシャーナがいれば、さらに説得に厚みが増すのだろうが、彼に頼らずに説得するところがローゼンにからすれば自分にとっての課題だった。それくらいは当然だと決めていたからだ。

しばらく口を閉ざし、一人で考え込んでいたエリノーラが返事をした。

「――私には、手勢一千を用意していただくように、皇女殿下にお伝えできますか？」

第二十七話 〱困窮する子爵家〱（後書き）

次回更新は、来週を予定しています。
次もよろしくお願いします。

霧島卿

第二十八話　く毛皮く

波止場には一隻の船も止められておらず、ただ降り積もる雪に压倒されているように見えた。人影は皆無で、そもそも生き物の姿すらない。

ノースフィールドの館から出てしばらく、寒さに弱いリシャーナは早足で島内を散策していた。滅多に訪れる機会の無い場所だ。帰路に着くまではじつくりと巡ろう、と彼は考えていた。

「せめて除雪くらいはすればいいものを」

つまずかないように慎重に歩を進める。雪の下に氷が張っている箇所が特に危険だ。大陸にも雪は積るが、ここまでの豪雪はあり得ない。レフィスト子爵家の領地でも領民を使役して除雪をするが、仮にここまでの惨状だとすれば死人が出て不思議ではない。

寂れた島内を目の当たりにして、この先を憂いたリシャーナだが、自分にはどうすることもできないと直後に気付いた。自分の目的はあくまでノースフィールド家を参戦させることで、それ以上のことは誰からも求められていない。そう言い聞かせて、館に続く道を進もうとした。

一歩踏み出したところで背後から声をかけられた。

「すみません、ちょっといいですか」

振り返ると、そこには厚着をした中年の男がいた。申し訳なさそうに軽く頭を下げ、無精髭を撫でながら歩み寄ってくる。

「旅人さんですか？」

「そうだな、旅人だ」

実際には違うが、ここで素性を明かしては面倒だろうと考えて話を合わせた。すっかり信じたのだろうか、中年の男は満足そうに頷いた。

「やっぱり、そうでしたか。すると棚氷の上を歩いてここまで？」

「ああ、そうだ」

「寒かったでしょう。凶暴な獣もいたと思いますが、怪我はありませんでしたか？」

「問題ない。強い男が同行していたからな」

「へえ、あの獣たちに挑むなんて度胸のある人だ。まるで帝国の騎士様ですね」

「当たらずとも遠からず。その男は聖騎士なのだから。」

「それで、これからどちらに行かれるのですか？」

「特に決めていないな。元氣のあるうちは島内を散策するつもりだが」

「それは危険ですよ。この島の天気は気まぐれですから、今は晴れていても突然雲行きが悪くなることもあります。今のうちに宿を確保することをお勧めしますよ」

「そうか、ならばそうするでしょう」

これで失礼、とりシャーナは踵を返した。だが、再び一步踏み出したところで今度は肩を掴まれた。

「いや、よろしければ少し手伝ってもらいたいことがあるのですが、大丈夫ですか？」

中年の男は遠くに立つ建物を指さした。この距離からでもよく分かるほど古い木造の建物だ。

「実は、熊を解体してしましてね。簡単な作業ですから、手伝ってもらえませんか。人手が足りなくて困り果てているのです」

改めて頭を下げられる。貴族ではあるが、まだ身分を明らかにしていないリシャーナは上手く断わる術がなかった。中年の男も善人に違いないだろう、と無理矢理自分を納得させて後に続いた。

遠くから見ても古い建物だったが、近くで見るとむしろ汚い建物だった。しかし、これだけの豪雪地帯でもつぶされることなく形を維持できているのだから、それなりの木材を使っているのだろう。

「いや、申し訳ない。少しだけ獣臭いですが、我慢してください」

「ああ——うっ！」

大丈夫だ、と返事をしようとしたが、予想以上の獣臭さに一瞬呼

吸が止まってしまった。すぐに口だけで呼吸をしたが、鼻を塞いでいるにも関わらず臭さは変わらない。

「こ、これはすさまじいな……」

「新鮮な熊ですから——死んでいますけど」

そう言いながら躊躇なく解体を始める。手際よく毛皮を剥ぎ、食糧となる箇所肉だけを切り分ける。リシャーナは指示された通りに手伝ったが、実際の解体はすべて中年の男によって行われた。

あまりに手慣れた動作に、当初は屠畜屋か何かをしているのだろうと思ったりリシャーナだったが、それを確かめてみると違った。自分分は毛皮職人を目指している、と中年の男は答えたのだ。

「今から職人を目指すには遅いですが、それでも努力はしていますよ。熊は罠を使って動きを封じればそれほど怖くはありませんから、ときどき狩りにいつているのです。食糧にもなりますから、生活には困りません」

確かに、室内には肉を炙った形跡がある。ここで生活しているのは本当のようだ。

「ああ、ところで」

肉を部位ごとに分ける作業の途中で、不意に中年の男は振り返った。まだ名前を名乗っていなかった、と申し訳なさそうに頭を下げた。

「自分は、この島の生まれでテッド・ニックマンです。どうぞよろしく」

相手が貴族であると知らず、堂々と握手を求めてくるテッド。あまり気は進まなかったが、ここで偉そうにしても無駄だと考えたりリシャーナはそれに応じた。

「私は、リシャーナ。リシャーナ・アレフィストだ」

本来なら貴族が偽名を使うなど言語道断だが、すでに身分を隠している時点でリシャーナに罪悪感はなかった。

「さて、私はこれで失礼させてもらう」

律儀に後始末まで手伝い、完全に済ませたところでリシャーナは

別れの挨拶をした。壁の隙間から除くと、晴れていたはずの空が少しずつ鈍色になっていた。これは降るだろう、と直感した。

「ああ、それならこれをお持ちくださいよ」

中年の男は先んじてリシャーナにお土産を手渡した。捌いたばかりの肉だった。

「股肉ですが、直接炙って塩をかけてください。私がおすすめしますよ」

何かの植物の葉にくるまれた状態だった。それでも血の匂いが強く、獣臭さも健在だ。だが、リシャーナは嫌な顔すらせずに受け取った。

「いい体験だった、ありがとう」

貴族としての体面があるために頭を下げることはしなかったが、しっかりと相手の目を見てお礼を言った。

館に続く道の途中で立ち止まり、衣服の臭いを嗅いだ。

「臭いな」

とうぜんながら獣臭さがこびりついていていた。しかし、生まれて初めて獣の解体に携わることができたのは良い経験だったとリシャーナは微笑んだ。

帰路では自ら熊を解体してみるのも面白いな、と。

第二十九話　ゝ弱音ゝ（前書き）

三章はこれで最後です。

第二十九話　（弱音）

ノースフィールド子爵家が領有する島での滞在は最終日を迎えた。リシャーナは街の宿に泊めていた男たちを呼ぶため、一足先に館を出た。ローゼンはと言うと、久方ぶりに大陸に向かうことで緊張する素振りを見せるエリノーラの肩の力を抜こうと奮戦していた。

「この時季の大陸はすでに暖かいです。その様な恰好は場違いでしょう」

「そ、そうでしょうか……」

一張羅ということなのだろうか、質の良い毛皮を脱ぎ捨てる。すると途端に貧相に見える。顔立ちと体型こそは整っているのだが、それは庶民ならばという話で、普通にしていて貴族だと一目で分かるほどの気品とは異なる。

「随分と、その、困窮されているようですね」

あまりにも気の毒に思ったローゼンは、普段ならそこまで世話を焼くようなことはしないのだが、今回ばかりは憐憫を垂れた。

「大陸での一戦まで時間はあります。それまでに、使用人に命令して何かを用意させましょう。女性で、子爵と歳の近い使用人を知っています。彼女に用意させましょう」

ティファヌ・リベラの顔を思い出す。彼女ならば二つ返事で引き受けてくれるだろうと。

それと同時に、ロマリアの顔が脳裏に浮かぶ。まだ八歳の少女だ。エロールが捕縛されてからは一度も、その顔を見ていない。ローゼン自身が故意に避けていたからだ。

考えてみれば、自分がここにいることも順序が逆転しているかもしれない、とローゼンは不意に己の矛盾に気が付いた。エロールを救出すれば、確かに罪滅ぼしとしては十分だろう。それならば、ロマリアからも何かを言われることはない。だが、それでは大切な何かを蔑ろにしているように思える。

先に、それも真っ先に頭を下げるべきなのだろう。それが正しい順序であり、聖騎士云々ではなく人として果たすべき礼儀ではないのだろうか、と。

急に黙り込んでしまったローゼン。それを訝しげに見つめるエリノーラ。

「バルトシュタイン辺境伯、いかがなされました。何か悩み事でしょうか？」

「いえ、子爵には関係のないこと。私自身で解決すべき問題です」失礼にならない対応で、エリノーラからの気遣いを断る。だが、意外にも彼女は食い下がった。

「そう仰らず。これから生死を共にする仲間ではありませんか。悩みがあつては、戦場での死期を早めるだけだと、亡き父上が申しております」

「父上様ですか。戦場に精通された方だったのでしょね。それほどの言葉を遺されるとは」

「いえ、父上は生涯でほとんど人を殺めたことがないそうです」

「それではあり得ないでしょう」

思わず苦笑する。直接に手を下さなくとも、貴族は指揮官として多くの人を間接的に殺してしまうものだ。

「貴族こそ、偉そうにしているものの最低の人殺しですよ。これから我々もその仲間になるのです」

「いいえ、父上は違います。常に荷駄役を押し付けられていたそうです」

「荷駄役だと？」

合点がいった。自軍の後方で物資の補給を担当する荷駄役ならば、必要以上に人を殺めることはないだろう。むしろ、殺めるなければいけない機会が訪れるほどの戦争自体少ないのだから。

「大陸の貴族ではないので軽んじられていたのでしょう。ですが、父上はさほど気にされていた様子はありませんでした。今となつては分かりませんが、必要以上の殺生を避けられたことを喜んでおら

れたのではないか、と。少なくとも、娘である私はそう考えています」

そうだろうな、とローゼンも思った。

最北の地で貧困に苦しみ、貴族としての体面を守れているとはとても言えないノースフィールド子爵家。しかしながら、人間としての大切なことはしっかりと守れている。

暖炉の火を始末するために踵を返すエリノーラ。その背中に、ローゼンは少しだけ頭を下げた。

リシャーナ率いる遠征部隊が最北の島を出発したその夜。主無き館の応接室で、女の使用人が暖炉を凝視していた。

冬季こそは大いに役立つ暖炉だが、春ともなれば役目を終えて火を絶やす。自分もそれと似ているのではないか、とティファンヌは悲しく思った。誰かに何かを言われたわけではない。彼女には主であるエロールだけでなく、その他の貴族たちも賞賛をする。働きぶりが立派だとか、有能だとか、容姿が美しいだとか、礼儀正しいだとか、これまでに彼女が受けた褒め言葉は尽きない。

普段は冷静で感情に乏しいエロールも、使用人であるティファンヌが褒められると自分のこと以上に喜ぶ。まるで親が子息の活躍を見て頬を緩めるかのように。

されど不安はある。

「私も来年で三十を迎えます。いつまで優秀な使用人でいられるか……」

いつまでも若いままではいられない。誰しもが老いるように、ティファンヌもまた老いる。次第に体力は衰え、これまでのように機敏に仕事を済ませることは叶わなくなる。容姿も衰える。そうなれば、自分是用済みになるのではないだろうか、と。

弱音など自分らしくないと思い、これまで抑えて生きてきた。だ

が、人間である以上は弱さと共存しなければいけない。それによって蓄積される鬱憤を晴らすために弱音を吐くのだから、無理矢理に押さえつけては解消することができなくなるのは必然だ。

この館で弱音を漏らすのは初めてだった。その相手がまさか暖炉とは、とティファヌは自分の周囲を羨んだ。家族がいれば暖炉になど弱音をなく必要はないから。

だが、ここには自分と似たような境遇の人間がいる。それも、ティファヌよりも遥かに幼い。まだ、八歳だ。本来なら甘えたい盛だろう。そう考えると、どうしても彼女は弱い姿を見せられない。

別に母親としての役割を果たす必要はない。ただ、使用人として生きればいいのだ。それはこれまでに生きてきたやり方と変わらない。だが、それでもいいのだろうかと自問する。

「これから私はどう生きるべきなのでしょうか……」

誰にも相談できない。悲しさにティファヌは涙を堪えた。

第二十九話　　ゝ弱音ゝ（後書き）

第三十話　大陸への帰還

大陸に戻ったりリシャーナの一行は、その足ですぐにイゼルナの館に向った。ノースフィールド子爵家の参戦を直接伝えるためだ。

使用人の案内で通された応接室では、以前よりも薄紫の髪が伸びたイゼルナが一行を待ち構えていた。挨拶も早々に、彼女はエリノールへ近づいて一言。

「最北の島からよくぞ来てくれた、ノースフィールド子爵家当主エリノール・ノースフィールド。大陸での体調はいかがですか？」

意外にもその口調は優しい。俺の時とは違うな、トリシャーナは見えないように肩を竦めた。

第二皇女からの労いの言葉に、滅多に大陸へ足を踏み入れないエリノールは少し動揺したが、それでもすぐに子爵家の当主としての礼儀を示す。

「お言葉、身に余る光栄です。これまで帝国へ貢献することができなかった我がノースフィールド子爵家。来る戦場で、第三皇子殿下をお救い申し上げるとともに、これまでの汚名を雪ぐ覚悟であります」

「期待していますよ、ノースフィールド子爵」

「御意」

深々とエリノールが頭を下げる。イゼルナは満足そうに頷き、次にローゼンへ視線を送る。一転して口調が刺々しくなる。

「バルトシュタイン辺境伯、あなたは先のコーハリス共和国との戦いで、兄様の再三に渡る従軍要請を拒否して、敗戦の直接的な原因を作り出しました。それについては理解していますね」

自ら進み出て、大人と子ども程の身長差があるローゼンを睨みつける。目を逸らしたくなる本能を押さえて、視線を逸らさずに返事をする。

「心得ており、反省しております」

お前に言われるまでもない、と言いたところだったがそれは控えた。ここで下手に反感を買えば、それこそ従軍から外される可能性もある。自らの手で、エロールの奪還を果たさなければならぬローゼンにとってそれは避けねばならないことだった。

「共和制などという絵空事を掲げる逆賊をことごとく我が剣で屠り、この世界に帝国ありということを近隣の諸国に骨の髄まで知らしめましょう」

「それでこそ、我が帝国が誇る最高戦力である聖騎士の一人。逆賊の首領の首級を挙げた暁には、兄上様の信頼を裏切った罪を特別に不問としましょう」

「はっ、全力を尽くします」

イゼルナが二人と話したのはそこまでだった。再戦に向けた今後の準備については、ここでリシャーナが代表してイゼルナと話すことになり、二人は応接室から退出を命じられた。

声が届かない中庭まで足を運んで、やっとローゼンは口を開く。

「兄上様の信頼を裏切った罪を特別に不問としましょう——小賢しいことを言う皇女様だ。許すかどうかの判断はエロールがすることだろう」

気持ちの悪い兄妹愛だな、と吐き捨てた。

「そう思うでしょう、子爵」

同意を求められたエリノーラは首を傾げて、右手の人差し指でこめかみを突いた。

「バルトシュタイン辺境伯は、相手が皇族でも陰口を控えない方なのですね」

「意外でしょうか」

「とても意外です。私たちの家系は出自が似ているので、常に弱みを握られないように細心の注意を払っているのだと思っていました。まして陰口を堂々とこんな場所で口にするとは、信じられません」

用心深いですね、とローゼンは笑った。決して馬鹿にした笑いはなかったが、そう受け取れなかったエリノーラは親指でこめかみ

を強く押した。

「そのような余裕は感心できませんね。出自が褒められたものでない一族は、そうでない一族よりも警戒心を数段強く持たなければならないと私は教育されました。バルトシュタイン辺境伯家では、そのような教育はされていないのですか」

「そんな馬鹿馬鹿しい教育をされた記憶はありません。されたところで、私のことです。頭の片隅にも残りませんよ」

ローゼンはまだ笑う。今度こそはあざ笑うように。

「なるほど、聖騎士としての慢心ですか。最高戦力ともなると、さぞ優遇されているのでしょうか」

エリノーラも負けていない。皮肉な言葉をローゼンに浴びせて、一本の三つ編みにまとめた後ろ髪を撫でる。二人は口元だけを緩めて、軽く頷きながらお互いを凝視する。

そのままどちらも口を開かず時間が流れる。応接室から人が出てくる気配はしない。

「ローゼン様ですか？」

退屈に耐えかねてローゼンが欠伸をした時だった、声がしたのは。ゆっくりと視線を動かすと、ティファヌが来客用の待機室の前に立っていた。

早足で駆け寄り、ローゼンは尋ねる。

「ティファヌ、ここで何をしている？」

「イゼルナ第二皇女殿下にお目通りをしたく参ったのです。今日は都合が悪いと使用人の方に言われたのですが、どうしてもロマリア様がそれに納得されないので、無理に待たせていただいているのです」

「何、ここにロマリアもいるのか！」

驚いたローゼンだが、冷静に考えてみると不思議なことではない。品行方正だと帝国の貴族の間でも知られているティファヌだが、それでも身分は使用人に過ぎず、個人として皇女たるイゼルナに会うことなどできないからだ。ならば、他に皇女と遜色ない身分の人

間がいると考えるのが妥当だろう。

「ロマリア様は向こうのお部屋にいらっしゃいます。ローゼン様が皇女殿下のお屋敷にいらっしゃるということは、再戦の準備についてでしょうか？」

「ああ、そうだ。向こうにいるノースフィールド子爵が従軍することになって、それを殿下に直接ご報告するため参上した。今は殿下とレフィルと子爵が応接室で簡単な軍議をされているところだ」

「左様ですか。では、その軍議はしばらく続くということでしょうか？」

「どうだろうな、それは俺にも分かん。だが、もうじき昼食の頃合いだ。まだ続くにしても、一度そこで休憩を挟まれるのではないか」

ローゼンは空を見上げる。太陽は雲に隠れてしまっているが、それでも時期に正午だということは分かった。彼自身も空腹を感じていたからだ。

エリノーラへ向き直り、彼女に呼びかける。

「彼女は、ティファンヌ・リベラ。エロールの使用人で、非常に優秀な女性だ。子爵の衣類は、すべて彼女に任せるつもりだったが、これで手間が省けた。頼むぞ、ティファンヌ」

かしこまりました、とティファンヌは頭を下げる。自らエリノーラに歩み寄り、また一礼する。

「御用があれば何なりとお申し付けください。不肖の身ですが、お役に立てれば幸いです」

「ありがとうございます。私は、エリノーラ・ノースフィールド。一応はノースフィールド子爵家の当主だから」

「ノースフィールド子爵ですね。では僭越ながら、エリノーラ様と呼称させていただきます。よろしいでしょうか？」

「好きにしていいいわよ」

ありがとうございます、とティファンヌは言い、それからローゼンに提案をする。

「昼食まではしばらく時間があります。それまで私どもと共に、皇女殿下とレフィスト子爵をお待ちしませんか？」

それはつまり、来客用の待機室に入らないかという提案だ。結果的にはロマリアと顔を合わせることになる。ローゼンは当然ながら渋った。

「いや、私は大丈夫だ。ここで殿下をお待ちすれば、すぐにお会いすることができるからな」

ローゼンにしては筋の通った理由だった。これにはティファヌも、そうですか、と退く姿勢を見せた。乗り切ったな、とローゼンは胸を撫で下ろしたが、予想外の言葉をエリノーラが発した。

「中庭で立ち尽くしては、それこそ殿下に失礼でしょう。館内に居れば、お会いするにも不便はないでしょうから、ここは一緒にしましょう」

余計なことを、とローゼンは剣の柄に腕が伸びそうになった。先ほど言い争ったばかりなので、その仕返しだろうかと思ったが、まさかロマリアのことを知らないエリノーラがそんなに意地の悪いことをするはずもない。不運だな、とローゼンは諦めた。

ティファヌの肩を叩いて、待合室の扉を指さす。

「ロマリアの機嫌はどうだ？」

「少なくとも良くはありません。怒っているというより、拗ねているという雰囲気です」

それはそれで性質が悪い。所詮ロマリアはまだ子供だが、むしろ子供ほど拗ねると厄介な生物はこの世にいない。以前にエロールが、幼女が拗ねる様子はまるで天使のようだ、と力説していたが、やはり理解に苦しむ。

俺は絶対に年上だ、とローゼンはさりげなくティファヌの肩を叩く振りをして、その鎖骨の形を楽しんだ。

第三十一話　　女二人で

男性の使用人が運んできた紅茶を一口飲み、それからエリノーラはミルクを少し注いだ。甘さが増した紅茶を再度口に運び、淵から唇を話さずに室内を凝視する。

二人掛けのソファアが四組、一点を向き合うように置かれていて、その中央に一目で分かる豪華な机がある。さすがは皇族、名ばかり貴族の自分とは違う、とエリノーラは舌を巻いた。

エリノーラが座るソファアの正面には、ここまで道中を共にしたローゼン。左右のソファアにはそれぞれ、ティファンヌという使用人とロマリアという少女が座っている。

この三人の関係についてはよく知らないエリノーラだが、誰も口を開かずに目を逸らしていることから何かがあつたことだけは手に取るように分かった。

このまま無駄に時間が流れるかと思われたが、ついに一人が口を開いた。

「次の一戦では参戦なさるそうですね、バルトシュタイン辺境伯」

ロマリアだった。年相応の幼い声だが、それでもローゼンは気まぐずそうな顔をする。

「ああ、そのつもりだ」

「本当でしょうかね」

「……嫌な言い方をするな。可愛くないぞ」

「あなたに可愛いと思われても、まったく嬉しくありません」

この言葉に、エリノーラは紅茶を噴き出した。液体が器官に侵入して咽かえる。ティファンヌが無駄のない動きで汚れをハンカチで拭き、背中を優しく摩る。

「ごめんなさい、ティファンヌ。もう、いいから」

エリノーラはハンカチを受け取って自ら残った汚れを拭く。身近に使用人が存在しない生活をしていたので、慣れないことに戸惑っ

ただ。

二人がいがみ合う理由について、エリノーラはさりげなく尋ねる。

「ロマリア司教、少々よろしいでしょうか？」

「えっと、その前にあなたは？」

気まずい空気に飲まれて自己紹介がまだ済んでいなかった。抜か
ったな、とエリノーラは思いながら簡単に名乗る。

「申し遅れました、司教。私は、ノースフィールド子爵家当主エリ
ノーラ・ノースフィールドであります。この度は第三皇子殿下の御
身を奪還するために心血を注ぐ覚悟であります」

「そうですか、あなたも伯爵様のために――レフィスト子爵には改
めてお礼を申し上げないといけませんね」

ローゼンに視線を向けた状態ではつきりと言ったロマリア。言葉
こそは発しなかったが、確実にローゼンの口は動いた。可愛いくな
いなあ、と。

「私は、ロマリア・デイルファ・ラスチェーノです。父は現教皇、
今は第三皇子エロール・レイス殿下の妻です。正式な式はまだ済ま
せていませんが……」

「心中お察しいたします。殿下をお救いいたすまで、今しばらくの
辛抱を――」

形式的な言葉を口にしたエリノーラだが、本当にこれでいいのか
と悩む。例え教皇の娘であっても子どもは子ども。本来ならこんな
大人同士に用いられる無意味な言葉よりも、大丈夫だよ、と根拠が
無くても優しい言葉をかけて、それから頭でも撫でてやるべきでは
ないか、と。

このロマリアという少女の周囲にいる大人――ティファヌに声
をかける。

「ティファヌ、少しいいかしら？ 私からあなたに相談があるの
だけれど」

「私などでよろしいのですか？」

「ええ、あなたは女性で、それに歳も私と近そうだから」

私でよろしければ、とティファンヌは無駄の無い動きで立ち上がった。エリノーラも腰を上げて、外に行きましよう、と言った。

部屋を出る際にローゼンが引きつった笑いを浮かべていた。その口は、嫌がらせかよ、と言っていた。

先ほどまでいた中庭に戻り、エリノーラは切り出した。

「バルトシュタイン辺境伯のことだけれど、ずいぶんと嫌われているのね。彼は前回の戦に参加しなかったそうだけれど、そのことと関係があるの？」

「はい、先の戦がすべての発端でした。ロマリア様が、バルトシュタイン様に対して憎悪を向けられるのも当然のことかと」

「憎悪って……。私にはもっと可愛らしいものに見えたけれど？」

「ロマリア様は賢い方です。八歳の子供で、自身の怒りを制御できるなどそう簡単ではありません。実際には飛びかかりたいほど、バルトシュタイン様にはご立腹です」

この使用人は有能だ、とエリノーラは暫定的にはあるが、ティファンヌのことを高く評価した。彼女は子どもだと侮らずに、一人の人間としてロマリアのことを見ている。自分とさほど年齢が変わらない女だが、これまでに様々な人間と接してきたのだろうと思った。

遠慮なく凝視していると、今度はティファンヌから口を開いた。

「失礼ですが、ノースフィールド子爵の年齢をお尋ねしてもよろしいでしょうか？」

「私の年齢？　今年で二十八歳だけれど」

「婚姻はすでに？」

「いえ、ただだけれど……」

何を聞きたいのか、それとも特に意味のない雑談なのか、要領を得ないエリノーラは少し不満そうに返事をした。ティファンヌは、

そうですか、と言っただけでしばらく沈黙した。

中庭の近くを通った使用人が二人の姿を認めて、わざわざ立ち止まって礼をした。やはり使用人という生き物に慣れていないエリノーラは一瞬、表情を強張らせた。

その些細な変化すらもティファヌは見逃さない。

「あの使用人が何か？」

「いえ、何でもないわ……」

鋭い女だ、とエリノーラは身震いしそうになった。暫定的な評価が、確定的な評価へと推移した。

「ところで、この季節の大陸はいつもこんな気温なの？」

「気温ですか。ええ、この時期には私もこの服装でご奉仕させていただきます」

「そう、やっぱり大陸は暑いわね」

普段は気温が氷点下を下回る環境で生活しているせいか、この大陸での変化にまだエリノーラは適応できずにいた。

このままではいけない、と自信を律して、それから表情を意識して変える。

「私はこの大陸では子どもみたいなものだから、しばらく私のことも気にかけてくれないかしら。もちろん、最優先するのはロマリア司教で構わないけど」

「私でよろしければ喜んで」

ティファヌがいつもと変わらぬ動作で一礼した時、ちょうど待ち人が姿を現した。

「そこで何をしているのですか？」

くたびれた様子のリシャーナを連れて、イゼルナが中庭に足を踏み入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9009n/>

白い記憶 ～聖少女との日々～

2011年10月9日03時15分発行